1992

# 京城雜筆

正月號

【第九十五號】

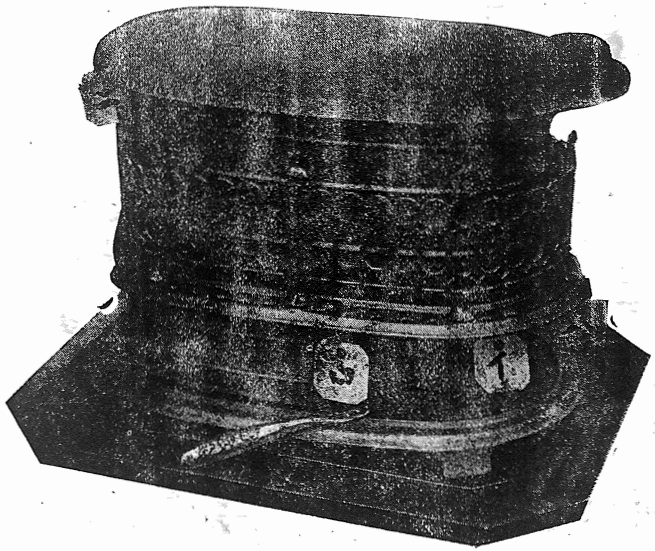
大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
昭和二年一月一日發行（毎月一回一日發行）

永樂町人 編輯

京城 泰東臺 貞省堂

# 富永式特許暖爐

歐米風の
生活樣式から
我等の文化生活に
ピッタリ適合して
遺憾なき迄
改造された
眞に
革命的暖房具
富永式暖爐



## 五大特長

其一　燃料の一大節約
（一多期中煉炭一噸乃至一噸半）
其二　絶へて灰塵飛散の患なし
其三　一般炊事に利用して尤も輕便なり
（飯炊きでも燒肴でも）
其四　毫も火災を起すの虞なし
（イクラ焚いても爐體灼熱せず）
其五　煙突掃除を繰返すの要尠なし

組合事務所　京城長谷川町
朝鮮商工株式會社　京城出張所
電話本二三二　同一六九
京城本町二丁目

發賣所　青々園茶舗
電話本千百十一番

奉

悼

京城雜筆社

社員一同

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には
鮮内産品使用御奬勵の
御思召を以て
三和高麗燒
漢陽高麗燒
三和編
製造元
富田商會へ
御下命願上げます
京城南大門通三丁目
電本三三〇九
同 本町二丁目
電本五五四

京都産業大学

◎銘仙と
毛糸◎

ちゝぼや

堀内滿輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

# 均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍衛戍病院御用
京城府各病院御用

平山牧場

電話光化門一三三番
京城東小門外

# 正月號目次


卯の歳……總督府囑託　松田學鷗氏
ざれ猫……朝鮮ホテル　伊藤龍氏
姉は二十で……赤十字本部　佐々木正太氏
二人の先輩の話……朝鮮郵船會社　吉村謙一郎氏
子供丙閣……京城消防署　小熊九萬造氏
水原行……木戸齒科醫院　木戸虎藏氏
麻雀哲學……東拓京城支店　渡邊得司郎氏
產業第一に直面して……京城府協議員　鄭完圭氏
清正の眞劍味……總督府法務局　土居寛申氏
内地みやげ……京城帝國大學　杉原德行氏
人生……ベニシラ洋行　神山喜一郎氏
白夜雜話……朝鮮圖書印刷　方台榮氏
普信閣……殖產銀行　矢鍋永三郎氏
巴里雜記……朝鮮總督府　萩原彦三氏
火の用心……日出商業學校　大山一夫氏
文化と沒交渉な貧民……京城府廳　早田伊三氏
惠比須……總督府文書課　善生永助氏
感じてゐる事ども……總督府警務局　伊藤泰吉氏
年頭危言……中央朝鮮協會　中島司氏
慢房閑話……京城日報社　丸山幹治氏
馬鹿……中央電話局　保阪久松氏
美化作業……一番ヶ瀬内科　一番ヶ瀬慶次郎氏
法廷微苦笑……京城覆審法院　伊藤憲郎氏
列車中の椿事……遞信貯金管理課　長谷部豐三氏
流行を追はぬ會……總督府遞信局　加藤寮平氏
ひのとうの歳……龍山電話分局　古河隆美氏
文樂座と朝鮮雅樂……朝鮮佛教團　淺川伯敎氏
芝居……朝鮮佛教團　前田昇氏
おらが春……井上收氏
庭球夜話……總督府鐵道局　林原憲貞氏
愚痴五つ……東洋生命支店　小林百代氏
農業文庫の卵……不二興業會社　飯泉幹太氏
京城昔ばなし……京城二昔會　藤村德一氏
山の芋……京城日報社　笠神志都延氏
且那と緣起……京城窯業會社　鈴木文助氏
競技所感……殖產銀行　高久敏男氏
饑禮讚……朝鮮鐵道會社　松永工氏
ドロー追懷記……釜山日報社　芥川正氏
映畫漫談……朝鮮每日新聞　小川二郎氏
動物學上の兎……總督府殖產局　吉田雄次郎氏
讀んだものから……東拓京城支店　松本光氏
府協議職を顧みて……京城府協議員　大垣丈夫氏
赤裸々……殖產銀行　戸津學氏
寒夜追憶……法學專門學校　鷹松龍種氏
酒禮讚を禮讚す……京南鐵道會社　井上賢太郎氏
おまわりさん……警官教習所　藤井國兄氏
門松の話……總督府遞信局　松嶋淳氏
正月雜記……　永樂町人

# 卯の年

松田學鷗

◎朝鮮に因緣深き虎の年も事無くして將さに終らんとする。來るべきは卯の年である。

◎老いぬれば千々にものこそ思はるれと古人も詠じてゐるが、實に其の通りである。私が過ぎ去つた卯の年を顧みても、種々の事を思ひ出さるゝ。そして私の知つてゐる卯の年といへば乃ち明治十二年己卯からである。

◎明治十二年己卯、此の年は、日本として芽出度き年であつた。先づ特に忘れてならぬのは今上天皇陛下が、八月三十一日に御降誕あらせられた事である。それから一月には梟示の刑を廢され、三月に勤儉の詔が下り、始めて府縣會が開かれ、四月に琉球藩を廢して沖繩縣を置かれ、五月獨逸皇孫ハイリツヒ殿下、七月には亞米利加前大統領グランド氏の來朝、九月學制を廢して教育令の制定があつた。斯く皇室の御慶事を始めとして、內治の改善、外交の圓滿に行はれたなど、芽出度き年と云はざるを得ない。

◎次は明治二十四年辛卯、これは前に反して憂ふべき事が多かつた。一月帝國議事堂が燒けた。五月に露國皇太子大津の變があつた十月には美濃地方に大地震があつた。こんな凶年はまたとはあるまい。

◎其の次は明治三十六年癸卯、此の年の事たる、叙せんとすれば感慨無量である、此れ他にあらず彼の露西亞が暴威を朝鮮に逞うし將さに己れの天下と爲さんとせし事である。當時朝鮮在留の吾が同胞は如何に切齒扼腕せしぞ。併し日本の敵愾心は國內に充滿した、出師準備は整つた、何人も只管宣戰の詔勅の下らんことを待つたのは此の年である。尙ほ此の年で思ひ出すのは、和歌詠進の御題を『新年海』と仰せ出し給ひし事である。今度の『海上風靜』に相似たる如きも感深い。私は當時日向に官遊中であつた、そして賦出したのは左の詩である。

×

歲華忽與鬼毫新。墨氣吹香碣潤春。雅頌可無鳴聖世。東風第一到詩人。

【二】

蓬萊日出鶴翩翩。清唳今朝達九天。（見）漾臺南連幌北。新年海穩去來船。

皇祖降臨偉蹟留。層雲維嶽仰宏猷。繡官況喜逢春早。鶯囀梅花日向州。

鳳城千里白雲端。想見佩環朝百官。一冷拜年間刺字。旅人夢與海鷗寬。

◎最近の卯の年は、大正四年乙卯であつた。別に特記すべき事も無い、但、朝鮮としては、鐵道一千哩祝賀式の擧行あつた好き年である。其後十二年延長約三百哩。

◎知らず來るべき卯の年は如何。希くば和歌御題の如く四海風靜かに逆浪惡波の起らざらん事を（大正丙寅十二月初一）

# 戲れ猫

伊藤龍

薄い幕を擴げたように朝靄が立ち罩めた京城の街には底冷えのする寒さが家々の軒端を掠める。

幕の中ほどに、圍脚を消して呆然と姿を現はして居る天主教の高い塔が、參宮路から見渡して見るとなにより目を惹いた。

眞實に冬の朝は眠不足な瞳のようにどんよりとしづみ勝ちである

×

朝餉の支度を徵す煙りが上がる頃には薄い幕も半ばたぐられて仕舞ふ。

×

起きようか寢ようか蒲團の中で愚圖付く思案も、冷めたい部屋の憐みである。

睡（ねむ）みに入る時は酒に醉ふた加減と、置炬燵の炭火と、もう一つなにやらとで、どうやら寒さも應えなかつたが、明け方になるとミツチリ身に泌み込む寒さで遣る瀨なさを痛感する。

×

『お目覺めにならなくて』と枕元で中腰に蹲んだ仲居の聲を聞くのも辛い。

×

無駄な線香を焚きたくないので七時の合圖に吹き消して見ると、蒲團から脫け出づるのが餘計嫌やになる。消されて立ちゆく後姿を蒲團の中から見守るのも氣障りな嫌感が込み上がつて來る。

×

やつと起き上がつて臨る路上は明るい。それだけに幌掛け人力車に有難味を知る。

×

もう一つ嫌やな事は御立替の多額にあること、これも圓窓の粹人が朝靄の京城の街を步むときに眼を擦するに等しい思案を構成して呉れる筆の雫である。

# 姉は二十で妹は十八

佐々木正太

姉は二十で妹は十八。と謂つても、私が何を言ひ出すのか、前以て見當のつく人は、恐らく此世に一人もあるまい。ところが、私は東京の瀧の川に現在住まつてゐる此の二人娘に對して感謝しなければならない、或事を出來したのである。二人の娘、それは他所の者で親戚の關係もなく、曾て見たことも、聞いたこともない。そんな者にどふして感謝しなければならないやふに成つたかと云ふに、實は今迄その事を內密にしてゐたんだ。けれども、それを其の儘に放つて置くのは、第一この二人娘に對して相すまぬやふに考へる。茲に思ひ切つて其の內容を白狀することにした。

數へてみると頂度一個月になる淺草の雷門から電車に乘つて上野公園に向ふとき、切符を買はふと思つてガマロを探ると、手あたりがない。どのポケットをさぐつてもない。サアーしまつた。大變だサッキ雷門の自動電話で十錢白銅を投じたまゝ、其所にある箱の上に置き忘れてゐた。シルクハットに氣をとられてゐたので、ガマロの方がお留守になつた。兎に角、そこまで引き返さなければならない。電車から降るには切符が要るも一つの紙入を出してみると、生憎拾圓札しかない。車掌に渡さふとすると、手を振つて、まだツリが出來てゐないと云ふ。どふも氣が氣でない。考へて見ると、雷門には、自動電話の直ぐ傍に、巡査派出所がある。正直な者だつたらそれを拾つて届けたかもしれないが、日中此の邊をブラついてゐる人には、いろんなものも混じつてゐるから、とても見込はない。と謂つたところで、それを放つて往くわけにはまいらぬ。ガマロの中には銅貨ばかりならいゝが、久しひ歳月の間、使ひなれた水晶の認印と、小さな雅印而もそれは刀畔先生の作つた陶印も這入つてゐる認印はどふでもいゝとして、あのみごとな愛用の雅印を失ふのは、如何にも遺憾の至りである。車掌君！僕は急ぐから此所で降して呉れ！無論電車賃を拂ふどころではない。飛び降りた。あたりに自動車もなければ、人力車も見當らない。テク〳〵歩いてゐると、ヤットのことで人力車の溜が見付かつた。オーイ〳〵雷門だ。急げ〳〵『且那どふしたのです？』出來るだけ急いで呉れ。ガマロを遺したのだ。『且那、それは大低ありましやふ、東京の者は割にアッサリしてゐますから。それに交番が直きソバにあるから都合好く届けてゐるかもしれませぬ』車は雷門に着いた。飛び下りて自動電話に這入らふとすると、その內外に五六人ばかりゐて、アッタ〳〵と騒いで居る。不思議な有樣だなと見ると、これは又、私と同じやふなことで、田舍の人らしひ一壯士が茶の中折帽を執つて其の中から出たところであつた。私は無言で其の人に代つて中に這入つた。南無參！ガマロは見當らない。外に出るが速いか交番を訪ねた。今先き誰れかガマロを届け出たのではありますまいか？『ハアさふです。届けてあります。あなたの遺したのはどんなもので、中には何が入れてありますか？』。シメタ！、アヽアッタ！、それは薄茶の皮で小さい丸形、銅貨が貳圓計りと印が二つ這入つてゐる。『それに相違ありませぬ。がしかしその品は今此所にはない。拾つたのは瀧の川警察署所管の人ですが、此の派出所は道案內とか、一般の警備に當るばかりで、遺失物などの取扱はやつてゐない。それで收得者にも其の旨を告げ、遲くとも明日迄に所轄署に届け出るやふに傳へてをいた。殘念なことである、十五分ばかり速かつたら、その人たちは此所にゐたのである』。ソウデシタカ、私も急いだつもりだけれども、その間に會はなかつたのは遺憾である。それでは收得者の姓名を聞かして載きたい。『サア申してよいかどふか、本人等が届け出ればキットあなたの手に歸るからその前に氏名を明すのはチョット考物である』。しかし私はそれを聞いてゐないと、明日迄も安心が出來ないから、どふか聞かして下さい。『それでは申しましやふ。收得者は二人の女で、府下瀧の川何番地何某。姉は二十歳、妹は十八歳。人品卑しからぬ相當家庭の者である』。どふも有難う。……：其の翌日ガマロは無事に戻つてきた。警察署を經て壹圓のお禮をした。けれども今の世に、而かもアノ生存競爭の激烈を極めてゐる誠に世智辛い大都市の眞中で、この二人娘の床しい行爲に依つて、之れを回復することが出來たのは實に感謝の至に堪へない。私は自分の不注意を恥づると俱に、茲に改めて二人のお方に拜謝し、併せて天に向つて合掌するのである。

〔 四 〕

感慨無量である、此れ他にあらずと、置炬燵の炭火と、もう一つな呉れる筆の雫である。

# 二人の先輩の話

吉村謙一郎

十一月二十七日午前十時二十分山口先生の來訪を受け是非何か書けとの御話。度々の約束もあり、皆樣の記事を拜見する許りでは相濟まん樣の氣がするので何か書く約束をした。丁度本日朝十時老川氏夫妻を停車場に見送つて歸つた許りである、老川氏は獨逸に二十四年間滯在し、歐洲各國の政治經濟に關し通曉すること深く、海外視察に出掛け獨逸に立寄つた者の多くは皆老川氏の厄介になるのである。京城に於ても獨逸で老川氏の厄介になつたものは十數人ある氏の該博なる智識と高潔なる人格と親切なる世話振とは私の接した人の範圍では第一と考ふるのである。

思ひ起せば昨年秋獨逸の漢堡で老川氏邸に押し掛け、夜の三時迄も獨逸の近況を承つたのである。私が知つたか振りをして人に說明する獨逸の狀況は皆老川氏の卸されたもの許りである。小賣屋は直ぐ品切れになつたり、ねぎ物になつたりするのである。歸朝後一年近くになるから最早や品切れになり、ねぎ物になつたもの許りだが卸問屋老川氏夫妻に會ふたのは精神的に如何に愉快であるかを想像するだに喜ばしいのである。老川氏夫妻に接するのは尊敬の念を失はず氣持のよいものである。日本人に斯かる人物が居るかと考へて氣が强くなるのである。特に一年未滿にして獨逸に又歸られる樣である。斯る人が海外の要所要所に滯在して居たら、如何に日本の爲に、海外に赴くものは勿論本國殖民地に居るものも心强く感することであらう。

本年夏東京大學教授筧克彥先生が當地に御出になつて高遠なる理想を青年達に說かれたのを知る人は知つて居る筈である。此の筧博士は實に偉くて親切で人格が高尙で神に近い人であるのは知る人ぞ知つて居るのである。私は大學時代今も昔も變らない怠け者であるが、思ひ起せば明治三十九年冬筧先生の行政法講義を二三ケ月休むだものだ。學校に出て居て先生の講義を聞いたり、人の筆記を借りて讀んで見ても判らない。そこで筧先生に質問をしたものだ。先生は二時間も三時間も親切に質問に應じて呉れた。しかし三日や四日學校の放課後質問したつて判るものでないから先生の宅に質問に出掛けた。先生は懇切に敎えて呉れた。四十年夏先生は家族連れで湘南に避暑に出掛けた。私は先生の避暑先に出掛けて行つた。僕はヅウ〳〵しいから先生の宅で泊つた先生は家族連れであるが二階で僕と二人で寢て呉れた。之は何でもない樣であるが一寸出來ない事である。先生が生徒かたづれて來て泊つて行くことを許すだに出來ない事であるのに、先生が家族と別れて生徒と同じ部屋でねることは中々出來ないことである。私は先生に對して大なる敬意を拂ふのである。先生は法律の末技を敎ふる人ではない。生徒の人格を陶冶するのである。法規の根本を敎ふるのである。

本年は私の敬慕する二人を京城に迎えることが出來たのを喜んで大正十五年を送るのである。

【四】

## ◈いろ〳〵帖

吉田莊一

◎商工新聞の社長齋藤吾吉君は操觚界での快男子だが、アノ經營至難の商工紙を、兎も角も採算點まで釣り上げた手腕は、同業者をあッといはして居る。

◎一寸會つたところでは、大ざッぱな樣だが、アレで仲々用意周到思慮周密なところがある。あの社屋など、外見からすると、古いバラックだが、內部は實によく整頓され、また、實にキレイに片づいてゐる。そして齋藤君が社長室に出入する途次には、全部の社員の執務振が、一目に見渡せるやうな仕掛になつてゐる。先生仲々凡でないのである。

◎商工紙經營の傍、農事經營をやつてゐる『我輩の本職は、百姓なんである』とは、同君の癖。そして一且メートルを揚げると、曰く『立派な社長が欲しいんだョ』『どこの社長だ』、『商工新聞のよ』『すると君はどうなるんだ』『百姓さ』『フン、そこで社長の月給は?』『五百圓はやらざアなるまい』ざッとコンナ鼻息だ。兎角に面白い先生である。

◎中央電話局の保阪局長、三阪通から通勤してゐたが、今度大和町の官舍に這入る。毎日電車賃十錢づゝあまる事になつたとて、來るとスグ貯金箱へチリン。そして出入記者に、懇々と貯金話をするので、一同『ソラ初まつた、遁げろ遁げろ』外套と帽子をフンだくつて一同すたこら。

よ』『さうかい分つたかい』『分　要らぬ心配をして居たが、何の事

# 小供內閣

小熊九萬造

滿艦飾の消防自動車に赤襟の署員、之は京城消防署の防火宣傳隊である、其の大將として予は市內各所を歷廻り最後に南大門小學校を辭して自動車に乘つた時、男女生徒から愛らしきサヨ〳〵ナラを向けられた、予も帽を揚げて答禮した、其の刹那『消防のおぢさん禿げてら〜』と云ふのが後方生徒の中から聞えた。ハテ不思議今まで宴會では若いと賞められ、同僚間でも藥鑵仲間には數へられて居なかつた筈、餘りに怪訝だから歸つてこれを妻に問ふと明朝まで待てと云ふ。

翌朝顏を洗ひ例の通り鏡に向ふと妻も其の後ろに立つた、別に小鏡一個を携へて居る。俄に稻川氣分になつて、ソチヤ何をするとやつたら、きのふの問ひに答ふるのでござんすと云ふ中早く合せ鏡になつてゐる。寫せば映る顏と顏でなくて顏と頭。其の頭の方は眞ん中に銅板が光つて居る。斯くも後頭部が禿げてゐたのかと始めて知つて落膽したが南大門生徒の正直さにも感心させられた。

又先日京日の光永紫潮さんの御案內で遞信局のラヂオ放送を務めた。防火に關してと云ふのだから職務上爲さねばならぬ譯、顯へ聲でヤット濟ませヤレ〳〵と家に歸つて座るや否ベルが呼ぶから掛つて見ると、孫の家の孫（鍾路小學の二年生）からの電話だ『おぢいさん、おぢいさんのラヂオ聞いたよ』『さうかい分つたかい』『分つた、けれど間違つてたわ、一ケ年三百萬圓の損害で一校の建築費が五萬圓なら三十校出來るつて云つたね、六十校ぢやないの』と來られて一本參らせられた。

役所にもラヂオがある。翌朝出勤してから何氣なく成績を聞いて見ると皆異口同音に結構で御座いましたと謹んで答へるばかり。他を云はぬ。矢つ張り小供が正直だと又小供の正直に感心した。

小供は正直、ほんとに正直だ、嘘僞りの準備を爲ない。小供內閣小供議院など云ふ案を出しても通過せぬものだらうか。

# 水原行

木戸虎藏

窓外に移り行く晩秋の景!!紅葉も綠も乏しい、落葉した樹木も少い。點綴する鮮人家屋も殺風景なものだ。座ろに內地の紅葉した秋の眺めを思ひ出さずには居られない。然し每日〳〵家に閉ぢ込められて郊外を見ない眼には珍らしく眺められる。三等席の堅いクッションも遲々たる混合の歩みも、たまに汽車に乘ると子供の樣にうれしい氣がする。

× × ×

高等農林に至る遠い路の上。

數十間先に一臺の車が走つて居る。考へる事もない儘に見て居ると、朝鮮服に朝鮮ワラジの俥夫君足は小刻みに動かして居るが、サツパリのろい。一歩に數寸進むか知ら、あんな車に乘るよりも歩いた方が氣がきいて居ないかなあと要らぬ心配をして居たが、何の事だ幾分間經つても僕の體との距離は短縮されない。

× × ×

初めの處ではあり京城の樣に所名番地と便利なものがないかして車夫君も家の見當さへつかない、い〳〵加減な處で車夫君門を入つて勝手口から尋ねると下女君丁寧に敎へて尙數丁の道をわざ〳〵導いてくれる。親切を謝する言葉がなかつた。隣に移つて來てもろくに挨拶もしない人のある京城でこんな圖が見られるか知ら。

× × ×

目的の家に著く、誰よりも先にヨチ〳〵と歩いて來る坊ちやんが眼に著く、抱いて見なくちやすまされない、丁度僕の子供と同じ位な生れらしい。

以前はそうでなかつたが此頃は誰よりも先に小供が眼につく樣になつた。パパになつたからだらう

× × ×

ハクッション、ハクッション歸りの電車で思切り大きな聲で無遠慮にやつた人がある、鳥を二三羽腰にぶら下げた獵歸りの內地人がつり革につかまつて居る、滿員なのだ。

『口に手を當てゝやつたらいゝぢやないか』唾液のシブキを浴びた一鮮人が其無作法をたしなめると二ツ三ツ舌戰を交して居たが、

『出るものは仕方が無いぢやないか、生意氣言ふな、文句があつたら相手になつてやるから電車を降りろ』

あゝ、何といふ無恥だらう、何といふ厚顏だらう、そして哀れな勇士だらう。こんな勇士が日本には少くないとすれば我々も國家も意を强ふするに足りるだらう。

（五）

# 麻雀哲學

渡邊得司郎

京城の生活はこの正月で丁度一年なるがその間に今迄經驗の無いもので覺えかぢつたのが弓と麻雀とである。これは一九二六年に於ける私の生活史に特筆に値ひするそれと云ふのは日常の吾々の生活は職業的に費やすことより塲合によつては娯樂的の趣味に費やす生活が時間分量に於て多いことがあるからである。

弓は碁や球突などと同じくあまり上達の跡を認めないが麻雀は人並の付合が出來さうである。碁や將棋になると理屈が多くて頭を使ひすぎる。結局强いものが勝ときまつて居る。球突も然りで合理的につけば先づあたるものと見てよい。理屈でゆけば誤差と云ふものが甚だ少い、つまりチャンスなるものが非常に少いのである。極論すると球突などは娯樂で無く技術となつてしまふ。

然るに麻雀の勝負はチャンスが半分要素を占めてゐるので興味を增すのである。勿論牌の取捨に巧拙もあり作戰もあるが札のめぐり合せによることが多い。魚釣や銃獵などに面白味が出て來るのも打てばあたる釣れば獲れると云ふ手際のみでなくて對象とする生物のめぐり合せに出逢ふ趣味が深々たるものあるからだ。

麻雀は花かるたに似た點が多いけれど上品な高尙な點に於ては比較にならぬ。花骨牌が傳說的に下品な俗なものとして取扱はれるのは其競技方法に於て幾多の缺陷があるからだと思ふ。日本の花骨牌は其の組みたてからして偶然の輸贏を專らとする博戲たる觀念を離れないのである。加之やり方に公正を缺く餘地が甚だ多い。この點から云ふと麻雀は花札と趣を異にし勝敗のプロバビリテーが偶然のチャンスに伴ふに整然たる計數的要素を加味し且つ競技方法が公明正大である。

麻雀をやると時間を費やすと云ふので排斥する者あるけれど苟くも趣味に生きやうと云ふ人士から見れば論外である。面白く時間が消費し得ればこそ有難味があるのである。

ほんとうの事を云ふと麻雀などよりなほ面白いものがあるかも知れぬが家庭的の娯樂には麻雀が適しい隨一のものとして之を推賞しこの世界的遊戲を生み出した中華民國人を傑いと思ふ。總て遊樂は碁や弄牌などより生物を相手とする魚釣や鳥擊ちの方が面白いと云ふ論者もあるけれど生物相手は深入りすると魚や鳥で滿足出來なくなる。『鳥よりも獸類更に進んで高等動物を相手にするほど愉快になり遂には人間相手に止めを刺すことになるが其の人間も男子よりは……』と云ふ結論になつても困る。

大官の麻雀賑ふ三ケ日

元且
京城雜筆
編輯部員
營業部員
囑托一同

## ◇風流裁判記

吉田莊一

【六】

◎京南鐵道常務の立川氏といふと、社員から師父のやうに仰がれてゐる人だが、その人事裁判と來たら實に人情に徹したもので、なるほどこれなら推服せられる筈だと肯かれる。

◎或る技術部の一人が、一夜醉つて同僚の社宅に押しかけると、主人不在、細君ヒトリぼつねんとして、あごを襟にうづめてゐる。

◎醉つてゐるからたまらぬノコ〳〵と坐敷へ上り込んで、酒を出させて飲む。飲だ擧句が『奥さんそこの三味をお彈きなさい』『三味はご免下さい』『何、御謙遜には及びません、どうぞ一ッ、どうぞ〳〵』その内どうしたハヅミか男の手が、婦人の襟の中へすべり込む。これがアトで問題となる。

◎立川常務への直訴に曰く『私の留守へ乘り込んで、女房のふところへ手をやりました、これは實に不穩と存じます。どうぞ嚴重な御サバキを』と、斯うだ。すると立川氏默つて聞いてゐたが、ポツリ〳〵口を開いて、『なるほど御尤もと思ふ、手を入れる奴が確に惡い、併し入れられる人間も、それ相當に隙があつたのう。見給へお台所の錠がピチンとおりてゐたら、泥棒猫は窺へない。這入る奴も奴だが、錠前を忘れるのも上等とはいへぬ。まア君この場は默つて引とり給へ……』これで問題一決したが、ドアの外で片唾を呑んで聞いてゐた若い社員『なールほど常務はうまいなア』

◎同氏も酒豪だが、一定分量に達すると『諸君失敬！』コロリ。

極結構な方法であると思ふ、米價を定め手間作を基礎として共同耕

品な卑俗なものとして取扱はれる

達すると『諸君失敬！』コロリ。

# 京城雜筆

## 産業第一に直面して

—農村振興の一策—

鄭完圭

農業は我邦政治經濟の基礎たるを以て是れが盛衰は實に國運の消長を支配すること甚大なるは今更多言を要せずして明かなり、然るに現狀の我農村は振興よりも寧ろ救濟を渇望する程甚だ疲弊の程度に陷り實に憂慮措く能はず、今の所何等具體的施設方策更に無きは誠に遺憾千萬に堪へず是れ直接は農村の爲め將又國家根本經濟の隆盛を圖る上に於て緊急方策を講ぜざるべからず、是れ何よりも先に自作農の維持振興を鞭撻奬勵するに如くものはないと信じて敢て斷言して憚らざる次第である。之れ何故ならば今日の農村が疲弊困憊せる原因が何れに在るかと言はば結局は農民の生活程度の向上に其の根本原因を置き、生産費を多く要する割合に生産高は少く從て收入不足する所から收支相償はざる爲め是れが直接の原因となり、地主は地主として收入は以前と同樣であるに拘らず、支出は日を追つて加はり、小作人は小作人で又肥料其他の生産費が過分に支出され而かも生産高は大差なく一方生活費は收入に比例せず。之れに依つて日は一日と困窮の度を加へ地主小作人を問はず共に〳〵窮困悲慘な狀態に陷りつゝあり。之れ豈に憂慮すべからざらんや。茲に於てか余は最も適切なる農村救濟策として自作農を鞭撻せしむること至極結構な方法であると思ふ、米價を引揚げる事を以て農村經濟を好轉せしむる如く云爲する向きあるも余は米價を引揚ぐる時は勢ひ他の總ての物價を昇騰せしむることになる、故に之れは妥當な方法でないと信ずるのである。自作農增加は我農民の現今の資産の狀態にては容易に出來るものでないと世間は異口同聲を以て是認するが、余は決して簡單に且つ容易には到底出來るものでないと片付けたくない、成程之が鞭撻實行は其れ相當困難なる大事業には相違ないが其實行方法の如何に依つては決して左程の困難なく實現し得らるゝものと思ふ。之れに就き余の見る所では現今地方に於ける農村の狀態は比較的孤獨の生活を營むを常として居る、已に孤獨の生活を營んで居る以上は商工業者に比し相互の團結を要する事は謂ふ迄もない、是が所謂田園生活と都市生活との相違をなす最大原因であり疲弊の度を增す起源である、然るに之を振興せしむるには一時的に富豪の資本の力に依り解決することも出來ず且つ官力を以て救濟する譯にも到底行かないものであつて只微力なりと雖も農民自體が共力共助の精神を以て農村專屬の機關たる組合を設立するにあり、之れが設立の目的を達成するには現今の鮮人小作人の窮境より察するに物質を醵出して組合を組織することは極めて可能性乏しく只管團結を鞏固にして若干宛の勞務を以て資力を集積せしむる以外に方法なきものと確信する。其の最も適當な方法としては一般の地主は各自小作地管理者たる朝鮮小作慣例に依る舍音をして各村落毎に小作地配列の中心地を選定し共同小作地を定め手間作を基礎として共同耕作を爲さしめ以て漸次農村の富力程度を漸進的に隆盛ならしむるを以て適切な良策と思ふ。

## ◈霜を履んで

石川利夫

◎師走初めの日曜に、麻浦の火葬場近くに新居を相した飯泉さんを霜を踏んでお訪ねする。

◎おん大マダ多眠睛を覺えず、おやすみ中とあつて、お孃さんの御案内で客間に通る。展望もよし構えもいと瀟洒である。暫くあつて『起きたから君も一緒に風呂に入らう』とある。風呂に入つたらあとが寒いので、平に御辭退申上げる。するとお孃さんのつくられた煖かいお蕎麥が出る。これは實においしく頂いた。その中『イヤー御苦勞樣！』と例の元氣な顏。そして『是から書くよ』と、ペンを執ると、マルデ一瀉千里。見る〳〵うちに一文を草し終る。

◎飯泉さん曰く『此所は燒場の風がすい〳〵とやつて來る、君面白いのは人を燒く臭ひと朝鮮銀行の札を燒く臭いとは、妙におんなじだ……』亦曰く『君、雜筆はアレでやつて行けるかね……ふん、ふん』

◎大にお振舞にあづかつて、ドンが鳴つてからおイトマする。蕎麥のお禮でも何んでもないが、お父さんとお孃さん、令息達の間柄がマルデ仲のいゝお友達のやう、妙な形式は一切なく、家を擧げて春風のやうにいつお訪ねしても和氣靄々。山を下り乍ら、『あなたは屹度長生きしますよ』

# 京城雜筆

## 加藤清正の眞劍味

土居寛申

△文祿慶長の役は秀吉の試みた大賭博であつた……大なる遊戯であつた……或はさうでなかつたかも知れぬが私は一應さう見て置きたい。

△行長は内心講和を志しながら消極的の戰爭を進めて平壤に躊躇して居る間に一敗地に塗れた。

△清正は常に不利の方面に廻りながら地理言語不通の地に黠軍萬里兀良哈まで攻め込んだ。而も攻略に止まらず過ぐるところ必ず善政を布いて居る、征明の雄圖を眞面目に實行せんとした心持が讀まれる。

△清正が秀吉の大賭博を如何樣に解釋して先陣を承つたか知らぬが彼の爲した事は兎も角も眞劍であり眞面目である。

△歴史を繙いても小説を讀んでも芝居を見ても琵琶を聞いても清正の人格の表現は常に誠意眞面目其のものである。

△私は曾て熊本城の上に立つた名城といふに比し石垣の用材の小さいのには驚いた、然し是は石の面を外にせず小口を見せて平積みにしたものだといふ話を聞いて成る程と思つた。

△天守の柱と礎石との間に鯨の脂肪が敷き込んであつた。又小屋組の要部には油の注入設備があつたといふ話を聞いて白蟻の多い九州の建物に對する彼の考慮に感心すると同時に明治の工學博士が洛中某寺の柱にある風穴を塞いで大事の柱を白蟻に食はした話と比べて皮肉の感を禁じ得なかつた。

△十年の役に城内櫨の床が孝塞で作つてあつたことを發見したといふ傳説を聞いて蔚山籠城の彼を思ひ出さずには居られなかつた。

△一度天守に立つて肥後の大平野を一望した時には道路の開通と行軍との關係は遺憾なく研究せられて居るのを見るであらう。

△一度水を落せば肥後の平野は畑となり一度水を注げば水田となる、水利の便極まる狀態を見ては肥後米の聲價高き所以決して偶然でないことが分る。

△曾て名古屋城門の前に立つた時、明治二十四年濃尾大地震に一分の狂ひも來なかつたといふことを聞いて成る程とうなつかれた。

△清正は武將としては定評があり過ぎる、工學農學經濟財政學の大博士として見ることに異議があるであらうか。

△然し私は武人として又學者として驚歎するよりも其言行を一貫する眞劍味に敬意を拂ひたい。

△私は最近蔚山城を一見して嚴多糧食の用意なくして未完成であつた彼の拳大の城に五萬の大軍を引受けて毫も屈しなかつた大和武士の意氣に泣かされたと同時に是れも清正の眞劍味の預るところが少くないことを感じた。

△蔚山の難を聞くや西生浦に居つた清正が淺野彈正の委囑捨て難しと單身小舟に掉して蔚山城に入り幸長と難を共にしたる如き律義の行動は誠意がなくて出來ることでない。

△私は續いて南方六里の西生浦に赴いて清正の本城を見た、何れ一時的防備の假陣屋のことであるからと思つて大した期待は持たなかつたが、一度城内に足を入れて驚いた、築城の宏大なる眞に驚くばかり全く意表に出でた。私は天を摩して聳え立つ天守跡に坐して暫く考へた。結局清正の眞意は單に邊境を一時的に防備するといふよりは永久に占領したといふ心持であつたに相違ないと斷ずるの外はない。何といふ眞劍さであらう何といふ眞面目さであらう。

△徹頭徹尾眞面目な清正の態度私は今の世にこんな人が何人あるであらうかと考へながら城を下つた。

## ◎人間雜記帳

山口のぼる

○

大垣丈夫翁をお訪ねすると、大抵猫を膝のところにかい込んで、いろんな面白いお話が出る。

○

猫がお好きなんですかといふと翁言下に目を細うして『猫と名がつくと、桃割れでも、銀杏返しでも決して惡くないね、この頃開があると、こつちの猫を可愛がつてゐるが、イヤこいつも仲々うい奴でね』

○

地方法院の宮本判事『琵琶判事』といふ、別名がある。こと程左樣に琵琶好きで、日曜などに訪問すると『ウ、ウよいところへ御入來僕の近ごろの藝術の發展振をお目にかけやう』斯くて、べべーンと初まり出すと、習つただけは根こそぎ御練習。先づ十時頃（夜中）までは保羅相叶はぬ。客ベソをかいて曰く『ヤレ〳〵今日の日曜はとう〳〵棒かな』

かりせば我家竇としてシーボルトの手蹟等が傳はりたるやも計られぬ。

ほず大刀を拔けば竹庵の首はコロ

# 内地みやげ

杉原德行

長崎驛にて。醫者。

『ヤア』『ヤア』と彼此の挨拶

彼とは學友A教授、F助教授、H助教授、K助教授、私と三ヶ年振りの再會である。『ヤア』の掛聲で萬事挨拶濟み、あとは昔ながらの毒舌の総攻撃。

『昨日來るといふ電報だから、昨日は大學の自働車を一日中占領して居つたのに、一體何處にまごずいて居つたのか』

『君は來ぬし、獨占の自働車をドラブする所なく、といつて大學からは、無理に提供させたので』

『昨夜君の歡迎會を開いた、支那料理はうまかつたよ』

一日遲延した爲に油をウント搾られながら醫科大學へゆく。

『長崎名所を見せてくれ』

『夜のか』

『未だ晝だよ、然も此處は大學で、己は公用で來て居る』

『フン馬鹿に固いね、獨逸でも其通りだつたか』

『昔から公私の別と晝夜のけじめはつけて居るよ』

出島の跡、切支丹の教會堂からシーボルトの舊跡へ行く。路上私の聯想が糸をたぐる。西洋文化輸入地の長崎!!蘭學者の努力!!先覺者たる醫家!!。

私の曾祖父瑞泰は長崎へ笈を負ひ、業成りて歸路馬關海峽を渡り本島へ着いた事迄は知れたるも後は杳として不明。恐らく刺客の双の露と消えたるならんと。其變なかりせば我家寶としてシーボルトの手蹟等が傳はりたるやも計られず。曾祖父には憂國の血がみなぎつて居つた事だらう。眞の國手。私の胸中は喜悅を以て滿さる。我々醫者が文化の陣頭に立つ可きものだと。

× × ×

『内地に居たまらず朝鮮三界へ落延びて僅に妓生を相手にドブ酒を飲んでのたくつて居る先生だ。ウント米の汁を飲ませてやれ』

其夜の私への歡迎會の席上の挨拶の言葉。

『アラF先生の口の惡さ、あなたも醫者、この人(私を指す)も醫者、私は藝者、醫者藝者役者の三者は御互に仲よくね……』

三舎もさけん勢で滔々と辯ずる藝者松丸の論によつて、到頭醫者も藝者社會と同等のサークルへ引入れらる。

宿に歸つて床に臥して思ふ『醫者藝者役者!!』醫者もやはり人氣者の仲間入すべきものかと心細くなる。

× × ×

よくある御家騷動の講談。

『竹庵其方毒藥調合致さずば陰謀明した事なれば生かしては置けず、それとも調合致さば當座の褒美として五十兩。我等計畫首尾よく成就の曉は三千石の譜付』

命は惜し、金は欲し、到頭竹庵毒藥調合して陰謀組の武家屋敷から放免。

竹庵の獨言『運が開けば開くものだ、一寸毒藥調合して五十兩。之で家内へ友禪を買つて、まてまて其内殿樣は御歇佛、御妾腹樣が殿樣となられる、この竹庵はたちまち二千石の主人公』

鐵から覆面の武士二人物をも言はず大刀を拔けば竹庵の首はコロリ。

『これにて發覺の恐れなく』

『上々首尾』

講談に出る醫者は誠に不甲斐ないものだ。

× × ×

私の叔父に三人の醫者がある。一人は田舍で開業、門札には陸軍三等軍醫、正八位と麗々しく掲げてある。村人は藥代を正月と盆の二回に支拂ふ。

『今年の十月の長男の風邪は御蔭樣で三日で全快しまして』

『それは結構でした』

主治醫たる叔父はすつかり忘れて居るが村人は仲々記憶がよい。

『私は今年は健康でした。家内は産後で十一日御厄介になりまして』

藥代を持參してきた村人は奥坐敷へ通されて恐縮しつゝ語る。

外面は見渡す限りの銀世界で、犬の子一疋居らぬ、短い冬の日も早や暮れんとして居る。

叔母が茶を出す、村の有力者の時は薄茶、さもなくば煎茶。菓子も從つて羊羹か乾菓子。

村人は一通りの話が終つてから藥代を支拂ひ、持參の白米一升を差出す。白米一升が診察代である醫は仁術!!村夫子の家は平和だ。

× × ×

私の先輩N博士は神戸で開業して居る。

『阪神の金持の番頭はきつと云ふ……先生御主人の病氣をあの博士にも一つ診せてやりまほか……と、然し京都はそうでない……診て戴きませうか……といふ』

『では何故神戸で開業したのですか』

『やはり収入がよいよ、番頭の

# 京城雜筆

云ふ事など願にさはつたのは大學出の當座さ』

N博士は既に醫者松丸の論じた『醫者、藝者、役者』の仲間入りして居る。之が開業術か?。

× × ×

『御嬢樣の御病氣は愚老チト腑に落ち兼ねますが』

と良庵先生がいへば一粒種の姫君の病氣で心配顔の老夫婦と忠義顔の番頭が

『とおつしやりますと』

咳拂ひ一つして良庵

『愚老の診立てによりますともしや御嬢樣は四百四病の外の病かと思はれます』

乳母の智慧、番頭の活動。たちまちにして姫君の病氣全快。口さがなき町娘の『御醫者樣でも有馬の湯でも』と歌ふ俗歌を聞き流しつゝ、高砂の浦に戀の舟を浮べて御家益々繁盛!!。

良庵は大名醫と仰がれ別収入の方が多くなる。

× × ×

『醫は仁術』と威張つても御醫者が訴へられる世の中。私は研究室に閉ぢ籠つて『イモリノクロヤキ』の論文作成に研究の歩を進むべきか。

## 人生

神山喜一郎

源濁りぬれば流清からず、天曇れば地暗し（日蓮聖人の遺訓）

日が照ればこそ草木も伸びる。月の加減で潮も滿る。人は歩けば棒に當ると云つても、そこに理想がなければならぬ、理想は無限で目的は一時だと云つても。歩めば棒に當るのも理想に誘はれた路草であらふ。そして當つて喜ぶのも人生。當らずして泣くのも人生。偖は運命を呪ぶて、自我を振り舞ふのも人生。いろ〳〵である。種々である。服裝で見ては乞食も人生。大臣も人生。兎角差別が世の進むと共に、繁雜となつて來て、吾々を驚かす。驚かされて自分を忘れて居る人もある。驚いて自分の理想と知らぬ間に握手した時、人は大に悟る、自覺する。自覺して、茲に光ある人格を作る。此人格によつて出づる流れは靜にして清らけく無限であらう。天曇つても闇夜に歩むとも自働車の光りが知らぬ内に自分の前にある樣に光る。この光を受けた人は後世にその名を留め樣とする。善男善女は集つて餘光を望みたがる。斯くの如き人格を備へた人は古來釋尊を以て第一者と吾々は仰ぐのである丁度日が照つて草木が伸びるやうに釋尊の御光で吾々は無邊際の境に自分の伸び得た實相を見られるのであらう。恰も月の力で潮が干滿となるが樣に吾々は釋尊の御力で如何樣にでもならうと決心するのである。而して此の決心の息が知らぬ間に人生の相對から脱して絶對に入る道へ導いて行く、茲に人格が出來るのであらう。

絶對に入れば差別はなくなつて了ふと云ふのである。これ眞の人生でなければならぬと思ふ。而して差別に動く人達には流れの清きを見るがやうに光明の光に浴して喜ぶやうに感ぜしむる唯一の人生でなければならぬものであると信ずる。（備忘錄より）

## ◈無駄ばなし

吉田莊一

○

この間大浦貫道さんが、工藤武城氏と訪ふと『君、あの地所をどうするつもりだ』籔から棒の地所話に、大浦さんボカンとしてゐると、『イヤ、その忘れッぽい所がいゝ、フム人間は少しとぼけた所があるのがいゝ、ふーむ』大浦さん何のことか遂に要領を得ない。

○

そこで、よく〳〵聞いて見ると工藤さんの邸内に、ざつと三十六坪といふあき地がある。それが邸内第一の形勝の地と來てゐるので外の人間には借したくない。まー大浦氏か、松本永樂町人……この二人の中だと、工藤さんヒトリで決め、そこでイキナリ解決を迫つた譯。大浦さんにして見ると、只今寢耳に水の話、いきなり濡れ手で尻ッぺたを引ッぱたかれたやう飛び上つて『ハハーン、ヤ、その儀で……』

○

脇判事さん、中學時代は頗るの豪傑で、一人で一升德利を征討して、ビールを飲む連中を散々コキ卸ろしてゐるかと思ふと、いつか車座にせり込んで、一ダース半を一人でペロリ、友人おぞ毛を振つて曰く『オイ、あいつと飲むなよ、第一不經濟でいかん』

○

中村烏堂さん、何十羽といふ鷄を飼つてゐる。そして養鷄話になると、『何、何んでもないですよ鷄の聲を聞いて、その何をいつてるかが判る樣になりさへすれば』

話である。サゾ今晩は安眠が出來るだらうと云つて一家眷族が珍重策として産兒を制限してゐる。畜業の發達は其國民の努力に依つて

# 白夜雜話

方台榮

馬車馬の如く毎日雜務に忙殺される私に、文を綴ることは全く難事中の難事である。しかし過日松本様から筆を執ることは所謂動中靜を得る一の修養であると一喝されました。コノ難有い一喝が卽ち京城雜筆社の名譽記者たる辭令と心得まして名譽記者三百五十何人の御仲間に入り白夜の雜話を試みます。

先般歐羅巴に飛脚的旅行中重に丁秣を見學したるも、丁秣紹介は本府の渡邊、松村、三井諸大家が既に文筆に講演に委曲を盡せるを以つて私は茲に雜觀的のものを述べて見ます。

◇催眠劑の米　米を以て常食とする吾々東洋人には別段米に鎭靜作用の効能があるとは思はないが歐羅巴人とり分け北歐丁秣人は米は鎭靜効能が慥にあると新藥として非常に珍らしがるもの丶一つとなつてゐる。私が丁秣コペンハゲンの大佐デューズ氏方へ滯在中、或日大佐の妻君が『今晩の夕飯には餘程珍奇なものを出すから』と前振が頗る大きい。私は何か山海の珍味でも出すのかと大に期待して居たら、朝飯の時から仰山に豫告したのは白米の御飯である。北歐丁秣で米の飯は珍奇には違ひないが、余には左程珍味とも思はなかつたが、丁秣人の申分は本當に珍らしかつた、連日酷暑で安眠が出來なかつたから、今夕はワザワザこの米の飯を御馳走する、との話である。サゾ今晩は安眠が出來るだらうと云つて一家眷族が珍重がつて舌鼓を打つてゐる。

所變れば品變るで、米を常食とする吾々の頗る陳腐な米が、丁秣人には一種の催眠劑として盛に用らるゝ。丁秣人から見ると米を常食する吾々は悉く安眠熟睡する譯だが、米食する吾々にも夜却々眠れず、神經衰弱に困憊するハイカラ病人も多いと云つたら是又珍奇に驚くであらう。彼地ではコーヒ、ココア、ヂスー等の興奮するものを常用するので、睡眠がヨク出來ないとなると大抵の家庭で米の飯を喰べるので、コペンハゲンの食料品店には紙袋に五合位入れてヂヤパンライスとして賣つてゐる。

◇產兒制限　丁秣は總面積四萬三千一七平方キロメーター、人口三百三十九萬餘を有する北歐の一小國である、十數年前より產兒制限を實行してゐる。丁秣としては理想通り農村を整理し、最善の能率を發揮して年輸出額が邦貨十一二億圓に達してゐるけれども、到底人口增加とは比例がとれない、ソレであるから殆んど公々然行はれてゐる。從つて中流以上の階級では二人以上の子女を有すると仲間から豚と云はれる位だソウである。其避姙方法も婦人が極めて手輕に行つて別に醫師の厄介にならずにゐる。一度名士に招かれて往つた時に此問題を忌憚なく聽いて見たら、曰く『誰も子孫の繁榮を喜ばず人倫に反した事を好む筈はないけれども、我國の現狀としては實に萬止むを得ない、我國の財政は大戰の戰禍を蒙らなかつたので比較的餘裕があるとはいへ、國土許りは自由に擴張も出來ず年々人口が增加するから先づ當座の對策として產兒を制限してゐる。產業の發達は其國民の努力に依つて解決せらるべきものだが、一方人口が無制限に增加しては、鱸てコレが亡國の原因になる』と悲淚と共に語るを聽いて心から同情せざるを得なかつた。

◇無宗教者が二萬人　丁秣人は同じスカンチナヤビヤ人中でも溫和篤實な人種である、殊に彼等はクリスチヤンライフを以て人生生活の最高の現想としてゐる。從て全國民の中に無宗教者は僅に二萬人足らずで悉く信仰生活をしてゐる。丁秣今日の成功したる原因は國民高等學校の農民教育とか組合制度の發達とか大市場を控へて居る地理的關係とか理由多岐に亙つてゐるけれども、私は尤も其の最大の原因は彼等の信仰的生活を培かつた、宗教の發達にあると斷定する。現に殺人强盜の如き刑事々件の如き全國を通じて二三年に一二件あると耳にしては何よりも羨望に堪へない。警察官の如きもコペンハゲンを朝から晩まで歩いて交通整理をする巡査以外に餘り見當らない。毎日の如く新聞紙上に殺人强盜の報導を見る東洋の世相とは殆んど比較にもならない。

## ◇寂しいなア

山口のぼる

この間消防署の大武納といふ十五年勤續の消防手が死んで、鶴松寺でその葬儀をしたが、ヒドク淋しいものだつたので、小熊消防署長『本人は京城の防火には、隨分功勞があつたんだが、せめて町總代の人々だけでも顏を見せて貰ひたかつた、あゝ世の中は實に寂しいなア』

# 京城雜筆

## 普信閣

矢鍋永三郎

私は松峴洞の舍宅から南大門通の殖銀への往復は大抵徒歩でやつて居りますが、春夏秋冬の變化又は朝夕の氣分を此の十五分間の往復に面白く味ふので、三伏の暑中でも嚴寒中でも徒歩を止める氣になれぬ。自働車の砂塵に襲はれた時には市街道路の施設に付て思ひ・に耽りながら、我家に歸へることもあり、一間半間口の家に『大陸硝子店』と大看板をかけてあるのに氣がつき一軒一軒と看板を調べながら銀行の門を行き過ぎんとすることもあり、問題の疑點が頭の底にこびりつき途中で遇つた人に失禮することもありました。併し何を見ると云ふこともなく眼の前に現はるゝ出來事を見ながら何を見たと云ふ程の記憶もなく四時に表はるゝ其の時其の時の事象を其儘に見ながら朝夕の徒歩を味ふのが普通であります。

南大門通りには銀行會社が集まつて居り車馬の交通も頻繁であり將來大建築物も增加する傾向が見へる、此大通りが鍾路の四辻を通りぬけると電車も單線となり市街も遽かに淋しくなりますが、中々特色のある通りで朝鮮日報社あり朝鮮圖書株式會社、漢城圖書株式會社あり、鍾路中央市場あり、ソウル青年會、京城青年會、勞働會等、等の看板を連ねたる黃色の建物もあり、將來慶福宮、昌德宮間の道路が完成し、電車が開通する時かくれば此通りも面目を一新し活氣ある市街となると思はれる。南大門通りと十字をなす鍾路の大通りは其の巾と長さと其の眞直な點に於ては世界大都市を通じても數指を屈し得るに過ぎまい。若し道路が完成し建物が改造せらるゝに至らば申分なき大通りとなることと疑なし、何んと云つても此の鍾路の四辻は京城の中心である。此の辻の中心に立つて四方を望む時は京城に不似合なと思はせる程の壯大さが現はれる。

此の四辻其物を眺めて觀ると四辻の一角には白色四階建の韓一銀行が巍然として聳へて居る、其の筋向の一角には三光商會あり、大昌貿易株式會社と京城商會とは相對して他の二角を占領して居る、唯韓一銀行を除く他の三個の建物は此の地點の建物としては貧弱に過ぎる、茲に哀れを止めたるは鍾路の鐘堂普信閣である。白色の韓銀の大建物と新築中の赤色錬瓦四階建の建物との間に狹ばめられ、其の上無遠慮なる揭示板三個迄も其の前面に建てられて居る。鐘堂として見ればも少し威儀も正して見たかろう、出來る事なれば居心地のよい所に轉居もして見たからう。其の古色を見るに付けても其の鐘の物語を思ひ出すにつけても堪へ難き感が起る。

此の辻の地上を眺むれば電車の軌道が縱横に光かり自働車・自轉車、人車、牛馬車雜然として遲速を爭ひ、そして都會生活に慣れぬ人々が車道を悠然として徒歩して居る。仰げば新舊大小の電柱亂立して電線蜘蛛の巢の如く鳥でも飛べなからふと思はれる。

此の辻で思ひ出さるゝことがある、それは或夜私が家族の者共と此所の安全地帶に立つて電車を待つて居た時のことである。其の安全地帶に芝居に出て來る乞食其儘の理想的形態をなしたる乞食がやつて來て物を乞ふのである。後に向けば廻つて來て又物を乞ふ、二三歩他に移ると又追ふて來る、人に觸れる許りに迫つて來る、小供達は怖れて泣きそうになる、此の乞食は人をいやがらせて物を强要するかに見ゆる。幸に其時待つてゐた電車が來たのでそれに飛び乘つてやつと安心した事がある其の事である。

こんな事を思ひながら默々として歸へる日もあつた——。

## ◈合財ふくろ

平田久雄

○

吉川電通が東京へ歸る二三日前殖銀重役室を訪ふて『僕と今村螺炎氏が金剛山を見に行く約束をしてゐたが、とう〳〵駄目になつてしまつた』といふと、森理事『やつぱり金剛山は名山ぢやわい』、『ナンデそれが名山かい?』『だつて、公等のやうな猥談家を、寄易に寄せつけない所、山靈も凡でないぞ』電通哄然と笑つて『チヨツ、またあげ足を取りよるワイ』

○

京南鐵道の井上支配人が、列車中で、渡邊獨眼會頭に名刺を出して、初對面の挨拶をすると『あゝ〳〵、よく知つてゐます、琵琶が上手で、新婚の奧さんがそれに聞き惚れて、お台所でビフテキを黑焦げにしたといふあの井上さんでせう、ワシも三日ほど金剛石を習つたことがある。一ツ京喜久で鳴きくらべをやりませう』……に井上支配人『イヤこれは〳〵』

【一二】



酬ゆる國家の情なるべし。

午後五時となれば往來すでに、

リゼイの大路を歩む女は多かれど、モンマルトルの夜の眼ひに行

# 巴里雜記

萩原彦三

巴里の秋は早かり、九月二十日と云ふにシャムゼリゼイのマロニエは落葉しつくしつ、朝な夕なの風うすら寒く、外套ほしくなりぬ女は皆毛皮の襟巻かつぎつつ行くシャムゼリゼイは巴里入の威張る如くかほどの大路は外に無かるべし、都大路と云ふよりも公園否むしろ森の中の大道路の如し、數列に植えたる兩側のマロニエ歳ふりて立派な森をなせり。ベンチを數多く置いて休むに都合よろし。子供相手の山羊が曳く車、馬丁の小さき少年なるも可愛らし。人形芝居の小屋もあり。邯鄲夢の枕のようなのをやつて、日曜の午後靜けき日ざしを浴びつつ、豆をころがす如き忙はしき自動車の行列を餘所に子供の喝采を博するなど、むしろ羨ましき閑境ならずや。

又風船、風車、輪まわし、駄菓子など子供相手の商賣をする老婆の小屋などところにあり。

行きかふ子供の、母の手にすがりて、駄々をこねつつ、風船ひとつ、せしむるなど、可愛らしき罪をつくる。

チユイレリノーの庭に小さき池あり、玩具の帆船を子供に賃貸して、遊ばしむる商賣の老人もあり此の公園もとは王宮なりしが爲めにや、今も老軍人、軍服をつけて警戒す。赤いふとき筋をヅボンにつけたるは朝鮮の警視らしく、長大の飾刀を曲つた腰にぶらさげたる胸の勳章と共に、過去の勳勞に酬ゆる國家の情なるべし。

午後五時となれば往來すでに、ほの暗く、街のともしび耀き初むマロニエの稍をわたる風うすら寒くして、行人みな歸りをいそぐ。ソルボンタ大學に近き、サンミカエルの大通り、一山何錢かの露店も客足さびしく、町の角に賣る晩い燒栗の、呼び聲までも、どうやら聞き馴れたる朝鮮音に似て、わびしき旅愁を感ずる也。

巴里美人と世にいひはやせどもいづこにか之を求めむ。シャムゼリゼイの大路を歩む女は多かれども、モンマルトルの夜の賑ひに行きかふ女は多かれども、背のひくき、足のふとき、殊に年老ひたる皺顔に、土色のおしろひ、こてこてと塗り立て頰紅眞赤に染めたるなど、むしろ恐ろしき程なり。

巴里の巡査は意氣なもの、マントを疊みて肩にかけ、稍そり氣味に、白く塗つたる指示棒を右手に握り、左手は輕く腰にあて、織るが如くに行きかふ自動車を右左と操るところ天晴れなる姿なりけり。

# 火の用心

大山一夫

『一筆啓上。火の用心おせん泣かすな。馬肥やせ。……云々』の消息文は、文範例として、學生時代によく聞かされたものだ。成程單刀直入で、無駄がない、至極要領を得てゐる。他出して居ると、家のことが氣にかゝる。多は尙更である。火に親しむ、ともすれば火事を出し易い。

正月早々火事話は緣起でもないが、人間樣は仕方がない、一夜明けるとのんびりした氣持になつて緊張味をかいでくる。屠蘇をあふる、油斷をする、火の始末がわるい、火事を出す。火元となつて他を類燒でもさせれば、それこそ大變である。近所近邊は申すに及ばず、多方面に非常な御迷惑をかける。あそこが火元で燒け出されたんだと、孫子の代まで言はれ、所謂怨府となつて、顔出しも發言も出來ない始末となる。結局は住所を移轉せねばならぬことになることもある。ああ、愼むべきは火である。

火事のシーズンには、各人各戸格段の注意、即ち一筆啓上の火の用心が肝要で、お互に火事を出さないように、火元とならぬようにカツチカツチ、カチカチ！。

火事の恐ろしい事は千人は千人萬人は萬人、知つて、知つて知りぬいてゐながら、火事の根絶しないのは、一體全體、どういふ譯かやはり我身の油斷が生み出すのである。油斷大敵火がぼう〳〵、ほんとにそうである。

雨は天から　涙は眼から
火事は　我身の油斷から

この都々逸は、よく火事の原因を物語つてゐる。防火宣傳の意味で多期には是非〳〵低唱否高唱したいものである。

小熊警視が率いて居らるゝ京城消防署では、去年の十一月中旬にかなり大々的に防火宣傳に努められた。僕の學校へも、大勢で繰込まれて、救助袋の實演さへもして兒童等を喜ばせて下さつた。たしかに兒童達の頭に入つたようで、其後の作文にも、その時の模樣が

【一三】

の道路が完成し、電車が開通する時かくれば此通りも面目を一新し

る、それは或、父母か家族の者と此所の安全地帶に立つて電車を待

上支配人『イヤこれは〳〵』

# 京城雜筆

あり〳〵と、綴られてゐた。同僚の修養會で、火事を花と稱へた江戸今の東京で、客秋開かれた全國消防組會議に出席された小熊消防署長、並に田中京城消防組頭を聘して、前後二回に、會合の狀況やら京城火災談を拜聽した、得たる處が甚多大であつた。

防火は全國的にも大問題であるが、我大京城にも亦大問題である大京城の火災史を讀んだり、調べたりした事はないが、すぐ頭にうかぶのでも隨分澤山ある。貞洞の朝鮮印刷、專賣局、鐵道局、舟橋公普校、美洞公普校、元町小學校、龍山驛、衞戍病院內、豐國製粉工場、總督府病院內、黃金町喜多金光堂、米倉町市場、明治町日韓印刷、南山町の翔翠樓、本二、本三本四、本五、曰く何處、何處と數限りない、小火に至つては、恐らくは、本年丈でも多數に上つてゐるだらう。

火災の爲めに、あたら粒々辛苦の財寶を、一片の灰燼にするのは大散財であり、又大奢侈である。否大災禍である。殊に燒死者などを出すに至つては、慘又慘である『燒け太り』など、洒落で、平氣でゐる場合ではない。罹災者を慰めんとしても或は發奮させる一時的の方便としても『燒け太り』の言葉はよろしくないと思ふ。假令保險金がとれて、個人としては、さまでの損失がないとしても、天下の財を無意味に消失さした天罰は、決して逃るゝことは出來ないあな、恐ろしや火災！。この寒空に。

大京城の民は、京城消防署の大々的防火宣傳に共鳴し、覺醒して隣相互に警戒を加へ、方法を講じ、一家は申すに及ばず、町洞內乃至區內から、火事といふ魔物を、決して出さないように協戮したいものである。

滿十五年前即ち明治四十五年正月二十五日丑三つ頃、鎭南浦公立普校火を失して、校舍器具を烏有に歸した。剩へ宿直員たりし某訓導は、黑焦になつて職に殉じた。その時の校長であつた僕は、責任を感じ、約六旬間は謹愼の意を表すべく、あらゆる會合には顏を出さなかつた、否面目なくて出せなかつた。三月中旬に譴責處分を受けた。僕にとりては至極不面目な話ではあるが、常に其當時を回想し且つ語つて、自分自身を戒むると同時に、後車の戒として居る次第である。

## 文化と沒交渉な貧民の咀ひ

早田伊三

雜誌社會事業（東京發行）に、『私は或地方へ旅して、そこの有名な寺院に詣でた時、參詣道の兩側に居列ぶ多くの物乞ひを見た。老廢者、廢疾者の憐みを乞ふいたく〳〵しい姿を眺めて、私は同行の人々を顧みて『隨分ひどい』とつぶやいた。その時或人は『縣のお役人はこんなのを見るとわざとそつぽむいて通るんだよ』と云つたそれに對して縣の役人である一人は『ナニ世間の金持は彼等の存在に對してそつぽむくだけの良心も持ち合せないんだよ』と、鄭楡したと記してあるが、慈悲心乏しい冷血動物の富豪と下層社會の民に同情心乏しい役人には困つたものだ、これに就て思ひ出したのは東亞法政新聞の一口噺である、それは『田舍者が新裝成れる總督府廳舍を見て、與太『さぞ立べることだろう』友人『なぜ』與太『でも人民の血と膏で出來たんだもの』と記してあつた。燦然と輝く文化も貧乏者には恩惠がない、文化の恩澤に浴するものは多く中產階級以上の人である、一將功成萬骨枯が文明の過程とすれば吾人は寧ろ文化を呪咀したい。『要するに足らぬは泥棒の始めなり』の俚諺、『生きるためには恥も外聞もあつたものでない』の諺は、生活難の辛慘を象徵した下流社會の苦しい聲だ。そこには文化もヘチマもあつたものでない、ラヂオが何だ、音樂會が何だ、生活難に當面して居る貧民には總て沒交渉だ。

## ◇天下第一等

石利利夫

篠田博士は靜岡縣の出身であるがその少年時代同鄕の友人と相豪語して『君、お互に天下第一等の人間にならうよ』『ウーム勿論だ！』小さい肩をゆすりあげて、互におのれを恃んだものである。この間東大の鈴木博士（梅太郎氏）が來ると、篠田次官他を顧みて、『あれもその時の一人だよ、そしてどうやらあれだけが天下第一等を贏ち得たらしいヨ、まアどつちでもいゝや』と哄笑してゐたが、鈴木博士は榮養學では世界的權威そして次官とは從兄弟同士になるのである。

中にこの神を祭れる宮二箇所あり

私はまた惠比須の裝束、卽ち風

# 惠比須

善生永助

◇

七福神と云へば、いづれも、芽出度い神樣揃ひであるが、その顔觸が時代によりて多少異なつて居るのは不思議である。しかしながら私は、今こゝで七面倒な詮議立をするのはやめて、現今普通に稱せられて居る惠比須、大黑、毘沙門、辨財天、福祿壽、壽老人、布袋和尙の七神仙を七福神として置く。七福神は古來わが國民の間に非常に信仰され、これを尊崇すれば、幸福を守り、福壽を保ち、財寶を授けられる、世にも有り難い神樣であると傳へられて居る。殊に七福神寶の入船などは昔から緣喜の良いものとして、多く詩歌や繪畫の材料にされて來たものである。七福神の中でも惠比須、大黑の二方は、別けて世人の崇信厚く前者は商家や漁民の間で、後者は農家で多く祭つて居る。惠比須は鯛釣りの名手であつた爲めか私の鄕里である瀨戸內海地方ではこれを祭れる社が甚だ多く、十日夷の賑ひは幼時よりの忘れ難い記憶である。

◇

惠比須の出身地などを洗ひ立て言辭禮を失するに於ては、この神から見離される虞れがあるから、突き込んだことは申上げ兼ねるが私はこの惠比須神發祥の地を、朝鮮半島の何處かであるやうに想像して居る。惠比須神を祭れる社は多いが、攝津國廣田神社の攝社の中にこの神を祭れる宮二箇所あり一を西の宮と云ひ、延喜式に『大國主西神社』とあるが卽ちこれである。土俗夷宮又は西宮夷と云ひ祭神を蛭子神と稱し、一を南の宮と云ひ土俗奧夷社と稱し、祭神は夷三郎である。中世以降惠比須神を福德の神と唱へ、諸人に財福を與へたまふとて世の崇敬厚く、遠方より參拜する者非常に多く、殊に商賈のこれを尊信し市人の交易にこれを祭らぬ者はない程であるされどその緣由に就いては諸說一定せず、惠比須神は蛭子尊であると云ふ者もあり、日本書紀に『伊弉諾尊伊弉册尊、爲夫婦生蛭兒、雖已三歲脚猶不立、故載之於天磐杼樟船而順風放棄』。とあり、その船が西の宮の社下蛭子浦に泊つたので夷三郎と稱したと解する者もある。また一說には、惠比須は大國主神の子事代主神で、この神出雲國三穗崎に遊び、海濱に出で釣魚を樂ませ給ふ、大國主及び事代主の二神は日本最初の地主神でしかも福德の神であるから、福神と爲して諸人が之を祭り、惠比須には大黑を配するのであると云ふ者がある。そして『えびす』の名は『ゑみす』の訛で容顏莞爾として常に笑みを含める義であり、御名彥火火出見は頻笑にして笑を含む義ならずやと云ふ者もある。慌て者は蝦で鯛を釣る名人だから、『ゑびす』と稱するなどゝ云ふかも知れぬが、私は夷と稱するのは外來の神であつたから、さう呼ぶに至つたものであるとの說に同意する、そこで外來の神であるとすると、どうしても神代上古の日鮮關係から見て、惠比須神は朝鮮から赴かれたやうに思はれる。

◇

私はまた惠比須の裝束、卽ち風折烏帽子に狩衣指貫を着け、腋下に鯛を挾み釣竿を持つて居る姿が何としても朝鮮の服裝に、頗る似通つた點が多いことを見出すのである。聞く所に據ると、北鮮地方の漁民中には、鯛を釣るとき、獲物を直ちに腋下に抱え込む俗が今尙殘つて居るさうである。漁獲の方法が日本よりも半島の方が早く發達して居たか否かは知らぬが、これらを綜合して私は惠比須の發祥地に一の疑問を起し、遠き昔の日鮮關係が同祖同根であつたことを愈々確信する。

## ◈世界を見て

平田久雄

◎故李完用侯の孫にあたる李憲寧氏は、たび〳〵外國を歩いて來た新人だが、その世界巡歷評には仲々面白いものがある。ちよつとその一端を御紹介に及ぶと、

◎亞米利加に行くと、初對面にそれとなくこつちの資產程度を訊かれるし。

◎英國に行くと、すぐに門閥の話が出るし、獨逸人は、寢ても醒めても、復興々々といつてゐるし

◎フランスに行くと、男は女に女は男に、『ね、ご一緒に參りませう』と、舞踏場へ誘つてゐるし支那に戻ると、誰も彼も帝王の夢統一々々といつてゐる。

◎所が、いよ〳〵朝鮮に歸ると逢ふほどの人が、どうして今日を生きて行くか、どうして明日を……唯だ食ふこと、生きることのみアクセクしてゐるのは、如何にも情けないことであると。

【一四】

持ち合せないんだよ』と、椰揄したと記してあるが、悲心乏しい音樂會が何だ、生活難に當面して居る貧民には總て沒交渉だ。そして大官とは從兄弟同士になるのである。

# 京城雜筆

## 感じてゐることども

伊藤泰吉

親しい人に會ひ、又別れると云ふことは淋しいことであり辛いことである。それは一つの大きな現實の變化である。この變化により一生再び相會ふの機會が與へられなかつたとすれば、それは我々にとつて堪え難い悲しみである。然も人々は相會ひ相別れても無關心であるかの如く、その日その日を營んでゐるのは我々の内に潜む想像の力があるからである。

我々は人々と別れ現實に相見ゆるの日がなくとも、心の中に籠れる想像の力は、深くすゝみ高く上りまた先に走つて、其の人につきよきものを作り出し、其の人に對するあくがれを强めて與れる。見えざる所に見出さしめ、觸れざる所に感じさせて與れる。我々が若し一つの不幸によりある悲慘な條件の下にこの力を失ひ、又失はざるゝことがあつたとすれば、相見ざる時の悲しみは何程であらう。或は寧ろその人を忘れるかも知れない。

私は學校を出て遙々朝鮮へやつて來たこと、殊に役人生活をしてゐることにより常にこんなことを考へて現實の淋しさを忘れやうとしてゐる。想像の力により現實を離れても尙よりよき感じを以て別れ行く人に美しい憧憬を忘れない樣にしてゐる。

想像の力はかくて知でなく情感であることを知る。知は濁ることあり誤まれることあらば知り直すことが出來る。しかし情感だけはいつも最も純粹な形で吾々を動かして與れる。私は知を輕じやうとはせぬ。只感に觸れない知の變り易きを虞れるものである。かくて私はこの想像の力を長く生々とさせておく爲め常に熱變を高め自已をなげ出して感激の中に生きやうと思つてゐる。

何かの緣により同じ役所の同じ部屋の中に机を並べてお互に僞らざる交りを續けてゐても、何時かは別れる時が來る。殊に吾々の社會に於て變轉極まりない樣な氣さへする。私にとつてこれ程淋しいことはない。私はこれを只通り一遍の交渉であると見たくない。こんな時に私はどうしても運命論者にならざるを得ない。

我々は無より生じたのでない、生ずべき因緣を持つてゐたのだ。我々は故なくして相逢ふたのではない、相逢ふ爲に億刼の機緣を要したのである。我々は相逢ふことを豫覺せずしてこの地へ來た。しかも不知不識の間に親しき人々を與へ又は奪ふ。これを運命の力と見なくて何と解釋出來やう。

我々は澤山の人々と相逢ひし後離れ難い事を感ずる。いつまでも一緒にと願はざるを得ない。しかし之は我々の希望であつて運命ではない。人々は運命にあやつられ希望を持つて歩いて行く。我々はこの時に運命の力の偉大なことを知り、運命に感謝すると共に自已の無力なることを感ずる。かくして私は運命に對して祈る。

我々は億刼より契られてゐたこの緣を感じつつどうして永刼の交りを願はないで居られやう、しかし永遠の交りを願ふものでなく暫はれてあらんことを希ふ。相逢ふ緣は今成就されたが、永刼の緣は運命への心からの祈より外に何物もない。しかし我々は運命へまかせ切つたことだけで我々の樂觀は許されない。樂觀は忘却や無關心を惹き起すし悲觀は關心をもたらす痛き刺戟である。

私は親しき人々に相逢ひ相別れねばならぬとき、美しき想像の力を唯一の賴みとし、運命を感じ運命に對し悲痛な祈を捧げながら毎日を歩み續けてゐる。

## ◈芝居ばなし

吉田莊一

◎前田昇氏の『芝居ばなし』、その詳密なこと、表裏に通曉してゐること、スキ者連を驚かしてゐるが、器用な氏は、亦た起つて芝居實演となつても、優に玄人をアッをいはせる技量を有つてゐる。

◎先年何かの宴會の時、芝居ばなしがハヅみ、論より證據此所で一ッやつて見やうといふことになり、何んでも前田さんは、不破か名古屋に扮し、花月の大廣間で、例の文句よろしく、グット大見得を切つた時は、これほどまでと思はなかつた連中、我れを忘れて成田屋アーと、おどり上つたといふ評かある。

◎篠田、森、水谷、今村、堀内ー大分芝居好きが多い。おやまはドウするといふと、或人曰く『あるさ、あるさ、田口さんといふ松蔦張りが立派にあるぢやないか』

◎あの深沈そのものゝやうな篠田次官、芝居話となると、椅子をハネ飛ばして『君、その時音羽屋が……』と、スックと起ち上るなど、イヤ痛快々々

## 年頭危言

のあり。家々給せず人々足らざるものあり。德を恃む者少なく徒らに力を恃む者多し。此の狀態をしものは一人もない。炬燵にあたつてあきないが出來るとすれば、なるほど大臣の味が忘られない筈だ

# 年頭危言

中島司

正月は誰れしもめでたく思ふ。幼者は成人の域に一歩を進め、壯者は老成の域に一歩を進め、老者は高壽の域に一歩を進める。歴年の改まるといふことは、心が新らしくなつて、よい氣もちなもの、茲に大正十六丁卯の新光を迎ふるにあたつて、私は理くつぬきにたゞ有りがたいといふ念慮が胸の奥から湧き起るのを禁じ得ない。

○

曉起して身を淨め、衣を改め、襟を正しうして神位を拜し、光を東方に迎へ、家族禮を交はして、屠蘇を汲み健康を祝し、墨を若水に磨りて賀詞を恩顧の先靖に認ため、史を繙きて建國創業の事蹟を偲び、書に對して古聖先哲の至言を誦す。是れ年々歳々元朝に於ける我が行事として續け來る所。

○

新年には心自づと緊張して感慨また多きを常とする。今、大正丁卯の元旦に際して、私は何を感じつゝあるか。それは一言にして盡せば、曰く深憂。而して又孤憤。然らば何等の深憂ぞ、何等の孤憤ぞ。曰く日本の現狀についての深憂、社會の風潮に對する孤憤。

○

其の位に在らずして位を貪ぼる者あり。法の行はれざる上より之を犯すものあり。言を好み實を用ふる能はざるものあり。朋黨の利を專念して倒行逆施を事とするものあり。家々給せず人々足らざるものあり。德を恃む者少なく徒らに力を恃む者多し。此の狀態をして愈々甚だしからしめんには、我が日本帝國の前途以て想ふべきのみだ。

○

思ふに、大正十六年は、いろいろの意味に於て多事の年であちう若し軍大なる危機に當面し居るとの心配が、一片杞憂に過ぎずとせば、以て大盃を擧げ萬歳を高唱すべきだ。私の此の感は、言は簡單であるが、意は複雜深長である。借問す、江湖同憂同感の士ありや否やを。

## 析々の記

永樂町人

○

課税のことや兵役のことで、官公所から推問を受けることは、折々ある。併しお前の生活はどうだ安定してゐるか?と唯だの一度でもお尋ねにあづかつたことがない一度は國といふものから、さうしたやさしい言葉をかけて貰ひたいと願つてゐる。

○

政治々々と申すけれど、誰が局に當つても、豫算……數字面をひねくり廻すだけのことで、我々の食物は、一向よくならぬのである人民が何を食つてゐやうが、ちつとも構はないとすれば、この世の中に政治といふ商賣ほど、呑氣な商賣はないと思ふ。

○

自分が朝鮮に住んで十餘年になるが、マダ現任大臣で朝鮮に泳たものは一人もない。炬燵にあたつてあきないが出來るとすれば、なるほど大臣の味が忘られない筈だ

○

亞米利加から歸つた男と語る。『あつちはどうだ』『格別なこともない』、『日本のやうに、やつばりつらいか』、『イヤその點はちよつと違ふ、あつちでは一日働けば、食つて、着て、飲んで、そして何ぼうか殘る。樂みがある。日本に居ると見す〳〵痩せてしまふ。めあてがない』。お上よ、人民に、生活のめあてを與へよ。お先まつくらでは、彼等も……。

○

鑑役何年に處す。——判官は嚴然としていひ放つのである。併し彼等は何を調べて、かく嚴然とやるのであらう。彼等は唯だの一度でも被告としみ〳〵話したこともない。人柄も知らねば、性行も知らぬ。知つてゐるのは、何野何兵衛と題する調書——書類に過ぎぬ斯くして書類はさばけるであらう人間は果して……。

○

都會の子供も、農村漁村の子供も、同じ國定教科書を、讀んでゐる。そして米が足らぬ、移住の必要があるといふ半面。その本には『日本は風光絶佳、どこへ行つてもこんな天國はない』と敎へてゐる。文部省といふとうさんは、ほんとに呑氣なとうさんである。

元旦

前田昇

# 暖房閑話

丸山幹治

## 一、同窓の人々

年といふものは爭へないものですな、ともすれば昔の事を思ひ出す。その思ひ出すやうになるのは此頃昔の知合がよく死ぬ。黑粹の端書が舞りにくる。それが大抵同年輩のものだからイヤな氣持になる。お先に失敬とでも言はれるやうな感じがする。此頃も年賀狀を出さうと思つて同窓生の名簿を見ると、親しくしてゐたものが可なりに死んでゐる。成金とは行かないが成銀位になりかゝつたエスも數年前になくなつた。滿州邊にゴロついて、大きなことばかりいつてゐたテイも、大百性の養子になつて納つてゐたアイも死亡者のところへ組み入れられてゐる。然し大體からいふて失意沈淪してゐた連中の方が餘計に死んでゐる。やはり不平に負け、苦勞に壓倒されたのだらう。私立學校だから僕の同期生にも役人などは大したものはない。今臺灣の殖產局長をしてゐるゲイ位のもので、他はいふに足らないが鮮人の參與官もある。代議士には四人出てゐるがその二人まで新聞記者を兼ねてゐる。會社では日本海上保險副社長のユー古川合名經營の電線會社專務のエム、（此の男は俥を引いて苦學したのを自慢にしてゐたつけ）明治製糖の軍役をしてゐるワイ、東京精米會社の專務エス、それから地方銀行の頭取なども二三人あるが金持といふ點では大阪の可なりの呉服商をしてゐるエス、東京で五年筆を製造し同業組合長か何かしてゐるイーなどだらう。辯護士として相當なものも三四人ある。新聞雜誌の方では隨分あるが、一寸した實業雜誌を經營して廣告學とかの私立大學講師をしてゐるエー神戸の新聞の主幹をしてゐるエス大阪の大新聞の幹部であるオーなどが目ぼしいところ、だが何といつても有名なのは同期文科出の正宗白鳥、德田秋江に敵ふものはない。正宗は在學時代から勉强家でしたよ。いつも首席で、當時美學の講師だつた高山樗牛も、正宗の頭のいゝには感心してゐたさうですよ。讀賣の記者時代にはよく顔を見た。記者仲間の集るところでは默りこくつて隅の方へ小さくなつてゐたつけ。德田秋江は同じ下宿にも居たことがある。見るからダラシのない風の文學青年で非常に樗牛を崇拜してゐた。卒業後博文館に入つたり何かしてゐた。が餘り振はず、十何年といふもの貧乏のドン底にゐたやうだつたが、昨今芽を吹いた。久しく話はしないが、ちやうど東中野の長谷川如是閑の門前に住んでゐるので通り掛りに彼が赤ン坊を背負つて庭の中を歩いてゐるのを外から見たことが二度ばかりある。此の二人よりもずつと早く文名の出たのは僕と同じ組で法律經濟をやつてゐた押川春浪で、惜しい盛りに死んだ、彼が何だつて文科へ入らなかつたかは聞いて見なかつたが、いづれ親爺の押川方義氏への申譯だらうと思つてゐた。文章の通り痛快な男で、神樂坂へんを押し廻つて艶聞も多かつた。春浪といふペンネームは春のや浪江とかいふ藝者の名から來てゐるのである。同窓生の出世を見るにつけても、奇才をいだいて不遇を嘆いてゐる、二三人の男を氣の毒に思はずにはゐられない。人間てものは先づ運でせうな。文士なぞはさうでもないが、伸びそうな男が伸びず、平凡な人間が案外出世してゐる。然しさういつた出世する程の男にはやはり地道にコツ〳〵順序を踏んでゆくといふ根氣があるやうだ。結局人は一生たつて見なければ分らない。

## 二、環境の誘惑

株式相場なぞの高くなるのは、いかなる好景氣時代でも一氣にはゆかぬもので、あがつては跡戻りし、跡戻りのまゝに停頓しては、ひよいと躍進し、また跡戻りするといふ風にて、好景氣の絶頂時代に於ても相場には波瀾が大きく、それを刈り拔けて買方として儲けるといふことは、半年なり一年なりの間、終始一貫して不屈不撓の信念と之れに要する彈藥とを充分に備へなくてはならぬが、さてその半年なり一年なりかゝつて勝つた相場の、一朝瓦落となるのは、僅か十日か半月もたゝぬうちである。だから成金の歩にかへるのは本人も夢かと思ふばかりであるがそれは相場師の運命のみではなく藝術の進み難くして衰へるの早きことも、實にこれと異らないと思ふ。流行兒で持て囃されたものが彗星の如く社會から消えて失せるのは、妙齡と美貌とを要素とする新しい藝術家なぞには、殊に多いものである。余は有名だつた藝人のなれの果てともいふ姿を見る毎に、いひやうのない感傷的な氣分に誘はれる。その大切にして生涯失はじとしてゐる昔の榮華の記憶こそ、やがて殖民地三界までも流浪して、藝も荒み、昔の面影だになき田舍具き旅藝人に、不滿と憂老境のない事を見逃しては成らぬと思ふ。吾人は自己の馬齡を數ふ

こそ、やがて殖民地三界までも流浪して、藝も荒み、昔の面影だになき田舎臭き旅藝人に、不滿と憂悶とによつて呵責を加へるものではないか。然しそれはまだ本當の墮落とはいへぬ。救ひ難きは最早や旅藝人の安易な生活になれて、次第に低級な兒女の喝采を喜び、最早、中央に對する捲土重來の野心も全盛役者に對する競爭意識もなくなつてゐるものである。それでも、運命に安んじて虚名を羨まないのは、幾らかの取柄はある。才藝已れになくて、徒らに人を嫉み、世を咀ふに至つては、悲慘の最も甚しきものである。旅藝人といつても、もとより一概にはいへぬ。回向院の横綱大關も滿鮮興行をやるし、歌舞技の花形役者も、たまには田舎廻りをする。然も如何なる藝人も地方にのみ定住してはその田舎臭を帶ぶることを避け難いであらう。たゞ學問研究のことのみは、必ずしも此の例を以て律すべきでなく、苟も志だにあれば田舎住居も左程苦にするに足らぬであらうが、大家となり易い環境の誘惑に至つては矢張り同じであると思ふ。

# 馬齡

保阪久松

『一年の計劃は元旦にあり。一日の計劃は朝にあり』との古諺は吾人が年頭に際してよく考へて見たい事だと思ふ。

一休和尚は『門松は冥土の旅の一里塚、芽出度もあり芽出度もなし』とうたうて居る樣であるが、四十を越へた多くの人達は新年を迎ふる毎に、段々と老境に進んで所謂馬齡を加ふる毎に一種の悲哀を感ずる人も少くない樣だ。此處に於て吾人は新年を迎へ、年を新たにするに際し如何に考ふ可きであるか、先輩を通して學びたいのである。處で先般來城された『在米邦人の慈父』として仰がれて居る本年七十二才になるゝ彼のストージ博士を朝鮮に迎へた諸君は博士が過去廿年間所謂年を取られない事に驚かされた。中にも二十年前より親しく博士に師事された宮崎小八郎君の如きは、博士が老いて益々壯なるのに驚かされた一人であつた。

私は此の年頭に際して博士の年を取られない譯を考へさせられた博士は明治十九年以來實に四十年一日の如く在米邦人の愛護指導に身を捧げて、孤影煢々・萬里の異境に彷徨せる邦人不遇者の爲に或は寄宿舍に孤獨賴るべなき青年を收容して之に職を授け至純燃ゆるが如き信仰を以て之が薫化に努め孜々として倦む事を知らず近くは大正四年度御大典奉祝の爲在米邦を代表して聖書獻上の特使として來朝せられ、聖き天職の爲に自ら勞役せる歲月をすら忘れて邦人を啓發指導するの外一切他事も知らざるものゝ如しと云ふ。

博士が年を取られないのは實に此の敬虔神に仕へ、至誠邦人の爲に一年の始に一日の朝に、今年も今日も神の御心を日本人の爲にならさせ給へと祈りつゝ進み行く處に老境のない事を見逃しては成らぬと思ふ。吾人は自己の馬齡を數ふる前に自分には如何なる使命あるか此の身を何に捧ぐ可きかを考へたいと思ふ。

方銀行の頭取なども二三人あるが金持といふ點では大阪の可なりの

ンネームは春のや浪江とかいふ藝者の名から來てゐるのである。同

に誘はれる。その大切にして生涯失はじとしてゐる昔の榮華の記憶

## ◈無駄ばなし

平田久雄

◎京電の新庶務課長の森秀雄さん、運動家らしい逞ましい體格でテキハキと仕事を片づけてゐる。どうかすると所謂廣告取り先生にズラリと取り圍まれてゐるから、『あんたも可なりつらいでせう』といふと、森さんその闘士的面貌に快笑を浮べて『寧ろ面白いですよ、どし〳〵警退します、何といつても構ひません』

◎和田商銀頭取の夫人は、折々令孃や令息を伴ひ、青木堂へ香茶を飲みに行くことがある。この間も家中で青木堂へ行つて、戻つて來ると、銀行から歸つた和田さん『今日は皆で、何處へ行つた?』『何所へも行きはしませんよ』、『フフン、青木堂からゾロ〳〵出て行つたのは誰だね』。ヒドクよく知つてゐると思ふと、何んのことだ頭取室と青木堂は正面向ひ合ひと來てゐる。頭取トドメを刺して曰く『オーイ、隱くしても駄目だぞ、俺は上から見おろしにしてゐるんだぞ』

◎東拓の下出繁雄さん、山岳通といつていゝか、閑さへあると、『岩よぢりの法』『坂をのぼるの法』『鎖わたりの術』など、原書で讀んで『フーン、實に愉快、これはたまらぬ、ナアールほど』

# 美化作業

一番ヶ瀬慶次郎

△

現代的言葉を借りて言へば美化作業、即ち掃除であります。地上の塵芥汚物を除くと同時にその氣分に於ては精神的淨化を伴ふのであります。言葉の現代化と同時に洒除を下卑事屬の任務と心得へ居る舊弊をも一掃して親しく黎明の半時を淨化作業に費すだけの現代化を各人は心得可きであるまいか

△

軒燈の灯影が銅色に鈍つて曉の光が漸く夜の帷を押しのけ、窓硝子が乳白色に白ける時分颯々と掃子の音を聽くのは實に爽やかな感じをもたらすものです。

落葉を拂ひ細砂を坦らす音、朝の閑寂なる空氣に妙なるリズムを傳えて、初めは小さき場面より漸次擴大され行くに從つて集り來る落葉、栃葉、紙片、雜木、塵芥は積つて自から莊重の響を傳え、或は輕快なる腕の捌ばきに微細なる音調を和する等、細流切々の私語は瀨となり淵とより大絃小絃の響をかなで、遂に大河の悠々たるにも例ふ可く、必ずしも鍵盤におどる指尖からのみ妙音は湧くものでなく、傾け聽く日常作業のそれそれに音階正しき妙樂を感得し得る時『掃除人は正に樂人なり矣』と言ひ得る氣がいたします。

△

掃き溜めては一息入れる時蒼空のかなた朝暾の輝々たるを仰いで徐ろに胸腔を開き、シツカリ大地を踏み占めながら双手を天に向つて思ふ存分伸ばす時、全身の血潮は沸々として沸き、血管の凡ゆる末梢までもみなぎり渡り、汚濁邪惡の氣は淨化され、純正澄澈の生氣の總身に充滿するを覺え、その日の仕事の上に偉大なる自信力と活動力は附與されるのであります

△

然るに家屋の密集せる都會生活者には猫額の餘地をも獨占する事を許されない事が多く、從つてかゝる美化作業の趣味を讃えてもそれは廣大なる庭園私有者の贅澤な物ずき氣分に過ぎない樣に解されるかも知れませんが『斷じて然らず』と謂ひたいのであります。吾々に堺されたる寸尺の餘地はなくとも四通八達の道路があります、普遍的に與えられたる公道は一面から都會生活者の庭であり得る。歩道とし車道として間斷なく使用せられ汚染せられたる道路も、曉近き頃は道かに跡絶えて、平靜に唯だ困憊汚濁の面はあらゆる生活の殘骸で被はれて、私共の朝の挨拶と慰安を待つて居るのです。それを淨化美粧して又一日の勞苦に向つて勇しく送り出す事は都會生活者の責務であり又樂しみであります。所謂文化人と稱する階級の人が生溫るい夢から脫け切らない時分颯々と箒を振ふ事は此上もない心の愉悅と肉體の剛健をもたらすものです。自分の家、隣家の門前等區別する必要はない、公道を掃く事に苦情を持ち込まれる心配は全然無用です、腕の續く限りに於て成る可く廣く路次と云はず軒下と云はず隈なく掃く事に於てのみ吾人の滿足は見出し得るに至るでせう。

## ◇煖爐ばなし

吉田莊一

◎內國通運の兒玉さんは、薩摩琵琶の名手である。曾て今上陛下の御前に於て、名譽の彈奏をやつたこともある。敎へてくれ、門弟にしてくれと、いろ〳〵な人が面會を求めるので、兒玉さん『難有う、だがその話ならもう二十年程さきのことにしてくれ……』

◎地方法院の山口判事が謠がうまい。筋のいゝ上に、減法聲がいゝと來てゐる。同僚皆曰く『君、いゝことを敎へる、早く役人をやめ給へ、その方が收入が多いぜ』山口判事『……』

◎日本警察新聞特派員の田村直一君、昔憲兵隊に屬して、賊徒と戟を交へたことがある。所謂實戰の士だ、その話が頗る振つてゐる

◎一日、南鮮の野ッ原を、一人で搜索してゐると、くさ叢の中からニュッと大きいの（匪賊）が出現。忽ち銃劍を構へる。こつちも肯くなり乍ら、同じく銃劍を青眼双方息をはづませ乍ら打ちも突きもせず、棒のやうた直立。同僚遠くから見て『オーイ田村、それは何んの眞似だ』

◎とう〳〵とッ捕まへたが、あとで隊長から『彈丸をこめてゐるのに、その時なぜ擊たなかつた』なるほど、鐵砲にはチヤント實彈が込めてある。田村氏ツルリと鼻の先をこすッて『ハイ、擊つてしまうと、それッ切りです。最初から手取りにするつもりで…ハイ』隊長曰く『うまくいつても、萬事忘却、全身硬直、何も彼も夢中で……うふん、田村さうだらう』

遂に大怪我を友人に與へて裁判所

據物件たる大刀を交付しこれで殿

# 法廷隨筆 微苦笑

伊藤憲郎

## 兇器の隱蔽

その本の背皮にはこう書かれてあつた——

改良實驗 朝鮮農業大全 中央興農會

總クロース製六百頁、或る殺人被告事件の證據物件として法壇の上に持出されたのであつたが、一寸も殺人とは關係ありと思へぬ、他の事件の證據物が紛れ込んだのかと半ば疑問の心持で中を開いたら MauseR—765 と書かれた恐ろしい品物と藥莢とが物の見事に納つてゐた。

この頃或るプロフエツサーにこの話をしたら、私も外國から或る品を持つて來るとき、稅關がうるさいから本の中に藏して來たとの話に頗る感心させられた、魔奇術の實際化とでもいふべきか。

## 糞のはなし

その一、その被告人は大坂毎日を讀むといふハイカラな學校小使であつた、宗教は天道教、事件名は保安法違反——李王國葬の日或る町で××萬歲を叫んで捕はれたのであるが、犯罪の動機を聞いて見ると天長節の日に先生から糞を浚へといはれ憤慨の結果であつた、苟くも我が大君の誕生日に便所を掃除しろとは何事ぞやといふのである、爲政者の參考にならう。

その二、一村皆糞を食つたといふはなし、その村に一人のならず漢がゐた、酒を飲んでは人を毆る遂に大怪我を友人に與へて裁判所に呼ばれた、その被告人の妻の證言が面白い。

證人　私なども朝から晩まで叩かれ通し、村には別に醫者もありませぬので皆々糞を食はぬものはない位です。

裁判長　毆られたからといつてわざ〳〵糞を食はんでもいゝではないか

證人　それがなんです、人に叩かれたとき糞を食ふとあと傷が少くないといふ迷信療法があるので御座いますので

判官一同噴飯せざるを得なかつたが、糞の頓服とは奇拔である、醫家の參考にならう。

## 法廷暴行

刑事訴訟法第三百三十二條に『被告人は公判廷に於て身體の拘束を受くることなし但し之に看守者を附することを得』とある。

換言すれば被告人は法廷に於て取調べを受けるときは手錠をはめてゐない、自由なわけである。

被告人は原則として極めて柔順である、勿論少しでも裁判官の機嫌を損じないやうにといふ功利的な考へでもあらう、非常に取扱い易いのであるが、時に兇暴なのが身體の自由なのを利用して阿修羅のやうに法廷内を狂ひ廻ることがある、それも大低訊問中にはやらぬ。殆んど判決の言渡の濟んだ後看守者の隙を覗つて突然やる。

次ぎの如きはその例である

(一) ××萬歲の高唱
(二) 狂言卒倒
(三) 法壇突貫（時に腰掛をふり上げ乍ら）
(四) 格闘（例へば關係者と）
(五) 雜言（例へば判事こそ强盜だなどいふ）

或るところで裁判長が被告人に證據物件たる大刀を交付しこれで殺したるにあらずやとやつたら、被告人は得たりとばかりそれを振上げて裁判長に切りかゝつたといふ話がある、危險々々。

## 非親類

子供だからとうつかり馬鹿に出來ぬ話である。

或る事件の取調べ中被告人はその土地はあれから確に買取つたものであると答へる、あれとは一人の未亡人、しかし被告人にその土地を買ふ資力ありと思はれぬ、代金は即時に拂つたと云ふ、意々あやしい。

裁判官は被告人とその未亡人と醜關係あらんと疑ひ出した、未亡人は被告人と面識を得た少し前、當時十三歲になるものを養子にしたが間もなく離緣したことがあるのが判明した、未亡人と今年十七歲になるその少年が法廷に喚問された。

初めに未亡人を調べると絶對に被告人と醜關係はないといふ、少年は呼ばれて起つた、ハキ〳〵答へる快活な氣性である。

裁判長　お前はあの女の養子になつたことがあるのか

少年　左樣であります

裁判長　どうして離緣になつたか

少年　養母は被告人と二人で私を虐待するから實家に逃げて歸りました。

裁判長　何時から被告人と知合つたか

少年　ハイ、私が貰はれて行つて間もなくでした、被告人が家に來てゐて、始終養母と二人で寢てゐるので始めお父さんかと思つたら親類でもな

# 京城雜筆

んでもありませんでした…。

滿廷の傍聽人はドッと笑つた、秘密は子供の口から遺憾なく暴露したのだ、そのとき笑聲の中に件の未亡人は何やら顏を赤めて叫んでゐた、あとで廷丁に問いたら、『その子供は飴賣行商をしてゐたのを養子にしてやつた、子供の顏をよく見てやつて與れ』と妙なこ

## 列車中の椿事

長谷部豐三

先月の初め私は公用を帶びて南鮮地方へ旅立つべく午後十時京城發の夜行列車に搭乘した。僅か九時間計りの辛抱であるから寢臺の用意もせず、二等普通車の一隅に陣取ることとした。道に釜山行ほどあつて車室の中はひどく込合ひやつと腰掛けるだけの坐席を得たやがて近所の人の雜談も絶へ新聞も雜誌も讀みあきた頃は、汽車が餘程進行して居て時計の針はもう一時を過ぎてゐた。退屈なので靜に目を閉ぢ居眠りを始めようとしたが睡がしい車の響で無論心地よく眠ることは出來なかつた。でも疊の疲れでいつとはなく夢うつつとなつたとき、突然入口の方でかちゃん〳〵と硝子を割る樣な音がした。喫驚して目を開け屹度其方を眺めると背の低い異樣の眼をした恐い顏の背廣を着た男が、右手に繃帶をして扉の側に立つて居た奥だと思つて居ると其男は次第に車室の中に這入つて來て如何にも昂奮した口調で大聲に叫び出したやれ人生問題はどうとか、思想問題はこうとか六ケしい樣な譯の解らないことを饒舌つて居たが、不意に傍に居た乘客の頭を毆りつけた。其時次の車室から駈け付けて來た一青年があつて頻に毆られた人に御辭儀をしながら一方其男を宥めようとしたら、矢庭に其青年をも打擲えた。皆が呆氣に取られて車掌を呼ぶけれど出て來ない。其内に亂暴者は私の隣席までやつて來て其處の朝鮮人紳士に向ひ何か囁く樣な風をして居たが、いきなり亦烈しい一撃を其人の頭上に加へた。驚いて飛び立つ處を一撃又一撃、恐ろしい權幕である。朝鮮紳士が非常に憤慨して怒鳴りつくれば忽ち蒼爾として頭を下げ鄭寧に詫びを言つて居る。青年は只管恐縮して朝鮮紳士に御辭儀をして居るが、どうすることも出來ない。皆が頻に車掌を呼ぶけれど一向顏を見せない。此樣子では又どんな狼藉を働くことかと一同戰々兢々の態で何れも逃足を出して居たが幸ひ勇敢なる一乘客が唐突に此男の兩手を後に捻ぢ上げて其處へ引据えた。漸く車掌が來合せたので細紐を取寄せ、二三人掛りで高手小手に縛り上げたから皆皆胸を撫で下した。手足の自由を失ふた亂暴男は腰掛に横にされた儘まだ何か饒舌り散らして居たが其内に汽車が大田へ着いた。警察官に引渡された。聞けば此男は柔道三段の剛者で極度の神經衰弱に罹り○○病院に三ケ月間入院して居たが快復したので退院して大田へ赴く途中突然發作して此樣な騒動が惹起したとのことで青年は知人の依囑を受けて途中の附添人となつたものだが大丈夫此樣な出來事は起らないものと信じて請合つたものらしい。實に精神病者程氣の毒でもあり一面危險であつて手のつけられないものはない。苟も其樣な疑ひのあるものは成るべく汽車に乘せぬこと、若し是非乘せる必要があるときは其向と交渉し特別の取締をなし一般人に迷惑を懸けない樣にして欲しいものだと思つた。列車中の椿事と云ふのはそれである。

## ◇世間ばなし

石川利夫

○

和田商銀頭取は、中學時代盛んに將棋をさしたもので『ナニ、今やつても、相當に戰ふ自信はあるよ』と、氣焰をあげてゐる。

○

お祖父さんになる人が、この道が大好きで、何んでも段位近くまで指されたといふ話である。

○

和田氏の家庭で、將棋がハヅむ令息も、令孃もやる。奥さんまでが見おぼえて、ちよい〳〵やる。が殘念なことには、令息には迚も勝てぬ。夫人曰く『おかしいですね、角の小髮のところを、スグ破られてしまひますよ。そしてお母樣どうです〳〵と、駒で盤のフチを叩くんでせう、いつでも汗をかかされますよ』

# 流行を追はぬ會

加藤寮平

最近生活改善とか、無駄せぬ會とかいふ言葉を、あまり聞かなくなつたが、眞に浮華輕佻の惡風を慨き、之に對抗矯正の目的からであれば、至極結構の事であるが、ともするとこんな事にまで、流行といふ奴が遠慮なく、浸潤して來るから油斷も隙もならない。

ひがみか知らないが、生活形式に於て、吾が國固有の特徴や美風を捨て、善惡に拘らず、歐米を模倣する事を以て、生活の改善と心得たり、味噌汁をやめて、パンにバタをつけて、食ふことを以て、無駄を省き得た位に考へてるのではなからうかと思はれてならない

尤も生活形式を構成する衣食住の中、食住には一寸流行の魔の手も、そうたやすくはのばす事は出來ないので、衣服程に流行の變化が、轉々急激でないのである、喩へば去年までは牛肉を食ふたが、今年はもう野羊の肉が大はやりで牛の値段はガラ落ちだといふことのあり得べき筈なく、又住宅にしても、今年は復興式赤瓦葺の文化住宅が流行するから、一つ小寺組に行つて注文して來ようといふが如く、簡單御手輕には行き兼ねる樣なものである。

處が衣服の方は、月収の大部分を打ち込まなくも、二三ヶ月の月賦で、兎も角も身體の艤裝を一變する事が出來て、安價の虚榮を滿足せしむるに適して居る、同じ衣服のうちでも、人體の安息保溫用として、品質の如きも比較的、選擇せらるべき筈の寢具は、餘り顧みられず、流行の對照物とはされない。安く積つて五百圓がものはあらうと思はれる、身なり堂々たる紳士も、自宅常用の夜具は大底石綿の如く、薄くして堅い品物である、中には身づくろいに比較して、屋内の器物を充實して居る、奥ゆかしい者もないでもないが、今時の世相を露骨に發表するものは、服裝と寢具に於ける、品質の差であると言ふも過言でなからう衣服の中の寢具だけは、流行の渦中に卷き込まれず、質朴剛健の良風?を、期せずして遵り得ることに對し、悲喜交々の感なき能はずである。

私は驛に行つたり、旅行をする毎に、鐵道從業員の服裝を見て、一般官吏も之れに倣つて、生地や形を一定せしめたならば、これから生ずる利益は、物質的にも蓋し莫大のものであらうと思ふのである、此の服制は何れも後藤さんが総裁時代に、制定されたものと聞いて居るが、爾來二十有幾年、一般服裝が幾多の流行に犯されて、轉々變遷を之れ事として居るのに獨りこの服裝だけは、嚴として一律流行をして乘ずる隙を與へなかつた、而して尚ほ體裁の上から見ても起居動作の上からにも、非難の聲を聞かず、些の時代遲れといふが如き感を起さしめない。

最近雨後の筍式に誕生する、種々雜多の流行的色彩を帶ぶる、所謂社會奉仕の會、小供愛護の會、社會矯風會とか、無駄せぬ會といつた風の會を整理して、此所に一つ流行を追はぬ會を、官民大同團結して組織し、官吏は鐵道省に倣ふて、全國的に服裝を統一する、ついで民間に於ても銀行會社員等の服裝を、一定するが如きは勿論事業の一つである、斯くして徐ろに着手せば、いかに流行の魔女が手練手管を盡せばとて、容易に乘ぜられることなく、前に列べた固々の會の趣旨は、自ら徹底せられ小供の愛護は勿論動物も愛護せらるべく、無駄は省略せられ社會矯風、生活の改善の如きは、期せずして遂げ得らるべきであり、所謂ロイド眼鏡や、耳かくしのモーダンガールは、其の影をひそむるに至るや必然である。

## ◇意氣姿の話

平田久雄

○

殖銀の守屋さん、利川水利組合の竣工式に草鞋がけのゴルフ姿といふ活潑勇壯ないでたちで列席したのはいゝが、路々子供が集つて來て『おぢさん風船をくれ』と、口々に叫んでブラさがるので、何のことやら判らず『金谷君、こんな風してゐるから、學校の先生と間違へてゐるんだね』

○

斯くて同行の金谷氏と共に、ぶらりとそこらあたりの宿屋に泊ると、夕飯前になると、帳場さん女中を呼んで曰く『風呂があいたら奥の藥屋さんを入れておやりよ』蓋しアノ邊をうろづく藥屋さんはみんな藥を買ふと、お愛想に子供に風船玉をやる慣習となつてゐるこゝに至つて守屋氏酸ッぱいゝ顔をして『チョッ、田舍者には、この意氣姿が判らんかナァー』

# 京城雜筆

## ひのとうの歳

古河隆美

大化の新政以後に於ける丁卯年間の出來事をノートブックから拔いて見ませう。

天智六年　都を滋賀に遷す、山城より白燕を奉る。

神龜四年　大和國長谷寺を建つ。

延曆六年　典藥寮より新修本草を上る。

承和十四年　有智子內親王薨す。

延喜七年　延喜通寶の錢を鑄る。

康保四年　實賴太政大臣となる。

萬壽四年　赤染衞門榮花物語をつくる。

寛治元年　白河上皇宇治に御幸。

久安三年　兵を東河に治む。

承元元年　釋源空を土州へ流す。

嘉曆二年　維貞卒す。

嘉應元年　は元中四年に當り南北朝時代、出來事省略す。

文安四年　兼良關白となる。

永正四年　香西又六其主政元を殺し、八月又六誅に伏す。

永祿十年　義昭越前に奔り、朝倉義景に依る。

寛永四年　正月大地震、南禪寺山門立つ。

貞享四年　四月東山天皇即位、聖護院宮大峰入。

延享四年　朝觀行幸。

文化四年　松前奉行を置く、八月江戸洪水永代橋落る。

慶應三年　德川慶喜將軍となり、十月解職政を返す。

大正十六年は何が出來ますかは觀相家に聞いて下さい。

## 元日讀經

時さんと呑洋

田村直一

時さんは今更紹介の要もないが呑洋といふ變り者、これは京畿道巡査教習所長朝鮮總督府道警部藤井國兄と云ふ嚴めしそうな男。

日本大學の出身で學生時代は辯論部の猛者であつたが警察に入つてから何を感じたか頗に佛書のみを漁つてゐる。詩を作り俳句をやり和歌を詠み又頗る麗筆で一筆畫もよくする、碁を打つ將棋をさす柔劍道はヘボだが理論は目下開山飲んでは唄ふ。愛兒の爲めには蓄音器でアノ町コノ町の合唱もする時には大臣の演說を蓄音器にかけて耳を傾ける『世界の現狀は?』何と話しは太いのう、と獨り悅に入る。

此の男更に無聖庵迂佛とも號し生臭坊主以上の藝當をやるが呑洋の方が通つてゐる。この呑洋氏丁と云ふ男と二人連れで或年の元旦時さんの玄關に現はれた。

お賴み申す、玄關子吃驚して曰く『何御用で?』『御用はオブソ知事さん御在宅なれば一杯飲みに來ました』恰度奥の廊下を廻りかゝつた時さん目速く見付けて曰く

何をゴヂヤ〳〵云ふとる、サア上られい。正月にゴヂヤは禁物、飲み客とあらば手具脛引いて待つてたのぢや。

座敷には既に十人餘りの先客があつたが、新手を迎へて時さんの御機嫌斜めならず、どうぢや、呑洋、觀音樣の御像があるぞ、ソレ大藏經があるぞ、ソレ是れと一々御自慢のものばかり、イヤそれは結構だと呑洋が取りあげた一卷、押し戴いて頁を操るや、呑洋自慢の朗讀法大きな聲で御經を讀み出した、席に居合せた臨濟宗の大學講師平野天惠師職掌栖直ちに合掌瞑目、涼しい聲で唱和し始めた。

斯うなれば幼時親を失つて坊主になりそこねたと云ふ經歷のある丁も參同、一座は白け渡つた、家の子郎黨は顏色を失つてウロ〳〵時もあらうに場所もあらうにと言はぬばかり。

盃を下に置いた時さん居住ひを直すと見るや直ちに瞑目合掌音吐朗々と讀經を始めた、時さんの大廣間はお寺の本堂に早變りマルデ家が舞ひ出るやうな騷ぎ、遂に觀音經一卷讀み終つた。

時さん曰く、無事息災で正月早々神佛を祀る事、これ程目出度い事はない、サア一杯いかれい。呑洋と丁はすかさず時さんに試筆をねだつた、ウンよしきた、サラサラと書いた寶船に讃して『滿船寶珠得載歸』これは呑洋、今一つは同じく帆掛け船に山の遠景、『遠山無限碧蒼々』更に天惠師『福海壽無量』と入れて、これは丁が賞ふた。呑洋と丁は醉步蹣跚官邸を辭して門柱に倚りかゝり小便をはじきながら相顧みて、どうじやい愉快ぢやつたのう。

元且

德野眞士

## 文樂座と朝鮮の雅樂

事を、感謝し且つ驚嘆すべき時になつて、止めると云ふ事が若し事實であつたら取り返しのつかぬ事となる。

朝鮮には地方的にこうしたものが殘つて居る事が少いから、雅樂の樣のものは、この際一層開放し

# 文樂座と朝鮮の雅樂

浅川伯教

京城日報の論說に、朝鮮の雅樂が止めになる事を惜んだ丸山さんの文が見えた。

それから二日過ぎて、文樂座の燒失を惜しむ文が、朝日新聞に見えた。これ等はほんとうの事だと思ふ。文樂座は燒けたのだから仕方が無いが、併し之れは又起る可能性がある。

朝鮮の雅樂の方は止めたらそれきりだ。せん水機の空氣を送る管をぷつつと切つた樣のものだ。

長く東洋に生きて、不思議にも朝鮮だから殘つたその傳統を、然も今の世で切るとはなんの事だらう。戰亂などが續いて、國家が危急ののるかそるかの場合ならいざ知らず。

樂律以導天下之和也

と云ふ語があるが、東洋の音樂は和と云ふ字の象徵が音のリズムとなつて生れたものである樣の氣がする。

どうか止める處では無く大に盛にやつて貰ひたい。音樂に興味をもつた人は、京城には非常に多いし、度々の音樂會は必らず成功すると云ふても可い位の處だから。

反つて民衆に開放して、少しは營業的になつても殘して置きたいと思ふ。招待狀で特殊の人のみに限らずに、あんな可いものを未だ聞かない人の方が京城でも大部分では無いかと思ふ。

あの音樂が今日迄殘つて居つた事を、感謝し且つ驚嘆すべき時になつて、止めると云ふ事が若し事實であつたら取り返しのつかぬ事になる。

文樂座でもそうだと思ふ。昔の世なら、川原乞食の人形芝居の小屋が燒けたとて、何の不都合を感ずる事もなからうが、今の世ではそうは行かない。鄕土が生んだ不思議の藝術 之れは其の鄕土に對して長い根を張つて居るのみならず、其鄕土と存在と共にし成長する可能性の最も確實なもので、鄕土の花でなければならない。

共通の思想や藝術が模倣的にも地球の表面を咲き卷くる事に時代的の眞理は認めるが、又その反面に他に無い變つたものを求める心が何れの處にも、おうせいになつた。しかし新しく作らうとしても十年や百年で其鄕土にしつくり合つたものが傳統として生れ難い世の狀態になつて居る。

あの變つた形をして寫樂の畫の樣に腰をひねつてがたり首を曲げ眼をきよろ〳〵する、變つた氣持は矢張り人形芝居の面白い處で息をしない人形が演ずるので獨立した價値がはつきりある。感能によつて體得し、目から目に、手から手に、熟練するによつて長く傳へられた傳統は、不文律であつて一度糸が切れたら再び起らない。あの物質的の營利本位の大阪で、新聞の一面全部に、人形芝居の小屋が燒けた記事を書いても『產業に何の關係も無い』と云ふ人は一人も無いと思ふ。

東洋一の商業地に、人形芝居の燒失、その對照をよくじつと考へて見ると、そこに現代人の要求を暗示した何物かゞ浮んで來ると思ふ。

朝鮮には地方的にこうしたものが殘つて居る事が少いから、雅樂の樣のものは、この際一層開放して常設雅樂館でも作つて盛にやつて貰ひたい。內地にある能舞臺の樣のものを、或は朝鮮ホテルの內にでも建てゝ旅客の希望に應じてやつたり吾々にも開放して貰つたりしたらどうかと思ふ。

名物を一度食べて話しの種にすると云ふのでなく、こふ云ふものは何度も觸れて味つて見る事が大切で、この不思議の音樂の中からきつと佳いものが生れて來ると思ふ。

東洋の音樂の流れが細くも古くからの朝鮮に樣々の世相變遷をまぬがれて、唯一ッ殘つて居つた、それが、大正十六年——西紀千九百二十七年に於て其跡を斷つたと云ふ事になつたら、世界の他に無い掛け更への出來ぬものを失つた損失を、永く後の世の人にうらまれる事では無いかと思ふ。

之れ等は王家の樂師であつて一般多數の人は、今の世にあり乍ら一度も聞いて居らぬ。先つ天地を和する樂律を成るべく多くの人に聞かせて貰ひたい。

自分は二ケ月餘の咸南咸北の縣場行脚の歸りに、陸行で新北靑の新驛に着いた時、丁度その驛が開通の翌日で北靑の奧地からこれを見に來た人々が山の樣であつた。

處が皆好い顏をして眺めて居るそうして一人の鮮人が『この停車場は吾々の仲間の樣の氣がする』と云ふた。それはこの停車場の作りが、朝鮮瓦を用ひた、全く朝鮮式に作られたものであつた。極めて長い、鐵橋を越して、山を脊にし、北靑の平原を前にして立つた、この新しい停車場の、屋根のカー

プは誰の眼にもこの土地から生れた停車場と云ふ感じを强めた。朱の柱とぴんとはねた屋根を持つた停車場、これがこの土地の自然と調和し、この土地の材料と人の力によつて出來ることならこんな自然の事は無い。それで旅客が氣持ちが良ければ申分は無い。ただ慾を云ふと煙突と玄關の欄間が弱いが、誰れが考へたか非常に可い思付きだ。

旅をする人は如何に事務的の旅行でも、一面見物の氣分と其地の名物を探す氣分を失はぬものだ。同じレールの上を何の變化もなく群山と茸の樣な家のみを見乍ら遠い旅をつゞけた旅客がこの京城に足を止めたと考へて見るがいゝ見たり聞たりしたいものは、活動寫眞でも無く、芝居でも無い、矢張りこの地に生れて長く傳へられたものでなければならない。

その意味から云ふと、朝鮮の雅樂の樣なものはこの土地の所有物でも王家の所有物でもなく、人類の所有物の保存を托されたものと考へなければならないと思ふ。

この文を書いて居ると今丁度大正十五年十二月一日の大阪朝日新聞が配達された。それにも、佛國のクローデル大使が文樂座の燒失を惜んで再建を希望する文が見えた、筆を止めて讀んで見ると其話の中に

『文樂座の再建を計つて永久にあの偉大な藝術を保存しなくてはならない。文樂座の燒失滅亡はただに日本だけではなく、世界人類に取つて取り返しのつかない損失である。これは誇張でも何んでもない全く事實だ』と云ふて居る。

それから下段に大使の文樂の人形の藝術觀とも云ふべき短文があつた、その文は短いが、實に明瞭にこの芝居の藝術的價値と存在の必要を透徹した語で浮彫りに說明して居る。異人種の大使のこの語は外交的辭令でも何でも無い。眞の詩人の心から惜しむ實感である吾々は眼の前にあるもの又は比較的何時でも見えるものには、冷淡になる傾きがある。のみならずこれを輕べツして小さく見る。そうして遠い處のもののみを探す。

先づ足許に汲み絕せぬ泉のある事を知らねばならぬ。そしてそれに培はれて、自分を生かして行く事によつて心の生活と環境とを豐かにして行くべきだと思ふ。周圍の山や建物や陶器や木工品、之等にも雅樂と同じ樣にその地でなければ味はれぬ深いものがある。

大使の語を借りて云ふと、『之れは誇張でも何でも無い』

人形芝居が偉大である樣に雅樂も偉大である。偉大とは平面的容積を言ふでなく、生命と永久性とに關係した計り知れぬ深さの所有如何に關係ある語である。

ロダンは『エフエル塔よりタナクラ人形の方が藝術的に大きい』と云ふた。大使もこの言を肯定すると思ふ。



# 醫事偶感

高野喜六

○

近世某刺吏恤下民疾楚。命醫療之。一邑三千戶。醫五人。一邑千戶。醫十人。紀以十年而稽其功。三千戶邑死者僅十有餘人。千戶邑死者一百人。……因循醫多則死者多。醫少則死者少。……瑣瑣以寡爲奇。磧礫以多爲賤。噫有司多則百姓困。醫多則夭人多。

朝鮮では無暗と醫者の多いのを望んで居るが少し氣をつけぬと右と同じになると思ふ。

○

閉門看書三年。知無天下病不可治。其及出而用藥療病。知今古無方可用。

今の醫學博士が研究室に閉籠り論文を書き上げる間も二三年位が多い樣だ、古今人間の心は大概同じだから面白い。

# 母の歌

野栖磨砂

あけ方のうすら寒さの肌にしむ頃ともなれば母を思ほゆ

○

雨につけ風ふくことに思ふかな故郷にましますは母はいかにと

○

わが指をくゝりたまへる母の手のいたくもやせて老ひませしかな

○

わが涙さとられまじとたらちねの母にそむきて小唄うたふも

○

まつ母はかへりきませず夕ぐれて外の面はげしく雪ふりつのる

○

歸りまさぬ母をまちつゝいくそたび外の面にたてど雪ふりやまず

○

たゝひとり母まつ夜はいやふけてかぜの音のみ耳にたかしも

今の醫學博士が研究室に閉籠り論文を書き上げる間も二三年位が多い樣だ、古今人間の心は大概同じだから面白い。

# 京城雜筆

## 芝居

### 今昔ばなし

前田昇

三

劇場の構造其他場内の設備等は近時全く一變して昔日の俤も止めない、殊に東京は震災後新築を機會に凡べて改めたから此處に從來の模樣を單簡に御紹介しやう。

以前は定則として入口に木戸なる物があつた。云ふ迄もなく鼠格子の戸が立てられてあつたからだ舞台裏や舞台下の構造は今も格別の變りもない、即ち奈落と云つて詰り地下室の樣に舞台下に作業場があり樂屋から俳優の舞台に出づる通路が皆此地下に設けられたが以前の不完全なる劇場には此設備を略したものがあつて俳優は既に扮裝して登場するに見物の座席の後ろの廊下を通つて向場幕に顯はるゝ事となり頗る不體裁であつた斯うした場合或る時花のやうな花魁が男衆に裾を捲らして立つて用便をして居たなどの話もあつた。

確に進歩の部類に入れて良いものは食堂が出來て飲食をしない事だ從來とても一部のブル階級は茶屋へ行つて食事をする向もあつたが大部分は皆座席で窮屈に飲食するが例であつた。從て今日のやうに多種多樣の食物はなく極めて局限された小範圍のものであつた。

座席は震災後各座全く椅子席となり自然稱呼も一變した。以前は平土間、高土間、棧敷と分ち外に中平とか前船（向正面）とか新高など云ふ稱呼もあつて凡て觀覽料は此座席區分に依り一間（五人詰）何程と規定した。即ち一人單位でなく座席一區劃を以て單位とした。此當時は一人又は二人と云ふ少數の見物には頗る不便で此の如き少數見物は『割り込み』と云ふ名稱の下に他の見物と一座席に混入するため自然上等の場所を占め難く同一料金を拂ひ乍ら遠方の位置に追ひ込められたものだ。今日では一、二、三、四等と座席等級を定め一人を單位として然も數日前より座席券を發賣して座席の占有權を確保するやうになり頗る便利となつた。

同じやうな座席の名稱が東西で違つて居るのも妙なものだ。東京の平土間か大阪以西では平場（是は大體似寄て居る）高土間が出孫又略して孫といふ。可笑しいのは東京で以前平土間の最前方即ち舞台の直下に位置する場所を『小一』と云ひ、其次列から一、二、三と番號を附してあつた『小一』は普通の土間より少し狹いから稱へられたものだが、大阪では此『小一』を『かぶり附き』と云ふ。蓋し『囓り附き』の意味で舞台の鼻に囓り附くと云ふ意か隨分露骨な名稱である。餘り大阪の惡口も云へない東京でも高土間の最後方即ち棧敷の直下を『うづら』と云つた。蓋し鶉の籠中に在る態に擬したものか是も可なり露骨である。

以前は各座附の茶屋と云ふものがあつたが今は全く跡を斷つた。元來芝居茶屋なるものは一種の案内所に過ぎないが（古い以前は滿奔者の密會所ともなり殊に俳優などとの會合にも用ひられ可なり風紀を紊した時代もあるらしい）此案内が無くも元より觀覽は自由な譯なのだ。詰りブル階級の見得の場所で又此芝居茶屋が座席の好い場所を占領して居る爲め從來は茶屋に馴染があつて此の手からでないと座席の好場所を占める事が出來ないと云ふ弊害があつたのだ。

各座開場前數日に茶屋からお得意の家に番附を配る（此番附は木版で其墨が莫迦に臭ひものであつた、此臭ひが強い程其芝居は當りだと云つた）茶屋の男が持つて來て『お早く御見物を』と番附を置いて行く、家に依つては酒の一杯も飲ませ否らざるも祝儀の包物は當然である。良い加減安くない番附につく、其上に毎回番附の取り切りも出來ない、詰り茶屋への義理で三度に一度は嫌でも行かねばならぬ一種の義理見も起つて來る

## うわさ雜記

平田久雄

◎經濟日報の小野久太郎氏、以前は杯を手にすると山中歷日なしであつたが、此頃は『オツト十時だ、君失敬するよ』帽子と外套をふんだくるやうにして、二階からトン〳〵。譯を訊いて見ると、今年小學六年といふ令息、おそく歸ると、寢床から起直つて『お父さん、今頃まで何をしてゐた、何が面白くて飛び廻るんだ』此一喝には一代の猛將も『ウ、ウ、ウ』

◎明治町の蜂谷といふ印判屋に行つて見ると、大きいビラに、蜂谷商店出入記者團と大書し、三十何名といふ出入記者の名前が書いてある。變だと思つて聞いて見ると、此所の主人が聯珠の先生で、それらの豪傑は皆門生とある。ハハーン、なるほどネ。

ひ外の面にたてと雪ふけやまず

○

たゝひとり母まつ夜はいやふけて
かぜの音のみ耳にたかしも

口外に『ユニホルム』ばかりクラ人形の方が藝術的に大きい』と云ふた。大使もこの言を肯定すると思ふ。

# 京城雜筆

## おらが春

井上收

目出度さも中位なりおらが春

とは郷土の俳人一茶翁が『おらが春』に述べた句で、この句の生命は、中位といふ點にある。一茶翁にして見れば、中庸など〻小理屈をいふつもりでなく、心から中位なものと言つたので、そこに少しの匙引もない。この位自己を赤裸々に、出すといふことは立派な藝術である。人間は素つ裸で物を言ふ勇氣がなくてはいけない。

明けたから昨年になる、一茶翁逝いて一百年。今日の文化生活者といふ、知つたかぶりの、きいた風な連中が、童謡だの民謡だのと大發見のやうなことを囃し立てゝゐるが、一茶翁などは百年も前にあの信濃の大高原の、それも多は雪に埋れた、千曲川邊で、何の技巧も手管もなくすら〳〵と、それこそ自然に、今日の童謡や、民謡を卒直に謳つて居る。

◇

とも角もあなた任せの年の暮

も今日の人ならば、いくら働いても、稼いでも、この社會組織を根本から變へなくちやあ、どうにも動きはとれない、なるやうになれといつた捨鉢の境地である、それを一茶翁は『あなた任せの年の暮』と、それこそ素直に、微塵の反抗もなく、抒情詩の境に融合して居る。翁はその頃の最も逆境な生活者でありながら、この正しい詩の世界に生きてゐた、といふことは、羨望の極みである。

翁の村と、私の生れた古い城下の町とは、いくらも離れてはゐない、千曲の流を隔てた、川の西東である、私の亡くなつた祖父などは、よく翁のことを知つてゐた。

いくら資本家でも、金持でも、年の暮や、新年となると、相當に昂奮してゐる、まして貧しい者、生活に喘ぐ人々の神經が、どうしても鋭感にならぬ譯にはゆかないこの境に立つて物質を超越し、春草の萠ゆるやうな、長閑な心持で居れた翁は、幸福な人である。

◇

『から風の吹けば飛ぶ屑屋は、屑屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の、曲り形りに、ことしの春も、あなた任せになん、むかへける』といつて居る。この屑屋の中で『中位の春』が迎えられた、曲りなりにも春を迎えるといふ心持が、門松はめんどう臭いので立てないのであらうが、世とすねない心境が、また尊くも嬉しい。今時の人間ならば、こんな面白くもない、錢もないのに何が新年か、晦日の晩から戸を締めて外へ出るものか……といふべき所であらうに。

殊にまた嬉しいのは、この『おらが春』の内で、その曲りなりの春を迎えながら『こぞの五月生れたる娘に、一人前の雜煮膳を据えて』と前書して

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

と兒童愛の極致に浸つて居る、漸く二つになるか、ならぬかといふ幼兒に、一人前の雜煮膳を据えた……どう考へても味つても嬉しい屑屋の春の情景である、世間態や、人前ばかりをごま化し、成人の正月は屠蘇に醉ひしれても、子供を閑却したがる當節

【二八】

◇

私は昨年、資本家に逆つて、素裸の人間になつたが、隨分その短い間にいろ〳〵と變つた世相を見たがその度毎に、明るくなり闇くなり、どんなに自制しても、一茶翁の考察には到達し切れない、たゞ『あなた任せの年の暮』と『曲りなりの春』だけは郷土の先輩に模倣した。

いろ〳〵な看板をかけてゐると年の瀬と、新年は、いゝ加減小蒼蠅いものである、錢金の話をするのも、吝つたれてゐるか知らないがこれも相當自腹が痛んだ。ことしはまづそれも曲りなりですむ、出來ない處で、私一人が罵られたり悪まれたりして居れば他人樣にご迷惑を及ぼすやうなことはない。

年末年始となると、そればかりか、ごますりがいゝ加減多い、そんなのもこの春はお世辭をならべに來ないであらう。來た所で、ごますりされずに居れば新年は過ぎてしまふ。籠の中に住んだ女性の經驗はないが、その籠から放たれたやうな氣持である。生れて初めて感じた、無遠慮な『おらが春』に浸れる譯である。めでたし〳〵。

## ◎町内往來記

石川利夫

町の人で飛びぬけて英語のうまいのは、丁字屋の鈴木支配人。獨學で、話も出來るし、本も讀める丁字屋の賣出し方法の新奇警で喝采を博してゐるのは、氏の頭の新しい所から來るのだ。帳簿などの檢査は、實に手に入つたもので京城神社の會計檢査など、殆ど氏一人で切廻してゐる。

# 庭球夜話

職務能率が昂められる。歳をとつてもまだテニスを廢める氣になれぬ、狂的視してゐる門外漢は『も

積極的銷夏法とでも云ふべき最も男性的庭球の場面である、秋晃朗

# 庭球夜話

林原憲貞

木の葉散り果ててから、もう大分旬日を累ねた今日此頃の初冬、どうしたものか本年は寒さの來るのが晩い、内ではペチカを焚いてゐるが、外は全く小春日和のやうな好い秋らしい天氣。

本年は不思議にまだテニスが出來る、何んて惠まれた歳であらう改正角一ボールはまだ能くバウンドする。

春より夏秋にかけての所謂運動シーズンの行樂期を了へて、暫しボールとラケットに惜しき別れを告げる度毎に、僕は過去幾星霜の庭球生活を追懷し、更に新なるシーズンの活躍を想ひ起すのを例とする。

手持無沙汰氣味になつた夜、球友と膝を交へての球話、數限りなき戰績の追憶、とりとめもない無邪氣な歡談に一夜が過ごされる、晴れやかなる陽光に浴しつつ、大地を踏み付け、ラケットを振り廻す快感が聯想せられ面の當り活動の場面が展開する。過去十數年の庭球生活——語るべく餘りに資料が多く、到底筆紙に書き盡せぬ。

近代の運動種類は枚擧に遑ない程澤山あるが、僕は飽く迄テニスがいつとう面白いと思つてゐる、テニスあるが爲に、僕の私的生活は十分に色彩が添へられてゐる氣がする、テニス其ものは一種の運動競技であるから、人生觀には緣遠い、併し是れに依つて心身の清伸を來し、生活味を善化し、公的職務能率が昂められる。歳をとつてもまだテニスを廢める氣になれぬ、狂的視してゐる門外漢は『もう廢してもよかろふ』と言ふが、僕には廢さねばならぬ理由が見出せぬ、僕にとつては全く三度の食事を一度位廢しても、テニス丈は止められぬ程好きである、テニスの効益——そんな事はどうでもよい、兎に角僕自身の先天的運動慾が承知せぬからである、唯だ同年輩の同好者の漸次減少するをば聊か心細い寂し味を覺へる。

ラケットのガットが、軟らかなるゴム毬に、打當つた刹那の快感——これが庭球趣味の中心的眞髓である、野球の響がガーンで、庭球の響はポンである、軟球と少し違うが硬球と準硬球にも、其れ其れ特異な響感——腕より頭に氣持良く響く。

若しそれゲームに於ける前衞のモーション——其れに對策する後衞のブレーシングに至つては、孰れもデリケートな妙味が津々として含まれて居る、觀衆的に變化乏き庭球も、體驗者に取つては野球以上の趣味が潜在して居る。

僕等の一年中の行事は、水温む春の來る日が待遠くて、二月十一日の紀元節頃から、徐々始める歳もある、櫻咲く頃ともならば、猫も杓子もコートに足を運ばせ、シーズンの幕は、一般的に開かれる僕は花咲く頃のテニスに落つきがないやうな感がしてならぬ、寧ろ青葉茂りアカシヤの花散る頃の環境を好む、八月の猛夏、コートの地より炎々と立昇る火の如き陽炎燃ゆるが如き炎をものともせず、ラケットを振つてゲームカウントを相爭ふ光景は、炎夏に相應しい積極的銷夏法とでも云ふべき最も男性的庭球の場面である、秋晏朗かなる朝鮮の秋——澄み冴へたる藍碧の空、打續く好天氣に惠まれた秋の庭球は、正に一年中の好季節で書入日と云つてよい、郊外散歩、栗捨ひ、登山、魚釣、其れ等の行樂も結構であらうが、手近なコートに引附けらて了ふのが毎年の例である。

冬のテニスは、聊か奇狂の嫌ひがあるが、僕は正月の多休みに二度釜山でテニスをした、元日早々朝から晩まで試みたこともあつた寒風荒む草梁の高臺で遣つたときは、あの重い硬球が一尺もカーブして、面白味も何にもあつたものでなかつた、唯だ耐寒的試練とでも云ふに過ぎぎぬ。

懐しい思出——西大門鐵道コート時代では、全く家族的庭球であつた、時の和田駿參事が南大門官舍から態々自轉車で來襲せられて能く御相手したものだ、時には風呂上りの好い氣持になつた居る夏の夕方頃から、引出されたことも再々あつた、京城在住の井田、矢野、西谷等の名選手も時々來てコーチして呉れた、雨の漸く歇んだ頃、コートの乾くを待兼ねて、雨溜りの水を椀で汲み取つてまで、テニスをしたこともある、龍山コンクリートコートのオヂサン倶樂部時代も、却々面白かつた、夏は凉風多き樹蔭の下で西瓜を喰ひつつ、また寒い日は古材を焚いてやつた、其の當時の興味に富んだ庭球時代の事は、今尚忘れることが出來ない。

一年中どの位ひテニスをするか——最近の統計では、多かつた年が百二十八回、本年は（十二月一

日現在で）まだ百十回しかやらぬ始まりの早かつた年が、二月十一日で、終りは十二月九日と言ふ狀況である、普通のシーズンが四月より十月迄として、此の日數二百十日であるから、約其半數が僕等の働いた日數となる譯だ、テニスの眞最中來客に接して呼び歸されることがあるが、是れ程困ることはない、テニスは幾ら耽つても、撞球、碁、將棋のやうに、夜を徹することはないから、其の弊は尠いと思ふ。

テニスは根氣好くやつたが、其の技倆はヘボに始りヘボに終つた併し自ら誇るべきは、繼續的精力根氣である、二十年曩の若冠に伍して、長ゲームならば敢て引けを取らぬ積りである、試合も隨分行つた、田舍征伐や小者の試合は暫く措き、印象に殘つてゐる大試合としては、安東に於ける第一回滿鮮試合に參加して、敵の最强組と對戰したことと、倭城臺コートで其の當時の一流選手大島坪井組と大接戰の結果快捷したことである硬球では、選手權爭奪戰試合のシングルゲームで、京城高商の學生に二度捷つたこともある。（十二月一日稿）

# 愚痴五つ

小林百代

一

愚痴つて自己滿足の微笑をもらすとき人間性の弱味がある、自己冒瀆の苦笑をもらすとき人間味ある强味が滿へられる。

二

松島事件の大立もの箕浦某も、若槻某も、角南某も、それ〳〵その道の愚痴を深刻に味つて苦微笑禁じ得ないこと〻思ふ、その苦微笑にたえかねて、平山某の直訴事件は日本政道の大愚痴であるとか。

三

大阪の文樂座が燒けた、大阪城が燒けてもあれ程惜まれなかつたろう、事ほど新聞紙上に特筆されてゐる、大阪市民の愚痴への鉄口策か、今頃は燒けたお人形さんが苦微笑して居ることだろう。

四

政本提携に政治の倫理化が沒頭されて居る、政本の提携は今の政治が倫理化される道程なのだろうか、事件々々と矢繼早の事件の仕末が一ト山十錢で倫理化されたら安いものだと、本町あたりの節季の愚痴を苦微笑したくなる。

五

皇室の藩屏たる某侯爵が百萬圓の生命保險をつけて、毎年アメリカに五萬圓を奉納するとか、日本には四十餘の生命保險會社があつて一社十萬圓位の契約は易々たるもの、おかげで金輸出解禁も遠くはあるまいと愚痴の大詰、サリトハ地獄の大王、閻魔帳をくり開いて欠伸まぢりに苦微笑の態。

秋本豐之進
奉
立川芳
悼
竹內健
井上賢太郎

せん。實は疾くに御禮の御挨拶をする筈でしたが、目錄は紀念品で

と存じます。

永い間私の頭を腦やまし記念

【二〇】

## ◇聯珠風流記

平田久雄

○

歲晩の寒い或る夜、鏢業會の德野氏が、三越前を通ると、『サア〳〵この五目並べを、立派に解決した人があれば、この五十錢の書物を呈する、但しやり損なつた方は、定價通りで一冊づゝお買上げを願ふ、チョン、チョン』と大道賣りをやつてる一老人が居る。

○

その前は黑山のやうな人だかり學生、勞働者、洋服男、チョビ髯君、入り代り立ち代りやつて見るが皆失敗、五十錢づゝの本を、買はされて、『チョッ癪にさわるなア』

○

そこで、德野氏、ヌッと出て、『先生、これでどうでせう』、急所に一ッぽーんと卸すと、大將眼を白黑して『ヘッヘ、とう〳〵見破りましたね、これはお若いに、感心々々』『そこで、一冊たゞ貰はうかね』『ヘッヘ、事こゝに至りましては……』とう〳〵一冊失敬する。

○

左樣ならと行きかゝつたが、德野氏何となく心が安定しない、またあとへ戻つて『先生、こゝへ本代をおいて行くよ、そーら』銀貨を一ッチリン。すると老人ずるく笑つて『ヘッヘ、あんたは有望だ今に出世しますよ』……註に曰く德野氏は聯珠何段とかの剛の者なのである。

てゐる、大阪市民の愚痴への鍬口策か、今頃は燒けたお人形さんが苦微笑して居ることだろう。

悼

井上賢太郎

今に出世しますよ』……註に曰く憶野氏は聯珠何段とかの剛の者なのである。

# 京城雜筆

## 農業文庫の卵について

飯泉幹太

此の文庫は近頃流行る食糧問題の熱に浮かされて出來たのではない。實に次の樣な尊い贈物を如何に有益に紀念しやうかと苦心した結果である。勿論只今はホンの卵に過ぎないが、折角始めた以上是非完全の發育をさし此種の書物を出來る丈け多く蒐めたい考である又內鮮各方面例之農林省、農科各學校、各府縣道等の農務課其他會社個人等に交渉してパンフレット統計、報告等を集める積りであるソウしたら少しは參考になるものになるかも知れぬと樂んで居るのである。

從來辭令一枚で何處に飛ぶか判らなかつた私は、轉勤每に荷造の手數を省き、運賃の節約をする爲め讀んで了つた書物は總て其の地の圖書館又は學校に寄附して來たのである。所が今度文庫をやりかけるとアベコベに寄贈して貰いたい樣な心持になつて來たのであるドウカ皆さん私同樣此文庫を可愛がつて出來る丈け完全の發育をさし多少なりと利用していただきたい希望を持つて居るのである。

### 御挨拶

去る三月朝鮮銀行を辭めました結果、京城銀行集會所を脫退する事になりました。皆樣には公私共大變御世話樣になりましたに拘はらず、猶其の上惜別紀念品まで頂戴いたしまして誠に恐縮に堪えません。實は疾くに御禮の御挨拶をする筈でしたが、目錄は紀念品でも中味が紀念金だつたので、ドンナものを選んで、此の意味深い御厚誼を紀念しやうかと隨分心を痛めました。思案に餘つて先輩知友にも相談しましたが、之と云ふ好案も出ませんでした。其の後東京に三回程出懸けましたので、アレやコレやと探がし廻りましたが適當のものが見當りませんでした。右の次第で世間有勝ちの『結構の紀念品を拜受し難有永く家寶に』云々などのお世辭も出來ず、心ならずも今日に至りまして何とも申譯ありません。

今度先輩の御罵めで不二興業株式會社に就職する事になりました御承知の通り同社は朝鮮農事改良の先驅者として二十餘年間奮鬪努力して居ります。顧みれば私も二十五年と云ふ相當永い間、朝鮮に在住して交通、倉庫及金融界に全力を注いで來たのであります。今後私の餘生を我朝鮮の爲めに捧げて、農事改良及農村振興等に携はる事は、滿更ら意味ない事でないと信じて愉快に働いて居るのであります。トコロが如何に興味を以て働いても皆目此の方面の智識經驗がないので思ふ樣に仕事が出來ません。實際家は、よく學問よりか經驗が第一と申します。誠に味ふべきことに違ひありませんが、學者が心血を濺いで研究した學說實地家が惡戰苦鬪の結果、體得した、尊い經驗の多くの事例は、書物によつて知る外ありません。別けて今後私共の最も研究すべき人口、食糧問題及之に伴ふ幾多の難問題は、只僅かばかりの經驗では解けません、多くの學說と多くの經驗とを參酌する必要が大にあると存じます。

永い間私の頭を惱やました紀念品問題もヤット解けました。御贈り下さつた紀念金で農業文庫をつくる事が最もよいと氣が付きました。而して各書店の目錄から農事に關する書物百數十冊を選んで注文をいたしました。遲くも十二月十日頃迄には全部到着する筈です御蔭でホントウによい紀念文庫が出來ました。若し之に依つて他日私が朝鮮農界のために聊かなりと貢獻する事が出來ましたならば夫れは皆さんの紀念の賜物と深く感銘致す次第であります。

私は之を基礎として此の文庫の完全なる發達を期したいと存じます。今後關係新刊書などに付て御氣付の點がありましたならば御注意を願ひたいと存じます。又之に關する御讀了の不要書物、統計、臨時刊行物などありましたときは是非御寄贈を願ひたいと存じます勿論此の尊い紀念農業文庫は私のみ獨占すべきものではありません篤志の方にも御厚意を御配けして朝鮮農業界振興の一助としたいと云ふ强い感謝の念に充ちて居るのであります。圖書目錄は追て御知らせしたいと存じますが、今回御厚誼で買入れた書籍は大體左の種類のものであります。

一、各種耕作に關するもの
二、土壤、農業氣象、地文及肥料に關するもの
三、農產物、林產物製造に關するもの
四、農具に關するもの
五、農藝化學、食品化學、營養物に關するもの
六、園藝、果樹、畜產、森林及養蠶に關するもの
七、土地改良、開墾、水利灌漑干拓地及農業土木に關する物

八、農村問題、小作及小作爭議に關するもの
九、農業經濟、金融及倉庫に關するもの
一〇、農業政策、農業史及農事爭動に關するもの
一一、農業法律に關するもの
一二、產業政策、交通運輸史及產業組合に關するもの
一三、稅關及關稅に關するもの
一四、社會政策及社會主義に關するもの
一五、農家副業に關するもの
一六、農村振興に關するもの
一七、產業統計に關するもの
一八、移民殖民に關するもの
一九、農業益害禽虫に關するもの
二〇、米穀取引に關するもの
二一、人口增加、食糧問題及產兒制限に關するもの
二二、農村文藝に關するもの

以上

# 新春

山野左千彥

## 半島の美

垂乳根よ今しおはさば初春のこの溫突に屠蘇まゐらせむ。
父母はいまはおはさずこの國の凍る初日はえ知り給はず。
この國に移りて八たび新年の春を迎へし我家なるかな。
この春の目出たきことは勤めやめて心ほがらに吾子を見ること
初春のさぎらふ山の松かげに畏こき宮の千木は光れり。
この宮に初詣でしてあかときに雜煮を祝ふさだめよろしき。
南山の山の麓にこもりゐて小倉かるたの春をきくかな。
この春はまらうどもなし然れども子らの踊りてうたゝめでたし
子供らは日射しよろしき椽に出でゝかるたを遊び寧柑を食めりうらゝかに晴れたる庭ゆよべ降りし雪を集めて子らの春かな。

## 故山の春

草葺きの納屋の南の竹むらに山茶花咲けり我があれし家は。
飯綱の山嶺はるかに雪來れば我家の軒に大根を干しき。
この國も鄙も都も春はくれど千曲川邊の山國われは。
一木立つ雜木の中の杉の木の雪をはふりて雀の飛びき。
雪の朝は軒端に粃をまきおきて雀を捕りて燒きし我かな。
雪降れば炬燵の上に吹矢うけて庭の小鳥を捕りても見たり。
竹馬の高きに屋根をえ渡りてまろびて雪に埋づもれし日よ。
雪のけて摘みたる菜をば尊しと初日の朝の雜煮にたきぬ。
串柿と寧柑と粟と盆にうけて炬燵にまろびむさぼりし日よ。
串柿の串を集めて爐に焚きし祖母の姿のなつかしきかな。
千曲川凍れる水に舟うけし橋を渡れば故鄕は近し。
その昔碓氷峠の雪を見つ歸省の我のなつかしきかも。
かの淺間都にかへる汽車の窓にはろかながめてしぬびもしたり
爐端にて餅をやきつゝ居睡りて除夜に果てたる老婆しぬばゆ。
かの老婆をおばやとよびつゝ下獸の緒を幾度きりて無理を言ひしか。
我家に二十餘年を働きて孫のごしとわれを育てしが。



## ◈學鷗氏近業

一記者

○

松田學鷗先生から『朝鮮雜記』といふ小著を贈られた。

○

袖珍の、極めて質素な裝禎であるが、讀んでこれ位手應えのある書物は、近ごろ接したことがない

○

朝鮮の字義や、異名に關する簡單な解說も、この人ならではと思はゝ確かな根據があり、何となく力强い示唆を與へらるゝ。

○

韓客より見た日本風俗、通信使の話、日本への船路など、淡々たる叙述だが、いづれも適確な知識を吾々に與へる。

○

春畝公の詩、南山と倭城臺、歸舟一百韻など、先生の囊中のもので、最も感興多く通讀した。

○

朝鮮の山、高山、名山、河、湖溫泉、棉花、萩、米、朝鮮牛など先生の研究が、思ひもうけぬ方面に進展してゐるのに驚く。これ實に朝鮮の博物誌である。

○

卷末の方に行くと、吉野左衞門のこと、加藤刀畔氏のこと、石器王（小池奥吉氏）のことなど、親しむべき記述が多い。

○

先生の筆は、既に枯れ切つてゐる。脂粉の氣はマルデないが、それでゐて、何となく變誦禁ずる能はざるものがある。總督府の出版である。併し廣く發售されんことを希望する。

# 二十五週年紀念
# 特價販賣

創業以來貳拾五週年の經驗を有し最も信用あるペーチカとして鮮滿第一と定評ある

## 宮崎式ペーチカは

今回商工省發明奬勵費交附規則ニ基ク發明表彰規定ニ依リ審査ノ結果優良ナル發明ト認メラレ有功賞牌及賞狀ヲ賜フ

特色と効果

一、放熱强大
一、完全燃燒
一、保健衛生
一、燃料半減

本年度新發賣三號型

在來品に改良を加へました陳列所も落成致しました實物御覽下さい

御申越次第カタログ送呈

京城府龍山驛前　電話龍山長八四二番

**宮崎組本店**

京城府本町三丁目電話本局二八八九番

**同京城販賣部**


故山の春

草葺きの納屋の南の竹むらに山茶花咲けり我があれし家は。

しか。

我家に二十餘年を働きて孫のごしとわれを育てしが。

はさるものたあ

である。併し廣く發售されんことを希望する。

土居八段主幹
月刊 将棋新誌
（一冊定價金三十七錢）
發行所 東京市橋區西紺屋町五 将棋新誌社

市内明治町二丁目
内科 小兒科 中島病院
院長 中島貞信

西洋料理
支那料理
東京へお出での節はどうぞお立寄りください
東京芝區新櫻田町一七
泰明軒

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長 木戸虎藏

市内明治町二ノ七五
利根川齒料醫院
院長 利根川清治郎

市内旭丁二丁目
外科
皮膚科
瀬戸病院
院長 瀬戸潔

市内鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

人生の幸福は健康より
建康それは蔘精の服用によって解決します明日と云わず今日から而して人生の幸に向つて
（定價内用二十瓦入壹圓五十錢）
京城本町二丁目
滋腎附蔘精發賣元
貴生堂藥品店
電話本局一三八
振替京城七六一

高級
京染
（新柄見本到着）
京城本町三丁目

電本三〇六八
振京五八三

市内吉野町一丁目
内科
小兒科
木村醫院
電話本局七二五

京城

遷色を見ない位であるが明治三十八九年頃迄は御咄にならぬ程道路は狹隘で不潔で家屋は至つて貧弱路幅は漸く一間内外であり加之も參差綜錯迂餘曲折、實に不規則千萬であつた。之を時の民長中井喜


金剛山産松實松花應用菓

金剛煎餅　金剛山
金剛羊羹　金剛饅頭

金剛飴

金剛柏子（松の實鹽炒り）　金剛おこし
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）　金剛しるこ

京城本町二丁目
電話二十七番
本局四七五番
龜屋商店

京城

# 昔ばなし

藤村德一

## 一、僞造の建白書

子爵李夏榮の實弟李準榮氏農商工部協辦たりし時協議の結果同氏及當時農商工部技師たりし金倫久同崔相敎外二三人の名義にて朝鮮開港場の埋立利用を出願したるに釜山、仁川兩港丈の埋築勅許を得た。所が偶々長森藤吉郎氏の獲得せる權利と衝突したる爲め實兄の外務大臣に累を及ぼさん事を憂慮し、官を辭し野に下り居ること二三ヶ月にして其埋築問題は無事解決し勝を制したるも收入なきより任官の一手段として私に中井民長及び遠藤主計監の名義にて李太王に宛てたる建白書を認め與れよと懇望されたので其請はるゝ儘に日韓交渉の日に倍々頻繁なる今日、李準榮氏の如き日本通にして世務に老練なる名士をして空しく野に蟄伏流浪せしむることは世運の發展上將た人物經濟上極めて不利益なれば一日も早く相當の地位を與へて利用せられん事を貴王の爲めに切望する所であるといふ意味の建白書を呈した。所が其効能の顯はれたるや否は知らざるも兎も角旬日を出でずして學部協辦になつたのである。

## 二、本町通の不潔

今日でこそ本町何丁目杯と稱へ立派な市街で其店舗の如きも內地の六大都市の外に比較しても多く遜色を見ない位であるが明治三十八九年頃迄は御咄にならぬ程道路は狹隘で不潔で家屋は至つて貧弱で臭氣紛々たるものであつた。即ち其一例を擧ぐれば本町三丁目開敎院の所在地には山口大助氏の經營に係る屠牛場あり、大和町二丁目片村庄次郎氏宅の附近にも川本準作氏の出資で平山某屠夫長として毎日牛豚を屠殺し其汚汁は悉く川に流出せしめて居つたのである

## 三、本町通の擴張

本町三丁目より四丁目に至る道路幅は漸く一間內外であり加之も參差錯綜迂餘曲折、實に不規則千萬であつた。之を時の民長中井喜太郎氏が金一千圓の豫算で道路擴張を計劃し下僚を督勵して其實行に着手した。處が民長の社會奉仕的熱誠に感かされ各吏員は晝夜兼行で其所有者を說服した結果一ヶ月を出でざる裡に一人の不平を唱ふるものもなく至極圓滿に買收を終り現在の道幅としたのである。夫れでも尙豫定の買收擴張費を剩すこと四十餘圓なりしより此を以て吏員一同の爲めに慰勞宴を催ふされ私も招かれて御馳走になつたに發奮興起して、一つトツカビンでも、ウント呑まうと思ふがどうです?』

○

瀨戸先生に『御景氣は、どうです』と訊くと『大にいゝヨ』とある。ではどういふ內容でと訊くと『この間も燒栗屋の餘人が、居眠りしつゝ線路を歩いて、電車にイヤといふ程頭をぶちつけた、先生助けてくれといふから、オーよし入院しろと引取つてやつたが、君どうだい例に依つて文なしかと思ふと、一ツ金六十錢也を懷中してゐる。こんな例は近年ないぢやないか、アハハハ』

○

松本正寬氏といふと、貨殖道の達人で、世間的評判は餘り香はしくないが、時々うまい辯論をする。この間の金虎門事件の、例の宋學先の辯護など、滔々一時間半に及び、その論旨といひ、修辭といひ實に稀に見るの大熱辯であつた。惜しいかなどうした譯か新聞では一行半句もほめて居らぬ、正寬先生寂しからう。

## ◎江湖見聞帖

山口のぼる

明治町の衣笠病院長、器用なこと無類、この頃彫刻を始め、如意一本を淺川伯敎氏に贈る。淺川氏つく〳〵眺めて『之をあなたが、フーン驚いた、あなたはエライ腕をお持ちですね』爾來淺川氏談衣笠氏のことに及ぶと『藥研の番人には實に惜しい天才です』

○

龍山電話分局長の古河さん、溫雅な長者である。愉快なことはと訊くと、子供の時學校の行き歸りに、友達と一所によく車エビを釣つた、釣りは實に愉快ですな。そこで今度は不愉快なことはと訊くと、大きく一ツ笑つて『僕は鴨綠節がヘタでね、宴會に行くと皆が面白さうに、唄ふのに隅ツコの方で、一人チビリ〳〵とやらねばならぬ、こいつは、實につらいですよ』局長また曰く『僕はやつと五十に手が届いたのに、白髮だけはこの通り、何所へ行つてもお爺さん待遇はいたみ入る、そこで大

【四七】

# 京城雜筆

## 山の芋

笠神志都延

山の芋はうなぎとなり蛤化して雀となるのが眞理ならわたしが編輯記者から營業社員に轉じたのは不思議ともいはれない。

列べて書き出すときは營業局長は常に編輯局長の左隣に置かれるやうで、從て編輯から營業に轉じたわたし、これが本當の左遷といふのだらうが、かといつて之が編輯の右隣に書かれたところで、右遷といふ熟字も行はれぬ限り左遷といふ字面に附着する一種の感情が起りそうにもない。努めて起さないのではなくて努めて起さうとて起きべき動機のありやうがないのである。

新聞社の經營が二元的なのはこれは宿命であつて編輯肌と營業型とは何處かに違ふところがあるといへばない事もない。前者が『さむらい』なら、後者は『あきうど』といへるかも知れぬ。武家と町人とを抽象化して並べて見たら新聞社の編輯と營業との對立を髣髴する事が出來る。わたしはその武家から町人になり下つたわけになる

明治初期に武家から町人になり下つたものは皆失敗した。貯蓄を喰ひ秩祿公債を喰ひ衣類大小、殿からのくさ〳〵の下され物を喰つて尙失敗の穴はふさぎかねた。よつて士族の商法と申す文句が生れ一世を嘲殺する警句となつて今の世にも殘つて居る始末だ。ソコでわたしの場合であるが果して士族の商法に墮しはせぬだらうか、と半夜物靜まりたる時反省して見ぬでない。

士族の商法で必ず損の立つものなら直ぐにも辭表をと考へるところだが、めつたにこれは面白くしてやめられぬとあつて頑として居すわつて居る。居すわつて居りさへすれば新聞はどうやら賣れて行く。それが新聞の社會性を實證するゆえんでペラボウな代物でない限り讀者は端から新聞を買てくれるから妙だ。さうして一擧手の勞を拂へば百部を增し一投足の努力を致せば千部を增す。ボロイ儲けに成金を夢みずんばどうやら二一天作の五と割り切れるからいよいよ妙である。それにしても努力が第一、トンだ樂屋落だがわれ等の新聞は御役所が十時出勤となつた昨今でも九時半出勤といふことで午後五時までは轉手古舞の大勉强だ。これで讀者を引き付け新聞が賣れなかつたら大へんである。

編輯記者が營業社員になつたからはわれ等の新聞をほめたからとて自畫自讚のくすぐつたさはないとおもふが、事實京城日報はとてもよくなつたものである。わたしはこの頃ある社用を以て次ぎのごとく書いた。

未來の理想を語れば京城日報にも若干の缺陷はありませう、併しながら現實に卽して敢てこれをいふ、京城日報は確に完成いたしました。念々の祈願、粒々の努力、われ等は今しも此完成を得たのであります。

と、京城雜筆の愛讀者はかならず京城日報の愛讀者イットセルフと確信はするが『新聞を賣ること』の外の生活は一轉瞬もない近ごろのわたし、又しても愛讀勸誘の口癖が出て相濟まぬ次第。

## ◇記者の手帳

吉田莊一

○

十二月號に、井上收氏の『半島に聽く』を、本社で取りつぐことを書いたら、イの一番に渡邊晋博士から『早速一本を御取次ぎ願ひたい』と申込まれた。何となくうれしい氣になる。

○

尾崎敬義氏から、十一月三十一日附でハガキが着く。近詠二首が書かれてゐる。

夕暮を呼べば少女のいらへする
聲素直にて秋風ぞふく

いまだなほふりすてがたき世の中の秋とはなりぬ白雲のとぶ

氏の溫容に接せざること茲に半歲くれ〳〵も御健康を禱る。

○

ひよつこり京南鐵道の井上支配人が來訪する。一流の快談洛々としてつきない。歸途社屋を一ッ見物しやうと、洋服に下駄を突ッかけて、そこら中を檢分する。隣地を指して曰く『ついでに此所を賣收せんと、不體裁でいかんなア』と。態度鷹揚、一世の資本家の如し、我々社員大に意を强うす。

○

京城二昔會の藤村德一氏、電話を貸せとて立寄りて、某印刷所と印刷物の交渉を始む。一千五百圓のいひ値が、たちまち一千圓に下落し、いよ〳〵となりて、遂に八百五十圓に讓步す。瞬間藤村氏と相顧みて『印刷とはべう棒なもんですなア』

○

將棋盤ー材料カツラといふを買い來る。體裁佳なれども、木堅く音調惡し。これでは良い將棋はさせんと思ふ。悲觀の至り也。

## 旦那と緣起

さんに議論を吹っかけようとしたから、マア〳〵待ちたまへと云ふて私は之を制して『森さんの云ふ[illegible]

言ふ樣な意味の言葉になつてゐる實に嘆はしいことであるが、因襲といふもの〻力のおそろしいものであることをつく〳〵感じた。

世にも殘つて居る始末だ。ソコでわたしの場合であるが果して士族の商法に墮しはせぬだらうか、との外の生活は一轉瞬もない近ごのわたし、又しても愛讀勸誘の口癖が出て相濟まぬ次第。

# 旦那と緣起

鈴木文助

けふ電氣機械屋の森サンが見へて、私が思想と生活の本月號に載せる『科學と佛敎』と云ふ原稿のあつたのを見たものか、話がたまたま思想問題に這入り續いて信仰上の問題に移り、禁酒論まで出たそうして最初氏がクリスチヤンになつた動機や、或は夏目漱石サンに私淑したことや、或は氏が東京時代に機械學の研究の方はそつちのけに、さかんに思想問題にかぶれて諸家を歷訪し、或は大内青巒加藤咄堂、井上圓了、村上專精等の諸師や、或は島田三郎、黑岩涙香、阿部磯雄、木下尙江氏等の諸名士の門をたゝいて、思想と信仰などの話を聞いて廻はり、終にはユニテリアン敎會に這入つて佐治實然氏に洗禮を受けた話までした尙ほ現在、貞洞の敎會に時々行くが神を信ずることが出來てもキリストを神の子であると信ずることが出來ず、山上の垂訓や五戒を守ることには努めようとは思ふが天國や未來の生命に就いてはこれを信じようとは思はれない。云々とトルストイの思想に似たユニテリアン式の信仰を述べ立て、さては禁酒論に轉じて飲酒の害を說くこと數言、最後に『佛敎は惰落してお話にならぬが、キリスト敎の方は當時なか〳〵生氣潑溂たるものがあつたと云ふてゐた。

其時側にゐた阿部俊一郎君がそれまで默つておとなしく聞いてゐたが、突然質問ありとばかりに森さんに議論を吹つかけようとしたから、マアマア待ちたまへと云ふて私は之を制して『森さんの云ふが如く全く其通りです』と合槌を打つた。

所が森さんの言ふには『いや商買をするものが、人の家に往つて宗敎談や信仰問題の話をするものではない、必ず異論が出て、議論に花が咲き、遂には商買もなんにもせず、スゴ〳〵と歸ることがある』と、なか〳〵味のあることを言ふてゐたが、それから又種々話を續け、四時に鷺梁津に行く筈の人が四時半になつてやうやく、み腰をあげ、立つてからまた十分ばかりおしやべりをして出て往つてしもうたが、何のゴ用でお出でになつたのやらゴ用談の方は一つもせずさつさと歸つてしまつた。

× × ×

森さんが歸つてから私も旭町の小林病院に知人の病氣を見舞に出かけたが、其途中或料亭のお女將さんが一しよに歩いてゐる側の紳士らしい人に、何かからかわれてでもゐたと見へ『旦那さん、そんな緣起の悪いお話は、よして頂戴』なんといふ聲がした。其聲のする方へ顏を振向けて見たが、其おかみさんが紳士の肩をたゝくまねなどしてゐた。

私は其時先刻の森さんの『佛敎が惰落してお話にならぬが、キリスト敎の方は生氣潑溂たるものがある』といふ話を思ひ合はして、佛敎はお寺の坊さんや、檀家の人だちばかり惰落してゐるのではなく、尊い佛の言葉まで惰落してしもうてゐると思ふた。

『旦那』と言い、『緣起』と言い、其ホントウの意味は實に尊い言葉であるが今は彼の女將さんの言ふ樣な意味の言葉になつてゐる實に嘆はしいことであるが、因襲といふものゝ力のおそろしいものであることをつく〳〵感じた。

× × ×

『旦那』と云ふは道德的の言葉であり『緣起』と云ふは哲學的の言葉である。

『旦那』の語はもと旦那波羅密と云ふて、布施を行ふことを以て佛の尊いお悟りの境界である理想の彼岸に到達することである。

布施といふにも色々あつて、お金をお寺にあげることも布施であり、乞食に物を與ふることも布施である。或は學問、藝術、宗敎を敎ゆることも布施であり、或は政治を行ひ、產業を勸め、社會事業を興して人類の幸福に資せんとするのも皆是布施の行事であると云ふてよい。

けれどもホントウの意味の布施といふのは、此身を捨て、此命を擲ち、そうして利他博愛の爲めに殉ずることでなければならない。この尊い〳〵犧牲の心こそは卽ちホントウの旦那と云ふ事であつて彼の高利を貸したり、小金を儲けたりして、成金顏してゐる人々を以て旦那と云ふのではない。

× × ×

『緣起』といふのは更らに六ケ敷い幽玄な意味を含む言葉であつて、哲學的な深い味いのある文字である。

緣起とは素と因果といふ語に對する言葉であるが、此の世の中にこれが原因であつて、これが其結果であると云ふ確定したものはあるものではない。斯く〳〵の原因があれば斯く〳〵の結果があると云ふのは、或る一つの假定を設けて原因とした場合に限つて、そう い來る。體裁佳なれども、木堅く音調惡し。これでは良い將棋はさせんと思ふ。悲觀の至り也。

# 京城雜筆

いふ結果が生ずると云ふ假想に過ぎない。故に私共は一の原因を假定するといふことは只概念の上にはこれが出來てもそれは要するに假定されたる概念であつて實際上の問題としては、そういふことは出來るものではない。

然るに人は多く『因果の道理は必ず間違はないものであるから』などと平氣で間違つたことを言ふてゐる爲め、佛は此世の中の眞實相である緣起の法を說いたのである。

私共は現に此宇宙間無數億の量り知ることの出來ない諸の關係の中に生きてゐるので或る一定した一つの原因によつて生きてゐるものではない。此無數億の量り知ることの出來ない諸關係は私共を刹那々々に未來へ未來へと生かして行くのである。

これが卽ち一切の事物の眞相であつて因果の假設に對して緣起の實相を說き敎へた所以である。

× × ×

彼の理論物理學者のアインスタインの相對性原理は、よく此緣起の道理を物理學的に證據立てたものだが、彼のミンコフスキーの『空間及び時間』に對する觀念も亦佛の說いた因緣生と云ふ意味と全く同一のようだ。

ミンコフスキーは『今後空間夫自ら及び時間夫自らは全く陰影の中に隱れ失はれて、獨りその兩者の或る結合のみが獨自性を保つと謂はねばなるまい』と云ふてゐるが、佛敎の大般若波羅蜜多經には『凡て諸のものは因と緣とによつて生じたものであつて原因といふ一つのものによつて生じたものではない。故に因の一方を見ても亦緣の他方を見ても共に其自性といふものがあるものでない。自性がないから得ることが出來ず、得る事が出來ぬからして思議することが出來ず、思議することが出來ぬからして畢竟空なものであると敎へてある。

そこで唯あるものはなんであるかといふに『因緣』或は『緣起』といふ凡てのものゝ發生原理のみであつて確定したものといふものはあるものでない。

故に佛敎では普通私共がいふやうな物質であるとか精神であるとかいふことをいはずに法の一字に收めて之を諸法といふのである。

物質或は精神といふのは假定的な言方であるが、諸法といふときは其眞相を言ひ表はした言葉である。

緣起のことを言ふていけばドコまでいつても限りがないからこのへんでやめるが、何とかしてこの『旦那』或は『緣起』といふやうな因襲化した言葉に、新しい命を與へて自分等自らの生命や思想を尊いものとし、且つ深遠なものとしたいものである。ア丶

## 馬上枕上

松田甲

去年までは荒野なりしを家建ちて
門松立てりここに彼處に
年々に松のみどりの色增してから
のやま〳〵春風の吹く
虎のすむ高麗のむら山春寒みまだ
らにのこる去年の白雪
いろ〳〵の古き瓦をならべたる床
にふさはし水仙のはな
水甕を頭にのせて高麗少女そゞろ
にあゆむわか草のみち
古塚の上に咲きたる木瓜の花名も
知らぬ鳥の來ては啄む
貝ひろふからの少女の裾寒く彌生
の空をしらゆきの降る
かたぶける軒にあるじの氏の名と
同じ季の花しろく咲く
高麗の世のみやこの址に鳴く鶴の
聲たど〳〵し朧夜の月
牛の背にのりて越ゆるも面白し春
の日あしの遲き山路は
雉子なく燒野のはてに小高きは國
を興せしますらをの墓
鷺ひとつ靑田の中にたゝずみて眺
の遠近かきつばた咲く
釣りえたる魚を柳につらぬきて歸
る夜みちに螢飛ぶなり

（朝鮮雜記の中より）

## ◈保險界小話

山口のぼる

◎京城の保險界も、日淸生命の橫田氏あたりが、活躍してゐた頃が、一ばん人材が多かつた。山路竹城なんて、俳句天狗の存在も愉快だつた。

◎が、今はこれといふ人も殆んどないのは、外から見てもまことに寂しいことだ。

◎新進で、堅實に、而かもさわりよくやつてゐる人に、東洋生命の小林氏がある。最も社交界に知られてゐる。

◎現在生命保險で、讀書家といはれてゐるのは明治生命の押原參吉君。この人は演說がうまくて、代議士などにすると、スグ名を知られる人だらう。

思ふのである。

◈筆のしづく

競技所感

動競技の目的は國民の體育を進むると同時に運動精神を涵養するに

# 競技所感

高久敏男

昨秋以來京城運動場で幾度か野球のリーグ競技が催された。僕は未だ野球ファンの仲間入をする資格はないが其決勝戰には大抵行つて見た。勝敗既に決して優勝選手の意氣や軒昂、喜色面に滿ちて優勝旗の授與式に臨む際は正に愉快の極、無上の榮譽、各野球チームが豫て憧憬の目標である優勝旗を今や我手に收めんとする、此派手やかなる場面には數千の觀衆も亦陶然として醉はざるゝ心地がする

眼を轉じて敗軍の選手を見れば悄然とし運動具を取纏める手許にも力なく伏目勝に觀衆を避けながらスゴ〳〵として退場する後姿は正視するに忍びざるものがある。折から背後に轟く歡呼の響は謂ふまでもなく優勝旗の授與が終りて勝利を祝する觀衆の聲である。これを耳にする敗軍選手の心中を察する者誰か一掬の涙ない者があるであらうか。

此喜悲兩極端の場面を目の當り見せられてから僕は心に一個の疑團を生じ今に至るも之を氷解することが出來ない。勝者を表彰する現在の仕方に對して僕は固より異存はない、去りながら敗者を遇するの道餘りに冷淡に過ぎはしないであらうか。勝てば官軍敗くれば賊兩立を許さゞる政爭にはこれも亦已むを得ざることであらう。然れど運動競技の場合に於て此思想を以て敗者を遇することが果して至當であらうか。言ふ迄もなく運動競技の目的は國民の體育を進むると同時に運動精神を涵養するにある。言ひ換ふれば正々堂々の手段を以て全力を傾注し最善を盡すの精神を訓練するにある。故に狡猾不正の手段を用ゐて得たる勝利には三文の價値だに認め難きに反し正當なる手段に依り自己の最善を盡した敗者に對しては嚴肅なる敬意を表せなければならない。恐れ多きことながら旅順を開城したステッセル將軍に帶劍を許された明治大帝の聖意もこゝに在つたものと恐察せらるゝのである。

況んや敗れたるもの其技必ずしも拙なりといへぬ、勝敗は時運に依る場合も尠くない、假に其技の多少劣れる者があるとするも勝者の技をして今日の上達を爲させたのは獨り勝者自身の力のみではない。敵味方兩々相競ひ相鬪んだ結果であるとすれば敗者も亦運動競技の進歩發達に功績のあつたことは勿論である。

何れの點より見ても、勝者を遇する極めて厚く優勝旗、優勝盃、副賞、祝詞、拍手喝采等溢るる歡待厚遇を浴せかくるに引換へ、敗者を見る全く路傍の人の如く一顧だも與へざる現在の仕方は條理に適ひ人情に合する仕方といひ得るであらふか。固より敗者と勝者とは全然其待遇を同一にする必要はない。勝者に優勝旗を授與するならば敗者には副勝旗（假名）を授與し、勝者に銀盃を贈るならば、敗者には銅盃を贈與する程の差別はあつても差支ないであらふ。要は數日に亘るリーグ戰に幾度も勝利の榮冠を荷ひ來りて哀れ最後の一戰に武運拙く戰敗の非運に泣く若き勇士達の面目を立てさせる道を講ずることが至當ではないかと思ふのである。

## ◈筆のしづく

山口のぼる

○

この間歐洲から歸つた方台榮さん、滯歐中一番困つたのは、北丁秣ヒューン島のオーデンセ港に遊んだ時だといふ。

○

驛員も、警察官も、少しも英語を知らず、街行く立派な紳士も、これまた單語さへ知らず、宿へついたのはいゝが、身振りでいかず手眞似でいかず。とう〳〵鉛筆で卵をかくと、オーライと持つて來たのは林檜。万事がこれなので、さすが度胸のいゝ同氏も、遙に昊天を仰いで、泣きたくなつたとは氏の直話。

○

殖銀の高久さんと來たら、物をほツたらかしにするといふことの出來ない人で、何んでも丹念に研究すること、實に學究的なところがある。

○

往年財務官として咸北にゐたが例の考古癖やみ難く、閑を見ては古墳、古城趾の類を、こつ〳〵歩き廻つて研究したものである。而かも一面にはそれらに關する記錄類を、多大の苦心と困難と戰つて蒐錄手寫し、現に堂然たる何百卷を有つてゐる。

○

若しそれ氏と膝をつき合せて清正オランカイ征討事實でも聞かうものなら博引傍證、悉さゞるなきの概がある。惜しいものだ氏は何故に今の中に、まとめて一卷の書としないのであらう。

【ヒ】

水甕を頭にのせて高麗少女そゞろにあゆむわか草のみち

る夜みちに螢飛ぶなり

（朝鮮雜記の中より）

代議士などにすると、スグ名を知られる人だらう。

# 京城雜筆

## 鰒禮讃

松永工

鰒は食ひたし命は惜しゝと言ふが、鰒はそんなに危險な恐ろしいものだろうか、そしてそんな思ひ迄して食べなければならぬ程、そんなに旨しいものだろうか。

鰒は料理さへ正式にするならば決してそんな危險なものではないと言つて差支へないのである、其毒素の原因にはいろ〳〵説明してあるが、結局新鮮なもので非常によく水洗ひをし、血液を洗ひ去つたものは先づ危險なものでないと言つてよい、相當な調理人の手を經たものなら間違ひはない、古いものや勝手に素人が手料理などでやるとあぶないのだ。

然らば鰒は旨しいものだろうか全く旨い魚であると言はなければなるまい、殊に其刺身が他に比類のないほどよい味のものである、其皮や肉の刺身を橙酢と唐辛子の大根卸しとねぎとを交ぜたもので味ふと殆ど天下一品の味だと言つても差支へあるまい、又其ひれ酒（即ちひれを焦がして熱い酒にひたしたもの）と來ては命がなくなると言はれても止められない程の美味なものだ。

鰒のちりは又格別旨いものだ、其唇の肉や白ら子を豆腐や葱とちりにすると、いくらでも酒が飲めるものだ、最后に之に餅や飯を入れて雑煮にすると之も又一しほの味がする、かくして鰒は徹底的鰒鰒味つて食慾を滿足させるのが定法である。

鰒の刺身は他に匹敵するものはないが、其ちりはあんこうと同等であると言つて差支へあるまい、鮟鱇鍋は鰒鍋とは其味に甲乙なして言つてもよからう、要するに鰒が危險な魚であると斷定するならば、命を賭けて迄も食べなければならないと言ふ程の美味なものとは言へない、命賭けであるなら安全なだけ、あんこうの味の方が少しく點數が多いといふ事になるのである、然しながら前言ふ通り鰒は絶對的安全な魚であつて危險性が無いから結局鰒の方が世界で一番旨しい魚であると言ふ事になるのだ。

實は之は序文なので自分の言ひたい本音は京城の食道問題の事なのだ、京城の内地人は各地方の寄合つた人達であるから、食道樂の趣味ある人は非常に少いのである

先づ料理のみを專門にする料理家は、高等料理家としては一軒もないと言つて差支あるまい、何れも飲んで騒ぐのを專門とする家ばかりだ、之は料理家が悪いのではない、料理をほんとうに味ふ樣な客が澤山ないからなのである。

料理のみを本當に味ふと言へば茶料理、鰻蒲燒、天ぷらそば、鮨おでん、肉のすき燒とを數へなければならない、茶料理は京城には一軒もない、鰻は一、二軒あるが本當の江戸前は一軒もない、たれが何れも悪い、鰻といふ奴は注文してから割いて燒くのであるが、京城では一度に割いて燒いてあるのを、客が來ると溫めて提供するのだ、旨い蒲燒のある筈がない、之も客に蒲燒通が多く居ない爲である、天扶羅は專門に揚げて食はせる家は一軒もない、座敷天扶羅も無論ない、蕎麥に至つては問題にならぬ程まづい、鮨も駄目であると言はなければならない、鮪といふ肝腎の種物の無いせいもあるが江戸前の鮨職人でない爲か握り方がよくない、げそ（烏賊の足）や赤貝の紐などの味を知つてる客は殆ど無いと言つてもよい位だ、牛肉のすき燒もほんとのだし汁で食はせる家が一軒もない、おでんも矢張よくない、江戸式のものが皆無で九州式のものばかりだ、ほんとの煮出汁を使つてこんにやくの切り方を本當に使つてるおでんやは一軒もない。

結局京城にはほんとうに料理ばかりを味ふと言ふ食道樂が非常に少いので、食べ物家が少しも發達しないのであらうと思ふ、つまり京城には鰒を除いては本當に旨しいと言ふ食べ物は一つもないと言ふ事になる、僕が鰒禮讃を記るす所以なのである。

## ◈一杯十錢也

吉田莊一

◎不二興業へ行くと、澤村さんが、丁度晝飯時だから、こゝの辨當を食へといふ。とう〳〵一所にライスカレを御馳走になる。

◎ぞん外うまいから、これをいくらで追つてゐますといふと、十錢だといふ。一杯十錢は安いですねといふと、澤村さん『こゝは百性會社ですよ』

◎飯泉さんが、農業文庫を作らうとして、目下盛んに宣傳してゐる。そして先づ乃公自ら知らずんばあるべからずと感心にこの頃本を讀む、するとそれと知るや知らずや、お嬢さん『とうさんこの頃感心ね、どうしたの、いゝわ晩にはウント御馳走しますワ』

組織して我國内に政論の萌芽を生じた時で、當時長崎港には鎖西日

もある。吹く海風を遮ぎる防風林の如き全くない。ドロー師云ふ此

# ドロー追懷の記

芥川正

十月號の京城雜筆で久松前平君の鄉土自慢を讀み、往年の長崎縣西彼杵郡黑崎村の曾遊を懷ひ起し感慨無量であつたことを吉田君にお話しゝ、其話が雜筆十一月號に記載されたが其記事中に誤つたことのある、夫れに久松君から書面が來て明治十五六年頃黑崎村から汽船に乘つて東京に行かれたと云ふ事實の詳細を承りたいと云つて來たので其處で余は吉田君に正誤を申上ぐる交換種子に當年の黑崎事情を摘記して雜筆社に郵送することにしたので、どうか松本兄や吉田兄等に雜筆紙上の割愛を願ひたい。

◇

明治十五六年頃まで熊本から東京に行くのには有明灣の百貫港から百噸位の小蒸汽船で長崎港に渡り同港で一週間一回宛つ上海横濱間を航海する謂ゆる上海メールを舟待して神戸に一泊して後紀州沖を廻り遠州灘を航して横濱港に到着したのである。

◇

或る時余は東京に上るべく長崎港に出でゝ舟待をしたが兩三日間上海から入港が遲るゝと云ふので甚だ心寂しく感じ、長崎附近に何處か觀察する所はないかと尋ねて見た。當時余は東京日々新聞の靑年記者であつて當年の東日は福地櫻痴文豪が丸山作樂氏と帝政黨を組織して我國内に政論の萌芽を生じた時で、當時長崎港には鎭西日報と云つて丸山作樂氏派の機關新聞があり其社長は佐々澄治、其主筆は久董呂藤太郎と云つて何れも平戸出身の人であつた。

◇

佐々澄治氏は元西彼杵郡の郡長を勤務して居つた人格者であつたが余が客窓無聊なるを見て西彼杵の黑崎村に遊ばぬかと勸む、如何なる處かと尋ぬると、佛蘭西人の豪傑宣教師ドローと云ふ先輩が居り布教の事は他の宣教師に一任し自分は村民を率ゐて殖産工業に從事し居つて實に感心の極みであると云ふので、余は遊心頓に動き黑崎村は長崎を距る幾里なるかと問ふと約七里だが山も越えねばならず海も渡らねばならぬと云つた。

◇

余は佐々氏から添書を黑崎村の戸長某氏に貰ひ、其翌日早朝から草鞋を穿つて時津街道を徒步し横道とか云ふ處から左折し山路を攀ぢ海濱を廻り夕刻には愈々黑崎村の戸長某氏の家に到着して某氏の歡迎を受けた。其夜ドロー師の來訪あり明朝山上の開拓地に案内すると云つて別れた。確かな記憶はないが當夜ドロー師の來訪は態々の來訪ではなく戸長の内か或は隣家かに病人のあるよりドロー氏之れに投藥する爲に來り偶々余が來崎し居るを聽いて來訪したのであつたやうであつた。舊敎の宣敎師は醫師を兼ね居る者がある、ドロー師も恐くは其類であつたらしい

◇

翌日朝食後ドロー師は余を黑崎村の裏手高き山上の開墾地に導いた。其開墾地は海面に向つた高臺で相應の傾斜地で小松其他の立木もある。吹く海風を遮ぎる防風林の如き全くない。ドロー師云ふ此開墾地は貴君は決して好地味とは思はれぬであらう、併し我佛蘭西には村落を距る餘り遠からぬ處に此地味位の荒蕪地は決してない。依つて自分は之れが開拓に從事して居ると云ふを初めに現在眼前に開墾しつゝある機具を自ら手にして談るやう。

一、此開墾地及び工業部を主幹させて居る女子（卅歲位と覺えた）は維新前に長崎港の敎會堂前に捨てられた子を拾つて育て上げた女子達である。

一、自分は自國革命の亂に遭遇して貧困に陷り窮した結果或は鍛治職、或は大工職人となつたゆえ此開墾地或は工業場に用ゆる機具は皆自分に發明して自分に製作したものである云々。

余は其言を聽き又其耕作を見て轉た感激に堪えぬものがあり頻りに賞讚すると、師は笑つて手を延ばし指先を圓くしていふ。

是れは卽ち金錢の形である、指先きを働らかせさえすれば忽ちに金錢の形でも出來るではないか、人間瞬時も働くことを怠るべからずだ。

と最も强く物語つた。

◇

開墾地からドロー師の居宅に伴ひ行き若き宣敎師に紹介された。此人はソロモンと云つて布敎專門のやうに思はれた。居宅に於てドロー師の話しは總て大西鄉談と云つても宜しかつた。書棚から持ち出し來る古新聞及び新聞切拔きには悉く西鄉隆盛翁の言行を記載してあるもの計りであつた。且つ云ふ日本國民たるものゝ覺悟は此大西



饌味つて食慾を滿足させるのが定法である。

せる家は一軒もない、座敷天扶羅も無論ない、麤麥に至つては問題

感心ね、どうしたの、いゝわ晩にはウント御馳走しますワ』

# 京城雜筆

鄉の言行の如くならざるべからず歐米各國に對する今日の日本國民の覺悟にして若し華奢惰弱に傾くあらば亡國の已むなきに陷るべく是れ自分が日本の爲めに憂慮する所である。新聞記者として而も青年の書兄が如き深く此間に注意を傾注せねばならぬと最も嚴かに誡めた。

◇

余が黑崎に泊つた第二夜は大雷雨であつたが其後ドロー師の主幹し居る倶樂部か工業所かに往つて見ると大雷雨後の大暗夜にも拘らず七八歳の小供から青年の男女に至るまで多數會合して作業をなして居る。ドロー師はいふ。

自分は黑崎村民に對して人間と云ふものは先づ自分の入用のものは必ず自分で製作せねば成らぬ、依つて七八歳となれば其穿く草鞋位は之を自分で作らねばならぬ。

と話し且つ七八歳の小供の作つた草鞋類を余に土產にも提供した。余は斯る別乾坤を視察して頗る愉快を感じ翌朝黑崎村を辭したが、ドロー師は一匹の乘馬を貸し與へて之を時津町まで見送らせたのであつた。

◇

余は東上後臺灣ドローの所說と其經營の模樣を時の參事院議官で余の師事し居つた井上毅先生（後文部大臣）に物語つたが井上先生も深くドロー氏の說を首肯された後日に至り井上內務大臣（馨）の條約改正案で世論沸騰したとき、井上先生は余に書信して條約改正に就てドロー宣教師の意見を徵し呉れぬかと云つて來た。依て余は直ちにドロー師に書信して其旨を通じた。ドロー師は目下の日本政府は天皇陛下の政府であるので自分が意見書を政府に差出すは陛下に對し奉つて畏れ多いから謝絕する。併し來訪さるゝならば意見丈けは申上ぐるとの答へであつた。故に余は其後一度ドロー師を訪問したいと思つて在崎如何を問ひ合せたら中風症に罹つて香港に轉地療養したといつて來たので往訪を見合せた。回顧すれば早や四十有餘年前の夢話しとは成り果てた。

# 妙味深き 詰將棋

七段 溝呂木光治

（一）

一二三四五六七八九

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | 角 | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

持駒 金・金・金

（二）

一二三四五六七八九

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

持駒 金・金・銀・歩

（註）本詰局は△六二龍と引けば金ばかりで詰まぬので最初の着手△七四桂打ちが良手である、次に△七三金と打ち捨てる筋は詰手によくある順である△七六香打ち以下は俗詰である。

（二）

△二三龍▲同玉△一三歩ナル▲同香△三二銀▲二四玉△二三金▲一五玉△一六歩▲二六玉△二七歩▲三六玉△三七金▲二五玉△二六金▲一四玉△一五金迄にて十七手詰

（註）本詰局は、普通△三三龍と引きたい處であるが、それでは上邊に逃げられて詰まぬのである。一番注目すべき處は（二五に桂がなければ容易に詰む事は了解されよう）△二三龍と捨てる手が妙手であり、續いて△一三歩となつて一筋に於ける歩を利用する事が肝腎である。△一六歩打ち以下は平易の詰手順である。

追白　今後簡單な詰物を出題しますから、どうぞ御考へ下さい

## ◇髯との別れ

山口のぼる

法專の佐藤校長、今はチョビ髯を申譯的にハヤしてゐるが、昔は立派な八字髯を、左右に大きくビーンと刎ねてゐたものである。所が同僚に同じ八字を樂む人があつて、よくその先生と間違へられてうしろから『オイ伊勢エビのやうだぞ』と、グイ〳〵引かれるのでこいつはたまらぬと、一念發起！それこそ涙乍らに告別したが、今思つても君惜しいヨとは、校長の懷舊談。

# 映畫漫談

寫眞と最近の映畫とを比較したら全く驚ろくほどの差違があります

『活動寫眞』といふ名は、福地源

その當時は百餘年も前から、江戸で都樂と云つて人氣を呼んだ唯一の映畫であつたゞけに、その名殘

# 京城雜筆

## 映畫漫談

小川二郎

○私が物心ついてからの印象と云へば先づ六歳になつてからの出來事です。五歳までの事は何一つ印象として殘つてゐるものはありません。その時分は見る物聞く物が皆珍らしく、小さな私の心の驚異であつたのです。さうした印象は、今日の私の心に、皆懷かしい思出として殘つてゐます。

○淺草の瓢置池を中心に建ち並んでゐる江川の玉乘りや、パノラマ、花屋敷や、その外多くの賑かで明い見世物等が、今でもいきいきと私の思出に浮んで來ます『アイヤ、お立會ひの衆……』と大道で大聲を張り上げて、あの蝦蟇の油を賣つた、松井の居合拔きも懷かしまれますが、又鳩の豆を賣る、老婆の赤い大傘も忘れられません。當時東京文化の象徴として誇つてゐた、煉瓦街の銀座を歩くのも嬉しかつたが、それよりも人形町の落ちついた、街並がすきでした。殊にあの夜店のカンテラの灯や、油鹽の香や鐵道馬車の赤い警燈や警鈴の音が、今でも時に思出されます。

○その時分私は殊にうつし繪が好きでした。下卑た彩色につれて映されて行く猫騒動や壯丹燈籠の怪談物を仕組んだうつし繪には好奇の目を見はつたものです。そして寄席等にうつし繪のかゝる時は無理に父親をせびつて連れて行つて貰つたものです。今ではもう殆んど顧みられないこのうつし繪もその當時は百餘年も前から、江戸で都樂と云つて人氣を呼んだ唯一の映畫であつたゞけに、その名殘りを止めてまだ幾分の勢力を持つてゐました。これと並んで幻燈も全盛を極めてゐたものです。然しこのうつし繪の興味も、活動寫眞が渡來してから、すつかり人氣を失つてしまつたのです。

○それは明治二十九年、私が六歳の暮近い頃だつたと思ひます。木挽町の歌舞技座に、動く幻燈がアメリカから來たといふので、大變な人氣でした。私は或る夜、父や親類の者達五六人と、新よし町に旅館をしてゐた、叔母の家から車を連ねて歌舞技座へ行きました映畫を初めて持つて來たのは確か駒田好洋ではなかつたかと思ひます。その時の映畫は實に今から考へると幼稚なものでした。汽車が通つたあとに、砂塵が舞ひ上り紙片が飛ぶと云つたようなものでしたが、私にとつてはそれが非常に面白くもあり、又非常な驚きでもあつたのです。

○その翌年私は父と一緒に北海道に行くようになりました。そして明治三十一年には、駒田の巡業映畫が初めて北海道に來ました。その時も私は前に歌舞技座で見たのと、同じ映畫を見たのでしたが矢張り映畫に對する興味は減殺されませんでした。そして毎年活動の來る度に見に行つたものです。

○それからもう三十年經ちました。私が最初歌舞技座で活動を見たのが、日本に初めてキネマの渡來した時だつたのだと思ふと、この三十年間によくも今日のような發達をしたものだと熟々感心します。チラ〳〵して、とても長く見てゐられなかつた、當時の單純な寫眞と最近の映畫とを比較したら全く驚ろくほどの差違があります『活動寫眞』といふ名は、福地源一郎氏がつけた名ださうですが、最初から活動寫眞と云つたかどうか、はつきり覺えてゐません。

○日本で映畫を作製したのは、先代菊五郎と團十郎の共演で、紅葉狩を撮つたのが最初ださうですが、それも見た事がないようです。その當時淺草の見世物では、江川の玉乘りとパノラマと花屋敷が、人氣の焦點で、その他かの輕業とか、地獄極樂とかいふものが可なり多く客を呼んでゐましたが、今日ではもう活動寫眞が、見世物の全部を占め、玉乘りも無くなればパノラマもありません。そして日本全國の隅々まで常設館が建てられるようになり、現在では千五十九館の常設館があるのですもの、全く驚くぢやありませんか。

○今常設館の統計を見ますと、東京府に百八十二館（うち市内に八十四館）、大阪に八十二館あります。そして全國を大別すると、關東に三百十五館、近畿百八十八館、中部地方百五十六館、九州百八館、奥羽百三館、中國六十六館北海道四十七館、四國二十四館、朝鮮二十六館、滿州七館、臺灣五館、樺太四館、沖繩二館といふ配置で、これを平均すると一府縣二十館强になるのです。

○この統計から見ますと、溫度の高い地方には常設館が尠なく、溫度の低い地方、例へば北海道とか朝鮮とかに割合に多いのです。樺太の四館に對して臺灣の五館や沖繩の二館等も好い對照です。こんな統計から溫度とフアンの關係に就て研究したら何か面白い事實を發見出來やしないかと思ひます

# 京城雜筆

## 動物學上より 見たる兎

吉田雄次郎

### 一、兎の毛色

兎は其種類が多く四十五種もあるが、朝鮮に棲息して居るのは朝鮮野兎と家兎だけである、内地には此の外越後兎といふのが居る、普通野兎は四季同じく褐色を呈して變らないが、越後兎のみ春夏秋は褐色であつて、冬季になると白色に變ずるのである、之が所謂保護色で白雪皚々たる嚴冬の頃に褐色であると容易に敵に發見せらるゝからである、兎の毛は俗に『兎の毛程』といふて小さい事の譬喩に用ゐらるゝ位極めて細い、冬季には密に生えて防寒の具となるが夏になれば餘程疎らになつて人が帽子でも着た樣になるのである。

### 二、兎の危險旗

野兎は軀一面褐色の毛で蔽はれて居るが尻尾の地面に接して居る部分が白色である事は何人も一寸氣付かないであろうと思ふ、處が駈け出す時は此尻尾を勢よく上げて走るものだから、容易に此の白色の部分を見る事が出來る、朝鮮に澤山棲息して居る獐の如きも最も現著なもので逃ぐるときは眞白く見ゆる事はよく人の知る所である、英國人は之をシグナルブラック（危險旗）といふて居るそふであるが成程其の通りで積り積つた木葉の下影に潜んだ野兎は如何に熟練な獵師でも之を見分くるには困難であるが偖て愈風を切つて逃げ出すや否や、尻尾にある旗の如き白色部は枯葉に對照して著しく目に着き易いので獵師のよい目標となるのである。

### 三、兎の耳

兎の軀の長さは平均二尺位であるが、耳は慥かに四寸位はある、殆ど身長の五分の一であるから隨分長いものといはねばならぬ、兎は此の長い耳を絶えず彼方此方に動かして、何か危險を加へるものはないか敵の來襲はないかと警戒して居る、其の筒狀をして居るのは音の來る方向を知るためで其の筒先きが音のする方に向いた時は一層明瞭に聞ゆるから兎は直に其の反對の方向に逃ぐるのである、一般の獸が耳を動かすのも皆之と同樣の理由であるが人類には全く此の作用がない、併し解剖學的に調ぶれば明かに此の耳を動かす筋肉がある、稀には實際少し位動かし得る人もある、之はいふまでもなく人類の祖先も獸と同樣に耳を動かしたものであつたが、今日の樣な軀に進化しても其の筋肉の根跡だけが殘つて居るに過ぎないのである、話は横道に這入つたが兎の聽覺は驚く程鋭敏なもので、俗に世間の出來事を素早く聞き出す人を兎耳といふのは此から出た事と思はれる。

### 四、兎の眼

兎の畫を見ると大抵は眼を赤く畫いてあるが、之は家兎の白色の種類に限る樣である、野兎の眼は黑褐色である、眼球の前面が凸起して居るのと瞳孔の圓く大なるのとで光線を取斂する作用が強いから眞晝よりは却て月夜の方が都合がよい樣に考へられる、實際彼等の習性を見ても之を證明し得らるるので『何を見て跳る十五夜お月樣見て跳る』の童謡が能く之を表はして居る、兎盜症といふ眼病がある。之は種々な原因で眼瞼の全く閉ぢられない人に起るので眼球が飛び出て兎の眼の樣に見ゆるから名づけられたのである。

### 五、兎の唇

世に三ツ口のことを兎唇といふ如く兎の唇は二つに裂けた樣になつて居る、兎に限らず犬、猫、鼠等も多少此傾きがある、人間の兎唇は何故に出來るかといふに元來胎内に於て顏面に形成せらるゝ際鼻、顎、唇等は皆左右から成長せられ正中線に於て癒合するのであるが、此際其の間に羊膜などの一部が介在して居つたりして其の癒合を妨げるからである。

## ◈佛樣の商賣

吉田藏一

◎中村健太郎氏といふと、見るからニコヤカな（大浦貫道氏の言葉を假つていふと）ほんとに佛樣のやうな人である。

◎先年友人達が寄つて、老境の準備のため、借家をお建てなさい家賃ならあなたでも取れませう、それが一番いゝことだと、とうとうおとなしい中村さんを納得させて家を建てた。

◎その後一兩年、また友達が寄つて『中村さん家賃はどうです』といふと、ゴ本人頭をかいて『一向儲かりませんな』。そこで調べて見ると、拂ふものは拂つてあるが、横着な者と來ては、半年も一年も住みッ放しにして、鍾』文も入れてない。そこで、友人相顧みて『ナールホドあんたは佛樣だ』こりやどもならん。

## 人の稱呼

サン』といふ、此方が猶優さしみが深い。

又も其後ら、小生は種々の稱呼

# 人の稱呼の感じ

今村鞆

人は、オギャアーと產ぶ聲を揚げて、『赤ちやん』とよばれ初めてから、死んで、『エー佛樣』になりました、と言はるゝまで、一生の間に、本とふの姓名を呼ばるゝ事は滅多に無い、先づ徵兵檢査の時か、裁判所へ呼出された時か或は試驗を受ける時位で、其外は大抵、代名詞や種々の稱呼で、呼ばるゝのが普通である。

何と呼ばれたつて、元來が符牒の事であれば、差支が無い譯であるが、そこが人間凡俗の悲しさには、呼ばれ方によつて、心持のよい事も、又腹の立つ事もある。

『赤ん坊』『赤ちやん』此れ等は、餘りにむき出しで、餘情が無い、小生の國では『ヤヤ』と言ふ東北では『ネンネエ』と呼ぶ、此の方がドレ丈け、古雅で美くしいか判らぬ。

『坊つちやん』『坊』『ボンチ』杯も、人を馬鹿にしたよふで、感服出來ぬ、と云ふて『若樣』では大仰だ、小生の國では、中流以上の人の子に對しては、十六七歲までは『トント』と呼ぶ、其語源の判らぬ所がよい、盛ン節と言ふて士族の唄ふ俚謠の中に『トントは景ーイ氣、いやぞ島田の中括り』といふのがある、美少年禮讚である、自分は小さい時は、大抵此のトント、と呼ばれた。『孃さん』『孃つちやん』は、語音の響きがよくてよい、小生の國では『イトサン』といふ、此方が猶優さしみが深い。

扨も其後ち、小生は種々の稱呼で、人に呼ばれた、數多くのニックネームも付けられたが、未だナンバで呼ばれた事丈は無い、尤も巡査と喧嘩をして、留置場に叩き込まれた經驗は、二度程あるが。

妻を持つた當時、赤い手がらの花嫁御から、『モシ』とか『アナタ』とか、至つて小聲で呼ひかけらるゝ、此感じは、薄甘き惡くない感じだが、其『アナタ』に『ヤ』が付き出すといけない、子供が出來ると、忽ち一變して大聲で『オトーサン』と呼ぶ、此れにはウンザリする、此のオトーサンが、中々に長い年月續けらるゝ、小供が『おつかちんは親でも無いのにオトーサンといふのはおかしいね』と不審かるも無理は無い。

孫が出來ると、妻は、一層大聲に、『オトーサン』と呼び出す、『あなたも、モーお祖父になりましたウカ〳〵してはいけません』といふ、警告的意味を含ませて、故らにいふかの如く感ずる、此のオヂーサンといふ言葉は、老人の意味と混同して甚だ不都合だ、英語では、クラント、フワザーとオールド、マン、支那では祖父と老翁、朝鮮ではハラボヂーとノーイン、何處の國でも別々だのに。

ある時、孫を伴れて、本ブラをやつて居る途中で、藝者に出逢ひ『あなたの坊つちやんですか……お可愛い坊ちやんですネー』といふから、フンフンとやつて居る中孫がオヂーサンと呼んだから、忽ち化があらわれた。

若い藝者から『イーサン』なんていはれるのは、此の頃餘りにそもなはぬ、自分に對して『オトーサンと呼ぶ藝者が五六人ある、この方が親しみがあつて嬉しい。

『先生』と小生を呼ぶのは、永樂町人を筆頭とし、若い記者に二三人、本町通りの古本店の主人、其他にも未だ大分あるが、オダテられて居るよふで、餘り香はしく無い、川柳に『先生といはるゝ程の馬鹿で無し』『先生といふて灰吹替へさする』と云ふのがある、東京の下町では、按摩にまで呼ぶヘボ大工でも棟梁と呼ぶ、一體敬稱は濫に流れ易いものだ、今日では、一と間しか無い裏店の嬶左工門にまで、奧さんと云ふ、先生と呼ばれて、心から嬉しいのが一つある、夫れは溫泉にて、同宿の浪花節語りの座長から賴まれて、語り物の不合理な點、言葉の間違つた點など、修正して作り替へてやつた、夫れ以來本人は無論、一座皆實際に先生を以て待遇して異れ遂に請により自分の姓までやつた本人は今北滿州で、今村姓を名乘り、土木請負業をやり、吉洮線の一部を請負ひ、成効して居るといふ。

『宗匠』『螺炎宗匠』と呼ぶ人もあるが、此宗匠といふ言葉は、室內でも頭巾をかぶり、茶色の十德でも着て居る、古風な聯想が伴つて、隱逸と陳雅の匂ひがあり、實世界の活動者を以て任じて居る者と、相容れぬよふである。

警察官時代に『署長殿』『警察部長殿』と呼ばれた、此の『殿』は中々に親しみがある、自分の一生の中に、其れ丈け嬉しい感じのよい呼ばれ方は無いと考へて居る今でも懷かしい、陸海軍ではナゼ閣下を止めて、上から下まで殿にせぬであらふか、何々師團長殿、何々大將殿といふ方が、上下一致

# 京城雜筆

の親しみを增す上に、どれ丈け効果があるか判らぬ、鹿兒島の人はだれでも西鄕どんといふ、そのどんの中に、言ふに言はれぬ無量の人情がこもつて居る。

勅任の辭令を貰ふた時、自動車の運轉手から、生まれて、初めて『閣下』の尊稱で呼ばれ、何だかクスグッタイ感じがした、夫れより前、未だ閣下で無い時に、軍司令官から、招待を受けた宴席で、自分の席が參謀長の上にとつてあつた、新任參謀長は、必然閣下也と思ひ込んで、自分に對し閣下閣下とやる、私は未だ閣下ではありません、といへば、先方に恥を與へる事になるし、困つた、其時は一層くすぐつたかつた。

一體『閣下』といふ語は、文章軌範を習ふ時に、初めてお目かかつた文字であるが、其時分から餘り好かぬ文字だ、尤も世の中には閣下といはぬと、御機嫌のよくない人もあるといふ、そんな人には別に手間の入らぬ事であるから、閣下をあびせかけてやる方がよい只で人を喜ばす程、結構な事は無いから。

序でに書くが、朝鮮の地方官の中に、『殿下』と綽稱の付いた人があつた、夫れは閣下扱では不平で、恰も殿下を御待遇するが如くにせねば、お氣に入らぬといふ意味であつた。

『大將』『內の大將』と呼ばれる事もある、之れは多くは、熊さん八さんの連中である、此の稱呼は、素朴で親しみがある、自分は大將とよばるゝと嬉しい、しかし『大將』の上へ、『ヲイ』と云ふ字が付くといけねへ、川柳に『大將とオイ大將は似て非なり』といふのがあるから。

『兄弟』『兄弟分』『兄貴』此等の言葉は、最も親みが強い、且つヒューマニズムの響あつてよい併し同じ言葉でも、クリスト敎の說敎で『我等兄弟よ』といふのと土方や國粹會の同人連がいふ兄弟の方とは、大分感じがかけ離れて居る、自分は貧民窟に入り込んだ時と、土方と喧嘩をして中直りをした後とに、此の兄弟分を大分作つた、之れも懷しい思ひ出である

朝鮮人に對しては『ヨボ』『ヨボサン』又は『君み』と呼んではいけない、理屈は兎も角、先方が嫌ふのであるから、强て惡感を買ふ必要はない。

人を呼びかける此等の言葉は、中々六つかしい、夫れを受取る先方の感じといふのを、深く考へねばならぬ、所世上注意すべき事である、早い談が、自分自身が『アナタ』と呼るばるとしても、場所により人により、所により、性の別により、聲の大小、アクセントにより、千種萬別に響く、アナタの微なる一言にも、千鈞の重みが繫つて居る事もあるから。

## 繪はがき

○　堂本貞一

雜筆十二月號拜見、『月給日の解』には恐縮。新田さんの偉人加藤友三郎は亡き宰相提督を偲ぶと共に其の筆致に新田さん其の人に會ふ心地がしました。『文は人なり』の語吾れをあざむかずと感じました。着任匆々豫算をひねくり初出張として忠州、丹陽、提川を廻り昨夜歸淸、明朝出發又報恩、沃川、永同を廻ります。それから道評議會を濟ませましたら多少手がすきませうから何か書いて送ります、寒くなりますから御大事に

（十二月六日夜）

○　谷多喜磨

拜啓　松浦と杉浦の間違で御鄭重な御手紙を戴きまして却つて恐縮に存じます、松が全部杉になつたところを見ると原稿の松の字の書き方が惡かつた事と思つて居ます。別に何と申す考もありませんどうぞ然る可く……。

○　釋尾東邦

小生東京より昨日當地に入り本日塔堂伽藍の間に懷古に耽けり居り候、嵐山の秋も老ひて京都の風もうす寒し、明朝歸鮮の途に就くべし、遙に京都より敬意を表し申し候（十一月廿一日）

## ◈青樓發奮記

山口のぼる

◎稻葉君山君といふと、私學出身ではあるが、考古學の方では、我國有數の學者であるし、それに支那を研究し、現代支那事情に通曉してゐることでも、一方の權威である。

◎ところが、君山君がここまで發奮勉勵したについては、面白い挿話がある。といふのは先生十七八の時、鄕里の師範校にゐたが、惡友につれられて、たつた一度靑樓に登つた。處が運惡くその場を一番ガミ〳〵屋の敎授に見つけられけれ、即日放校。おとうさんからは同時に勘當。全く泣ッ面に蜂だ大抵な人間なら捨鉢となるところを、流石は先生だ、その足で笈を東都に負ひ、遂に今日の盛名を成した。あれはえらい男だと或人がほめてゐた。

## 讀んだ

い間を出す、その難聞の一つにこんなのがある。

ある村に一人の若者がゐた。その運いのを怪しんだ花嫁は、やがて此の場へ探ねて來た。彼女は天を仰ぎ悲しんで云ふ『あゝ世の中

沃川、永同を廻ります。それから道評議會を濟ませましたら多少手がすきませうから何か書いて送り風もうす寒し、明朝歸鮮の途に就くべし、遙に京都より敬意を表し申し候（十一月廿一日）

東都に負ひ、遂に今日の盛名を成した。あれはえらい男だと或人がほめてゐた。

# 京城雜筆

## 讀んだものから

松本光

×

何でも好い、書架から本を取り出して、机の上に持つて來る。パッと好い加減な所を開く。そしてそこから讀み出す。これが此頃の私の讀み方だ。前には、こんな讀み方では滿足しなかつた。何でも彼でも第一頁から讀んで行つたものだ。そして、兎に角その一冊を讀了せずには、次の本にかゝれなかつたものだ。今の私にその根氣が失せたのかと思ふと情ない。がその代り『讀まねばならぬ』といふ苦痛が無い。らくに讀書が出來る。

大谷繞石氏の著書に『開いた處』といふのがある。英國の文學書を手當り、次第に開いて、その『開いた處』を譯出したものだ、といふ意味の序文がついてゐたと記憶する。今手許にないが、よい讀物だつた。英文學の系統とか、又各作家の代表作とか、そんな風な意味にこだはらない、らくに讀める本だつた。

大谷氏の眞似といふと、おこがましいが、私も私の『開いた處』で興味の殘つたものを次々に御紹介して見ようと思ふ。

×

第一番に、その大谷氏の『開いた處』から一つ拔く。ラフカディオ、ハーンの作で、題も忘れたし筋もはつきりしないが、何でもある王樣に惡魔がいくつもの難かしい問を出す、その難問の一つにこんなのがある。

ある村に一人の若者がゐた。それが同じ村の娘に戀をする。友人の仲介で切ない思を運ぶが中々遂げられない。惱み疲れた若者は全能の神に訴へる『神よ、彼女を得せしめ給へ。若しあなたのお力で彼女を娶る事が出來たならば私は私の生命を神樣あなたに捧げませう』ほんとに生命がけの戀であるそして若者の眞心は神も嘉し給ふた。さしも遂げ難い思もとう〳〵達する事が出來た。花のやうな乙女は彼の妻になつたのである。が樂しい新枕の一夜が明けた時、信仰深い律氣な若者は、ふと、神への誓ひを思ひ出した。『私は生命を捧げると誓つた。のぞみのかなつた今日、晏然と生きてゐては申譯がない』神を欺く事の出來なかつた彼は、友人と新妻に向つていふ。『我々は神樣に、お禮詣りを忘れてはならない。さあ出掛けやう』そして壯麗な神の殿堂の前に來た時、『俺一人で先づ心からの御禮を申上げて來る』若者は友と妻とを門前に待たせて、御堂の中深く入つたまゝ、二た時程も歸つて來ない。『貴女はお待ちなさい私が行つて見て來ませう』友の男が出かけて見た。すると、けなげな若者は、神の御像の御前に、我と我が首を劍で刎ねて、誓どほり命を捧げてゐたのだ。友なる男は歎息して呟く、『あゝ、世の中は住み憎い。私が此儘彼の妻を連れ歸つたならば、人々は何といふだらう、屹度私が友の妻を奪ひ度い爲めに友を殺したと云ふだらう。私は生きてはゐられない』そして思ひ切りのよい其男は、自分も亦劍をとつて我が首を刎ねた。二人の遲いのを怪しんだ花嫁は、やがて此の場へ探ねて來た。彼女は天を仰ぎ悲しんで云ふ『あゝ世の中は住み憎い。妾がこの儘歸つたら何と云はれるだらう。屹度妾が一人で氣隨氣儘をしたい爲めに、二人の男を殺したといはれるだらう妾も生きてはゐられない』そして可憐な女も亦劍を取り上げた。がその時、慈悲深い神の救ひの御手が下つた。神の御像はやさしく靜かに口を開き給ふた。『待て、女よお前のよい心に愛で、二人を再び此世に返してつかはさう。女よ汝の夫の首をその胴の上に、友の首を友の胴の上に、そうすれば二人とも甦る筈だ』女は命令通りにした。二人は甦つた。……が、何といふ事だつたらう。嬉しさに血迷つた彼女は、夫の首を友の胴の上に、友の首を夫の胴の上に、間違つて載せた儘で生かして了つたのだ。――そこで惡魔がいふ『王樣よ。どつちの男が女の夫なのだ？』王は直ちに答へた、『首こそは身體の司である。夫の首を持つた男が彼女の夫である』と――これでこの話は終つてゐる。だがさア皆さん、どんなもんでせうかね

## ◇忘年珍聞集

平田久雄

この間京畿道警部祭の連中が、江戸川でやつた忘年會は頗るの盛會で漣谷警部（支那中將の榮稱あり）の何とか踊り、小泉警部の木曾踊りなど、逸品中の逸品。平生いかめしい連中が、すつかり大醉し、玄關でヘタバルやら往來でノビルやら、大分逸話の種を殘して『アノ晩の君のザマは……』『いふな、貴公の腰拔け振は』

# 京城雜筆

## 府協議戰の跡を顧みて

大垣丈夫

十一月二十日京城府協議會員の改選が行はれた、是より先き各候補者が名乘りを揚げて、驚く勿れ三十名の定員に對し三十九名の立候補と云ふから、如何にしても九名の落選者を見るは明かである、それゆへ各候補者は一定の地盤を擁し、公認候補者と稱して自己の地盤を結束する外に、緣故をたどりて他町へ進入する、茲に於て競爭激甚と爲り、戸別訪問、宴會招待、交換問題等、あらゆる手段方法を講じて、九名の落選組に入らざることを期す、是れ固より人情の自然なれば敢て咎むべき所なしと雖も、資産の豐かなるに任かせ金錢を厭はずして、最高點を占むるとか他人を驚かさんなどと、道樂仕事のやうに運動したる候補者は、是れ確かに神聖なるべき選擧界を攪亂したるもので、人心の弱點につけこんで益々人心を腐敗せしむるものと識者は顰蹙せしならんも、現に候補者一人たる我輩に取つては、如何に成行くことやら到底九人組に這入るの外なしと一時は覺悟を定めたものゝ、京城の有權者は金錢や酒食で思想を左右せらるゝ迄に、其處まで墮落はせざるべしと一縷の望を屬したり。

元來我輩は從來の地盤より他人が立候補したれば義理上、全市の散擧を集めて當選を期するの外なきと、貧乏人で派手な運動が出來ぬ爲に、理想選擧を標榜し戸別訪問を爲さず、事務所を設けず、候補者兼書記といふ格で、十月二十六日に宣言書を全市の知人四百五十名に郵送した、其後其四百五十名中の方で、或は他候補者の參謀であつたり、又は運動者であることが發見する毎に、其姓名を抹消し、第二回の郵送即ち各新聞社幹部の勸告狀は減じて三百八十名に頒布するに至つた、心細く感じたる菊田良卓氏や愚妻は頻に總督府各課を廻はれと勸む、然れども民間に信用なきを證するに似て面白からずと拒む、然らば銀行會社を廻れと云ふ、是れとて今更悲鳴を擧ぐるに似て理想選擧に反すと退く。是に於て淺松太郎氏の發議で大垣翁後援團とし候補者の面目を傷けざる程度の依頼狀を發送すべしと、一千枚の葉書を十九日夜齋の手筈にて郵送したり、以上三度の書面運動を以て理想選擧に終始したれば、當選は甚だ氣遣はれたるが、翌日開票の結果二百十一點の得票にて十二番目に位し、而かも大地盤を有する公認候補者にして、幾名も其下位に在るを散見するに至つて、始めて知る有權者諸君の意思堅實にして却つて金錢や酒食の饗應を陋とし、戸別訪問なき理想選擧に贊意を表し、斯く豫想外の投票を見るに至りたるは京城選擧界の一進歩と認むると同時に、我輩一層公共的方面に盡力し府民諸君の期待に副はんことを深く心に誓ふものである。

## 財界豫言

岡村介石

大正十五年から廿年までの六年間が好況時期で、本年下半季から世上一般に活氣を呈し來る。過去大正九年から自然運行の原則、平均作用のために、この數年間我が地球表面の一切の物から、活氣をマイナスした結果、人氣沈靜して世上不況に陷り物によつては生産過剩の現象となつて相場低落を來した。そのマイナス作用は昨年十一月を以て終極を告げ、十二月からプラス周期の活動に這入つたのである。之は宇宙間の原則、平均作用の循環で、人間社會の施政など云ふ廣大な樣で姑息な仕事に依つてこの作用が逆轉する氣遣はない、誰も知る平凡な理で自然は人間を包容して人間を左右するものである。プラス周期に於てはその周期適當な働きを爲さしめ、マイナス周期にはそれ相當の爲政者を起たする、憲政內閣がそれで、過去のマイナス周期に於て緊縮方針を執つたことは最も適當した政策であつた、併し今後のプラス周期に對しては何人が爲政の衝に當つても過去と趣を變へて、漸次伸暢方針を執ることが自然の政策であると思ふ。

## ◈人のうわさ

山口のぼる

伊藤憲郎判事のお宅をお訪ねすると、流石に讀書家だけに、書籍が山を成してゐる。も一ッ感心したのは、洋畫といふ道樂があつてあの忙しい體で、一時間でも閑があると、スグ寫生に出かけられるのである。

思はず知らず僕も財布を出してテーブルの上に有りつたけをさらけ

は月醒めんとする貧金奴隷が一日の勞働に疲れ果てゝ、安らかなる

# 赤裸々

戸津學

行詰りと言う事がある、理屈を捏ね合つたり議論を闘はしたりする間はまだ〳〵其の道中で、最早や一言半句容喙の餘地なく、ギリギリの極致に達した刹那が即ちそれだ。所が此の絶無と思はるゝ境地に有を生じ飄單から駒が飛び出すから世の中は面白い。窮極に到つて初めて眞實あり、眞實現れて初めて相融合し得るのだから是非もない、所詮窮すれば通ずる道理なのだ。我々世俗の道中には、刹那々々の心鏡の反映さ加減で斯うした環境に入り斯うした氣分を味ふことが往々ある。

四五年前僕が群山に居た時である、名前等は記憶にないが或雜誌記者がやつて來た。何でも内地から來たと言うてゐた、奴さん御出でなすつたなと思つたが、生憎其時は政務總監御來群の日で、接見式に出掛けねばならぬ時刻間際でもあり、得體も知れぬ記者風情の無心などに應ずる氣分には成れなかつたので、素氣なく突放して出て行つて了つたものだ、二時間計りもして歸つて來ると、先生又ぞろ押掛けて來た、困るからどうかして呉れと言ふ、僕はやらぬと言ふ、彼是押問答してゐると、先生何と思つたかポケットから財布を出して開て見せた者だ。中味はバス一枚きり嚢中無一物ときた、此の通りです、どうぞお頼み申すと言ふ。之には遺かの僕も動かされた、最早や彼是言ふ餘地は無い、思はず知らず僕も財布を出してテーブルの上に有りつたけをさらけ出した、之は懐中の總てだ、君持つて行け！有難う御座います、有難う御座います、記者は如何にも嬉しさうな素振で兩三度叩頭して立去つた。金は幾何あつたか分らない、恐らく僅かのものだつたに違ひない、少し打算的に考へたらソンナ馬鹿氣た眞似はしなくとも善いのは知れ切つたことだ、然し其の刹那そんなこと考へる餘裕など全くなかつたのだ。唯々無關心に有りつたけをやつてしまうと言ふ一念より外何物もなかつたのだ

其の以前にも以後にも斯うした無心には可成澤山出會つた、然し此時程奇麗さつぱりやられたことはない、だが馬鹿なことをしたものだとも思はない。

# 偶感

車田篤

日本に於ける或る感傷的な詩人は現代を諷して

狂つた世界だ
輕薄な世界だ　傲慢な世界だ
小人の世界だ　俗物の世界だ
詐僞師の世界だ　泥棒の世界だ
何事もない世界だ
無感覺無神經の世界だ
慾に向つてのみ勇敢な世界だ

とうたつた。私は此の何れの句に就いても、肯定もしなければ否定もしない、唯私は此の貧しからざる詩人の思ひ付に過ぎないこんな出鱈目の不平よりも一層深刻なる不平を此の世に向つて抱いてゐるものは尠くないと信ずる。其所には目醒めんとする貧金奴隷が一日の勞働に疲れ果てゝ、安らかなる眠りに就くこともならず、時に得られる濁酒の不平を藏して此の世の中の變化を妄想して居るのである。人類として生存權を欲するも其處には不勞所得を生ずべき財産を有せず、さりとて彼が持てる唯一のものである所の筋肉を働かす爲めの勞働さへも門戸を閉鎖されて、生存の不安に惱まされて輕薄傲慢、慾に向つてのみ勇敢な所謂上流階級に對して瞋恚の眼を以て睨んでゐないと誰か保障が出來やう。何とか世の中を明るくする名案はないものであらうか。

## ◇電虎忘年會

石川利夫

◎全鮮電氣事業關係者で、電寅忘年會を開いたらといふ說がある

◎といふのは、電氣關係者は不思議に寅歲生れの者が多く、而かも大正十五年といふ寅歲は、電氣事業にとつては、値下げ問題や何彼で可なり不愉快な歲であつた。一ッ厄拂ひしやうといふのである

◎そこで先づ寅歲生れの虎調べをして見ると、平壤電氣の横田君が虎之助、同地電興の柴田君が虎太郎、群山電氣の樋口君が虎三、水原電氣の近藤君が虎之助、江景電氣の西島君が虎吉、そしてこつちでは、京電に寺村虎重君が控へてゐる。

◎而かも寅歲生れで、虎と名を冠しない人に、古河の水谷さん、遞信局の中川銀三郎君（電氣課）川北の前田昌德君、元山の納富喜五郎君がある。數へ來ると、何と虎と緣の深いことだ。

# 寒夜追憶

鷹松龍種

## 酒の粕

新内の流し、鍋燒うどんの呼聲夜廻の木の音、是等はいづれも多の夜更に缺ぐことの出來ない情趣である。僕の鄕里（岐阜）では多になると、『アンヨー』『アンヨー』といふ聲が、泣くが如く訴ふるが如く、時には按摩の笛の音と和して夜の靜寂を破りつゝ、街から街へ流れて行く。他國の人には解し兼ねるが、酒の粕を賣り歩く呼聲である。子供の頃よく買つて食べたものだ。

昔、此の町に親孝行の兄弟があつた。病床の父を養ふべく兄は毎夜酒の粕を賣りに出た。幼ない弟は兄の後を慕つて『兄ヨー』『兄ヨー』と呼びながら附いて行くを常とした。町の人々は此の『兄ヨー』の聲を聞くと、又例の親孝行の兄弟が來たと憐れがり、いらない酒の粕でも買つて遣つた。遂には外の者まで之れを眞似て、『アンヨー』といつて酒の粕を賣り歩くに至つたといふことだ。

與太郎が赤い顏をして歩いて居る。甲『よい機嫌の樣だがどうした』與太『今、家で酒の粕を二つ燒いて食べて來た』。甲『氣の利かない野郎だな。今度誰れかゞ聞いたら、酒を二本飲んだと云へ』暫らく行くと、乙『おい與太郎、大變よい機嫌だがどうした』與太『ウン家で酒を二本飲んで來た』乙『氣の利いたことを云つてるなそうして冷で飲んだか、燗で飲んだか』與太『イヤ燒いて飲んだ』

全く此の落語の通、酒の粕なんて氣の利いたもので無い、併し僕は今でも時に之を燒いて子供と共に、鄕里の夜を偲ぶことがある。

## 家宅侵入

或る年の正月、僕が南山町に住んで居た頃の出來事である。妻は某家の歌留多會に招かれて未だ歸つて來ない。女中は部屋で頻りに船を漕いで居る。僕も仕方がないから寢に就いた。暫くして妻が歸つたと見えて、小聲で僕を呼起すのである。聞けば見知らぬ男が座敷に寢て居ると云ふ。そゝな筈は無いがと半信半疑で、濕袍を羽織つて行ててみれば、果して大の男が高鼾で眠むつて居る。尻端折りに草鞋穿、脚絆を付け、まるで田舍の博徒が喧嘩に出掛ける樣な裝束である。妻は交番の巡査を呼んでから起こしてはどうかといふ。併し泥棒にしては餘り度胸が据つて居るまさかそんな者であるまい居直り强盜にでもなれば其の時のことゝして、兎に角呼起すことに決した。女中はガタ〳〵震えて居る。僕と妻は、松王の返答如何にと詰寄る源藏夫婦の樣な緊張味で先づ僕が靜かに肩を搖振つた、なか〳〵起きない。漸くにして目が覺めて其の場に起上がりはしたが譯の分からぬことを怒鳴り出した泥棒で無いことが明かになつたので、遽かに勇氣百倍して大聲で叱り付けると、初めて正氣になつたと見えて、不思議そうに邊りを見廻はした末、急に恐縮して、茲に至つた一部始終を物語つた。

其の話に依れば彼は鯨肉の賣子であるが、それのみでは生活が出來がたいので、夜は町内の夜警に雇はれて居る。此の日は露島の知人の許で、したゝか正月酒の馳走になり歸家し、例の如く夜警に出掛けた。併し終日の疲勞と酒の醉で眠むくてたまらず、無我夢中に偶ま門の開いて居た僕の家に飛込んだ儘、此の始末に及んだのであるといふ。そういへば玄關脇に夜警と書いた提灯が倒れて居り、拍子木が置かれてある。仔細を糺せば馬鹿馬鹿しくもあり、又同情すべき點もあるので、强く叱ることもならず、其の儘歸家せしめた。

其の後、鯨尾羽毛と呼び歩るく彼、首をすくめて拍子木を打ちつゝ夜廻はる彼を屢々見掛けたが、其の度に僕は先きの夜の事を想出して、獨り苦笑を禁じ得なかつたのである。

## 冬の句

中村烏堂

菊も折りじまひの緣から上り下りして此家
今朝はことさら寒く茶を入れる泊り客と
澁ぬける夜頃の柿桶に手をさし入る
子の足袋買（注用足）師走の町の人出に押されて
松葉賣の牛の坐つてゐるかどをはいる
支那人の窓今年の水仙の出し見て過ぐる
朝飯すまして暫し坐る障子に日のさしてくる多
曉江の一トところ鴨群のたつ今朝は立つ宿
窓にさしてくる枯木の影の太としく
午後はある石がけ下の日溜りの草につく鳥



程にも感じがない、全く大笑ひさせあがると謂ひたくなる、彼等は酒の害を說く前に酒の德を究めた

乙『氣の利いたことを云つてるなそうして冷で飲んだか、燗で飲ん

午後はある石がけ下の日溜りの草につく鳥



# 酒禮讃を禮讃す

井上賢太郎

十二月號の本誌には禮讃が三編も載せられてあつたが就中第一番に目に着いたのは中島さんの酒禮讃の一編だ、之を通讀するに吾人上戸が常に抱懷せる総てを道破したる會心の一大文字である、爰に蛇足ながら拙稿を草して酒禮讃を更に禮讃せんとするものである。

吾人上戸と雖も大酒の非なる事は之を肯定する、併し適量の飲用は決して害ありとは認めない、否寧益ありとして之を勸むる者である、浴後晩酌の一盃は終日の疲勞を醫するに十分である、陶然として微醉を催ふす時総ての邪見を去り無我の境涯に入る處一種の禪味ありと謂へる、斯くて活動の精力を養ふ一要素ともなるであらう。

此見解に於ては酒は排すべきものではなくて却つて勸むべきものとなるのである、禁酒を唱道する輩は畢竟此消息を解し得ないからである、爰に於て啓蒙一番酒の禮讃を高潮する要が起るのである、由來禁酒を叫ぶ輩が其昔飲酒家であつたが驟然として其害を悟り自ら發心禁酒し且つ之を他人にも勸めんとならば其處に多少肯ける處がないでもないが如何せん其大部分が元來下戸で酒の實害なるものを痛感しての議論でないから一種の好事心から起る賣名運動位にしか受取れない、殊に屑々たる女流禁酒論者に至つては沙汰の限りで一顧に價しないどころか犬の遠吠程にも感じがない、全く大笑ひさせあがると謂ひたくなる、彼等は酒の害を說く前に酒の德を究めたかどうか。杜甫の詩飲中八仙歌に『知章騎馬似乘船。眼花落井水底眠。汝陽三斗始朝天。道逢麴車口流涎。恨不移封向酒泉。左相日興費萬錢。飲如長鯨吸百川。銜杯樂聖稱避賢。宗之蕭洒美少年。舉觴白眼望青天。皎如玉樹臨風前。蘇晉長齋繡佛前。醉中往々愛逃禪。李白一斗詩百編。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。張旭三杯草聖傳。脫帽露頂王公前。揮毫落紙如雲煙。焦遂五斗方卓然。高談雄辯驚四筵』とある、此の詩趣を味ふ時に無限の酒德を感得せずには居られない、知章は斯る酒豪にして尙ほ八十六歲の長壽を保つたと傳へられて居る、それから萬葉集の大宰帥大伴卿讃酒歌に

しるし無きものを念はずば、一つきの濁れる酒を飲むべくあらし。

と云ふ文句がある、是れなんか全く前に述べた醉中に無想の境涯ある事を裏書きしたる名句である、其他にも大伴卿の酒讃歌は澤山ある。

酒の名を聖と負はせしいにしへの大き聖の言のよろしさ。

古の七の賢しき人等も欲りせしものは酒にしあらし。

賢しみ物いふよりは酒のみて醉ひ泣きするし益りたるらし。

云はん術爲む術知らにきはまりて尊きものは酒にしあるらし。

かなかなに人とあらずば酒壺になりてしかも酒に染みなむ。

あな醜、賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似む。

是れ位酒を讃へたら遺憾なしである、古聖の酒德を讃ふること洵に如斯である、殊に我國に於ては神を祭るに淸酒を供へる、祭壇に酒を盛りたる一對の德利が饌へられたる處に自ら森嚴とこうごうしさとが存する、日本酒と日本刀は櫻と共に大和魂の表徵である、此意味に於て酒を禁ずるは吾國粹を滅却し且つ國民性を破壞する者と云つて宜しい、如上の事理に想倒せずして輕々に禁酒を叫ぶ杯は片腹痛い、畏くも天長節を始め新年其他百般の祝祭に際し假りに酒を缺ぎたりとせば如何、杯を擧げて聖壽萬歲を壽ほぐ事も叶ふまじ、然らば何をか酒に代へんとする、萬歲を唱へて汁粉を吸ふか、大福餅をかじるか、但しは又サイダーを飲むか、紅茶コーヒーの類を用ひるか、三三九度の杯には水を盛るか湯を盛るか、斯くても祝賀の氣分が存するか、階老同穴を契る一世一代の結婚式に水盃をして心地がよいかどうか、如何に禁酒論者と雖ども此不調和を悟る位の明はあるだろう、德の方面から觀た酒は此位に止めて置いて、此度は國庫の收入の方面から見ても酒は相當に禮讃せらるべきものである、一ケ年の酒稅は約二億三千餘萬圓で全國稅の約三割を占めて居る、朝鮮総督府の総豫算よりも三百萬圓計り上手を超して居る、して見ると酒呑黨は國庫に取つては最上のお客樣だ、然るに此上等客の事を醫家の方では飲酒癖とか、飲酒常習者とか稱へられる樣であるが是れでは宛然で罪人扱だ、甚だ心得ぬ次第である、ソンナ事はどうでも可いが全體禁酒なんて云ふ事は大藏省が承知すまい、二億三千萬圓と云ふ立派なお得意を此せち辛い世の中にどうしてさうムザムザと捨てる筈がない、それに大藏

# 京城雜筆

省計りではない、造り酒屋の本家本元灘の御連中やお江戸の大問屋筋、新川の兄イが承知しネーと出るだろう、まだそれだけでは濟まぬ、お嬶德利とお銚子の本場たる九谷、清水、伊萬里の瀨戸物屋さんが向鉢卷で飛出して來るだろうそうなると大變な騷ぎになる、恐ろしや〳〵まア禁酒なんて野暮な論をするよりも、もう忘年會の季節になる新年は來る、何んと云つてもお酒でなくてはならぬシーズンが到來した、此際街頭に立つて酒の德でも絶叫した方が賢明なやり方ではあるまいか、終りに臨んで中島長作先生に敬意を表す。

（十二月七日夜於天安溫突稿）

## おまわりさんの今昔

藤井國兄

近頃は何處の宴會に行つても、『こゝは朝鮮北端の』が大流行である。宴、酣にして杯盤狼藉、必ずや此の俗謠を聞く、蓋し國境警備の苦心の存する處を歌つたものであろう。又た本年の鮮展には、『夫は警備に』と題する繪畫が最も呼聲が高かつた。

由來警察官ほど實社會と密接な關係に立つものはない、今は巡査だといふ名稱が附せられて居るが幕末當時は、俗にドンドコ廻り又は三尺棒と呼んだものらしい、當時の官名は巡羅卒と稱して居た。

『明治事物起原』といふ書物にこんなことが書いてある。『安政六年六月より横濱村を交易場とし其翌年頃より神奈川奉行龍川播磨守の取計ひにて居留地警衛の巡羅卒を創むるに至れり、役所附下番の中にて少し劍道に達したる者を巡羅卒とし夜間外人居留地を巡視せしめたり、二名の人足、各提灯を携へて先列となり、其の次に一名の人足太鼓を打鳴らし、最後に二名の巡羅、太鼓の音に足並揃へて巡行せり、巡羅の服裝は木綿柿色に丸に旭の字を染め拔きたる三所紋の割羽織、木綿崩黃に水玉を染めたる裁付袴を穿ち兩刀を帶し鐵製陣笠を戴きたり、其樣奇異なれば外人常に失笑し、市民は之を旭字廻り又はドンドコ廻りと唱へ罵り合へり』とあり。

此の巡羅卒の名稱が明治の世となつて羅卒と變り、それが明治五年の末に『巡査』と改稱さるゝに至つた。而して其の巡査が帶劍するに至つたのは明治十五年十二月以來のことである。

巡査が三尺の樫棒を持つて居た關係上、俗に三尺棒と稱して居た當時の狂詩に『任軍三尺棒、給輕五圓半』などいふ句があつた。又た我物の端唄のモヂリとして、次の樣な端唄が流行したとある。

『我物と思へは輕し樫の棒、上の恩義を笠に着て、雪のあしたや風の夜は、そぎ袖寒くポリス立く、待つ身はつらき御給金、實にやる瀨がないわいな』

など〻其の勤勞と薄給に同情した俗謠が多かつたといふことである今流行しつゝある國境警備の唄と相對比して感轉々。嗚呼何れの時代に於ても巡査は給薄くして勞多き役目かな。

## ◈寄せあつめ

吉田莊一

◎今度京日副社長として新任して來た松岡正男君は、前の白頭老人よりは、ヨホド好いらしい。

◎第一人相が違つてゐる。松岡君は見るから春風駘蕩だ。ちよつと篠田博士のわかい時に似てゐる

◎立派な學者だから、丸山圭筆と轡と並べて陣頭に立つたら、京城の言論界も少しは賑はふであらう。

◎青柳南冥氏が、今度『明智光秀』といふ大著を出すらしい。南冥氏ていふと、もう彼是れ十年も前から、光秀を語り光秀を調べてゐたものである。自信ある作だから、これは讀めること請合だ。

◎井上敬氏の『牢島に聽く』もいよ〳〵三千部を賣切つてしまつたらしい。といへば、著述成金と早合點してはいかん。そこは、井上氏のことだ、金は十分の一も集らぬとは、少々氣にかゝる。

◎話は、電氣のことに轉ずるが平壤の電氣府營問題で、大に男をあげたのは、府尹の松井君で、すつかり男を下げたのが例の宮川五郎三郎老人。

◎結局百三十餘萬圓で、賣收話はまとまつたが、最初宮川老の頑張り方は、二百萬圓一文切れても……といふ鼻息であつたが、緣日の植木と同樣だん〳〵退却に及んで、前記の値段で手打ちとなる。松井府尹にして見ると、初めッから終りまで、百三十萬圓を固執しとう〳〵會社を屈服させた。信助えらいといふことになるのである

## 明松の話

の歌に門松の事あり。

我思ふ君がすみかのおもかけは
松たつ門の春のけしきに

和民族の一員として永久に此の良風習を存續すべきことを絶叫するのである。

# 門松の話

松嶋惇

新玉の年の初を祝ふ門松に就て其の起源沿革を記して見よふ。先づ門松は俗に松飾と稱し、我が邦古來よりの風習で世界萬國には之れ無し、其の起源に就き種々の說あれど何れともたしかならざるも今より約八百八十年前（後一條天皇後朱雀天皇の御代）惟宗孝言の詩に、

占期百日潔齋處、正月春中閉四墉、持案法華聽聖説、鎖門賢木換真松、西方晚觀素無意、南無曉聲令不慵、載土石山君所樂、我猶致信是金峰

右の自註に

近來世俗皆以松挿門戸。而余以來堅木換之故云

とあり。多分同時代よりのしきたりにあらずやと思はる、後ち四十六年を經て堀河天皇の御代に至りては和歌にも門松をよみ入れたのがあるので其の證と爲すことが出來る、堀河院百首の藤原顯季卿除夜の歌に

門松をいとなみたてるその程に春あけがたに夜やなりぬらむ

とあり又俊惠法師の林葉集に正月三日人のもとにまかりたりしに中門に松をたてゝ祝はれたりしかば

春にあへる此門松をわけ來つゝ我も千代へんうちに入りぬる

又山家集に

門毎に立てる小松にかざされて宿てふやどに春は來にけり

降て後鳥羽天皇建久六年（七、三一年前）に源頼朝と蘇鎭和尚贈答の歌に門松の事あり。

我思ふ君がすみかのおもかけは松たつ門の春のけしきに

と詠めり、後また南北朝（約五百九十年前）のころほひ記るされたる徒然草に、

かくて明ゆく空のけしき、昨日にかはりたとは見えねど、ひきかへてめづらしきこゝちぞする大路のさま松たてわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またなくあはれなれと云々

とあるより見れば當時も現今と同じく戸毎に門松を樹てたることは明かである、箇樣に往古は松のみを門に樹てたりしが竹を立て添ふるに至りしは何年頃なるや不明なるも足利時代應永（五一五年前）年頃にものした世諺問答一條禪閣の答に、

門の松たつる事はむかしよりありきたれるなるべし、賤が家居は大かに封戸なるによつて民戸と申待れどむかしは一町のうちを五丈づつにわりて門を立てしかば八門ありしなり、その中に賤が家居をつくり侍べれば門なかるべきに非ずその門の前に松竹を立て侍り松は千とせをちぎり竹はよろづ代を限る草木なれば年の初のいはひ事にたて侍るべし云々

とあれば同時代頃には確かに竹を添へたること明かである、門松を立つるの風習は禁裏又は公家より出でたるものでないと云ふことであるが德川時代に至りては將軍家を初め武家等に至る迄總て其の分に應じ門松を樹つることになつたのである、近來一部のハイカラ人種は此の善良な昔ながらの風習を廢止すべしと論じて居るのであるが之はもつての外である。私は大和民族の一員として永久に此の良風習を存續すべきことを絶叫するのである。

## ◈お禮とお詫

編輯同人

◎本社は、滿鐵軍役安藤又三郎氏に、厚く御禮を申し上げなければならぬ、氏が京城存任中も、いろ〳〵お世話になつたが、今度本社が小社屋を建てたについて『どうぞ確かりやつて貰ひたい』といふ激勵的書面と共に、思ひ設けぬ御配慮を蒙つた。少なからざる御援助を頂いた。茲に謹んで御厚禮申し上げる。

◎名前を出してくれるなといふコトワリ書き付で、東京の某氏、全南某氏からも、意外の御配慮に浴した。社中一同非常に喜んでゐるのである。

◎正月號ドサクサして、やつと十日締切り、そのあとから良い原稿がドシ〳〵到着（左記）。惜しいとは思ふが致方がない。二月號に讓ることにした。皆樣にお詫び致します。

蒲原久四郎氏　津田常男氏
篠田治策氏　岩本善文氏
守屋德夫氏　柄澤四郎氏
鮫島宗也氏　園部敏氏
川上きく子氏　山口泉氏
濱口良光氏　江原善槌氏
足立丈次郎氏　尹政博中氏
堀一知郎氏　廣江澤次郎氏
河井英夫氏　安達清次郎氏
木村清一氏　岩淵山與水氏

◎二月號原稿は、正月十日締切り、一月の廿五六日に出したいと思つてゐる。暮から歳の始めにかかること故、蒐集難に弱ること〻思ふ。お願ひしたら、どうぞ奮つて御執筆を。

# 正月雜記

永樂町人

○

一年の過ぎ行くことの早いのには、今更らながら驚かざるを得ぬ世間並に正月を祝つてゐるが、時たま、鏡に向いて、だん〳〵年寄りめいて行く自分の顏かたちを見ると、何としても寂しい感じに打たれずには居られない。

○

それにしても、よくこれまでに生きのびて來たことだと、つくづく思ふこともある。自分は、元來良い體質ではない。三十まで持てるだらうかと、母親などは心配した位である。頑健を誇つた友達の幾人かが、とうの昔に鬼籍に入つたのに、ひよろ〳〵の自分が、今尙ほ長らへ、生きてゐるのが、せめてもの儲けかも知れない。死んでは何んにもならぬのである。

○

正月も斯う寒くては、勇氣凛々といふ譯に行かぬ。人間の力で、三ケ日を暖くする工風がないとすれば、これをモット先きのことにしたらどんなものか。埃及の古代には、夏正月をやつたこともある秋の初めに、正月をしたこともある。人間の申合せで、いつでもやれることだから、春分などを、正月としてほどいいふものだらう。

○

今の正月は、大體太陽が南の方へ行き切つて、これから再び北方へ歸らうといふ時を以て、正月と定めたのである。だから赤道以北の住民にとつては、ぶる〳〵慄え乍ら、屠蘇を酌むといふのが、何處でものならはしである。春分といふのは、太陽が赤道の直上に歸つた時のことであり、地球は、兩半球に公平に光りをめぐまれる析である。晝夜の時間も正分せられてゐる。舊正月といふのは、ほゞこの時分である。花の咲くのももう間がないのである。これなら勇氣凛々と、知邊を訪ね廻つて、大にメートルをあげ得る。すべて人間の約束だから、何も是非太陽曆でないといかんといふ理屈はない

○

それにしても、正月いふものゝ威嚴や、歡喜も、だん〳〵薄らいで行くのは、是非もないことである。昔は人間が酒を飲み、餅を祝ふといふやうな機會は餘り多くなかつた。ところが近頃は、會、催ほし、つどひといふ風なものが馬鹿に多く、人々の頭や腸は、宴會酒で、だぶ〳〵となり、今更ら正月などといつても、少しも緊張味を覺へないのである。自分は世の中が少し奢り過ぎてゐるといふことをしみ〳〵思はざるを得ぬ。

○

歐米人には、マダ宗教があつて一週一回は、跪き、禱り、懺悔するといふ生活もある。然るに日本人には少しもそのことなくして、燕飲、歡樂のみが無限につづいてゐる。考ふべきことであるまいか

○

和泉式部の歌に

むらさきの袖を聯ねて來るかな
春來ることはこれぞよろしき

平凡な歌であるが、古人が正月を珍らしがり、感激してゐる心持が言外に溢れてゐる。これに就て思ふのは、その時代の人々が、紡織法や染色法の幼稚からして、たゞ一色の衣物を着てゐたことであるこの歌にもあるやうに、賓客は皆んな紫の袖をつらねて、年賀に來たのである。然るにその後それらの技巧が、だん〳〵精緻、複雜となり、今日では光明、單一といふやうな色調は、むしろ卑俗視され澁く、くすんだ、間色的色彩でないと、人々は喜ばぬといふ風になつた。いつか外國の觀察者が、帝劇で、日本婦人のつどゐを見て、『この國には、女は年寄りばかりか、これは何といふ暗い色彩だ』といつたことがある。この日本人の色覺は、我々の五感の老衰を意味し、民族の將來の運命を暗示してゐるのではないかと心配する。

○

朝鮮の少女が、紅い袗を着てゐるのを見ると、目が醒めるやうに思ふ。清新の氣にうたれる。我々も、元氣をもとの單一、生々に還へし、眞に清健な心持で、正月を迎へ、人生を改め眺めたいものである。

## ◇極樂往生錄

吉田莊一

◎京日の宮部先生、着任した時は、ヒドク弱つてゐた。時計もなければ洋服もない。廣告の石川君に賴んで『君、何んとかしてくれ給へ』

◎それが歸る時は、涙金五千圓也……それに車にも乘らず貯め込んだ貯金六千圓、合計一萬一千圓也……これなら同じ首切りでも、先づ極樂往生の部か。

◎朝鮮經濟日報が、長谷川町に進出し、日報のあとへ帝通移轉。

# 乾物の御用は！

慶南巨濟島特産

櫻ぼし
スルメ
鹽乾魚
海藻
カマボコ
その他

御進物用として美しき容器とり揃へ居り候

ブリ、サハラ一本賣の御注文に應じ申候

近く名産アワビの麹漬け着荷いたし候

京城府本町三丁目二七

太田種次郎

京城支店

御挨拶

今度京城日報社を辭しあつしがけにて右乾物店を經營致し候に就てはどうぞ宜しく……御引立の程願上候

昭和二年正月

田中守寛


へ歸らうといふ時を以て、正月と定めたのである。だから赤道以北言外に溢れてゐる。これに就て思ふのは、その時代の人々が、紡織

◎朝鮮經濟日報が、長谷川町に進出し、日報のあとへ帝通移轉。

眞に朝鮮を見むと欲するものはこの赤裸な民族のこゑを聽け！

政治家教育家文藝家諸君の必讀文字！

# 朝鮮民謠研究號

## 眞人新年特輯號

本號に限り特價
金八拾錢送料二錢


朝鮮民謠の概觀……崔南善
抒情詩藝術としての民謠……井上收
朝鮮民謠の味……濱口良光
朝鮮の民謠に現はれたる諸相……岡田貢
朝鮮民謠の特質……難波專太郎
民謠に現はれたる朝鮮民族性……李光洙
朝鮮の民謠……今村螺炎
青孀民謠小考（譯文）……李殷相
朝鮮民藝に就て……淺川伯教
火田民の生活と歌謠……道久良
朝鮮の民謠に關する雜記……市山盛雄
◇朝鮮文壇鳥瞰……箕山默郎
◇旅人雜記……井上雪下
短歌篇　細井魚袋、道久良、葛木梓、江口貢、近江惠子、吉田芳之助、松永ただし、都留未知二、相川希望、古松鑒久、石井龍史、市山盛雄外半島歌壇新進數拾氏の力作を滿載す



發行所　京城蓬萊町四ノ十一　振替京城六貳七四番　眞人社

# 奉　悼

中村烏堂

山田一隆

大垣丈夫

車田篤

小熊九萬造

佐藤七太郎

鷹松龍種

平井三男

井上要二

岡村介石

# 奉　悼

飯泉幹太

瀬戸潔

田口耕平

矢鍋永三郎

守屋德夫

野田新吾

松本光

森悟一

中村誠

津留崎一

# 奉　悼

島原鐵三

西村宗一

榎本隆

有馬純吉

小野久太郎

仁川 岡田恭藏

仁川 小林良藏

京城黄金町五ノ七 龜屋染工場

仁川 岡本保誠

天安 宮地義清

# 奉　悼

朝鮮火災海上
保險株式會社

不二興業株式會社

鈴木商店
京城支店

# 奉　悼

朝鮮郵船株式會社

東洋拓殖株式會社
京城支店

漢城銀行

# 奉　悼

奉悼
昭和二年一月
京城府本町一丁目
大澤商會

奉悼
昭和二年一月
日本紙業株式會社
京城支店

奉悼
昭和二年一月
京城酒商組合

奉悼
昭和二年一月
鎭南浦
電氣株式會社

奉悼
昭和二年一月
京城府西四軒町
南山莊

奉悼
昭和二年一月
京城料理屋組合
取締
澤田清
京城府南山町二丁目
電話百四十九番

# 奉　悼

| | | |
|---|---|---|
| 奉悼<br>昭和二年一月<br>京城府漢江通り七<br>田川常次郎 | 奉悼<br>昭和二年一月<br>京城<br>帝國大學 | 奉悼<br>昭和二年一月<br>仁川<br>米豆取引所 |
| 奉悼<br>昭和二年一月<br>陣内茂吉 | 奉悼<br>昭和二年一月<br>京城醫師會 | 奉悼<br>昭和二年一月<br>京城鍾路一丁目<br>濱吉太郎 |

# 奉　悼

西崎鶴太郎

川添種一郎

木浦府
福田有造

全南光州
白石甚吉

全北裡里
佐々木久松

釜山日報社
芥川正

鎭南浦
川本竹松

鎭南浦
重枝太索

鎭南浦
岡嶋英太郎

東京建鐵株式會社
堀一知郎

# 悼奉

富田儀作

安藤又三郎（大連市）

桑野健治（仁川）

林倉次郎（仁川）

川上十郎

笠神志都延

久松前平

大島勝太郎

山田新一

方台榮

# 奉　悼

古河電氣工業會社
京城出張所

寺尾猛三郎

京城新聞社

# 奉　悼

三井物産
京城支店

京城電氣株式會社

京城手形交換所
組合銀行

# 奉　悼

鈴木竹麿

土居寛申

富野繁一

鈴木文助

鮫島宗也

林原憲貞

小水眞二

濱井定

中島長作

清谷惠眼

# 奉　悼

渡邊晋

馬野精一

河内山樂三

古宇田巖

渡邊得司郎

片岡喜三郎

齊藤吾吉

木付虎吉

京城本町二丁目
釘本金物店

岩本善文

# 奉　悼

穂積眞六郎

武者錬三

中屋茂樹

薄田美朝

高久敏男

古河隆美

朝鮮土地經營株式會社
川畑俊雄

京城府南大門外
野田源吾

角田廣

南山莊
中原守雄

# 奉　悼

有賀光豐

市川幸右衛門

近藤常尙

權藤四郎介

富田徹三

大澤勝

飯嶋滋次郎

佐々木正太

川井昌一

田村直一

# 奉　悼

電鐵營業哩(廣軌)　三七哩
水力發電出力　七、〇〇〇KW

**金剛山電氣鐵道株式會社**

社長　久米民之助
專務取締役　山内伊平
本社　江原道鐵原
出張所　京城府外往十里
東京丸之内有樂町一ノ一

**京南鐵道株式會社**

# 奉　悼

京城内地人
辯護士會

京城現物
取引市場

本店　京城黄金町四ノ三二
地方部　同南大門通リ鮮銀前
早川堂看板店
電話本局二四七六番

# 奉　悼

蒲原久四郎

堤永市

橋川克彦

平岡光三郎

南部清光

神山喜一郎

洪百鉉

高橋利三郎

吉岡久（仁川）

高畠種夫

# 奉　悼

井内勇

天日常次郎

澤村九平

末森富良

恩田銅吉

大村百藏

淺野健一

足立丈次郎

鄭完圭

岩間元次郎

# 奉　悼

奉悼
昭和二年一月
京城生命保險
同業組合

奉悼
昭和二年一月
京城長谷川町
朝鮮經濟日報社

奉悼
昭和二年一月
朝明舍
京城蓬萊町一五七

奉悼
昭和二年一月
京城南大門通四ノ七六
齊藤合名會社

奉悼
昭和二年一月
京城
料理屋組合

奉悼
昭和二年一月
京城
旅館組合

# 奉　悼

奉悼
昭和二年一月
利根川
齒科醫院

奉悼
昭和二年一月
在東京
麻生音波

奉悼
昭和二年一月
京城明治町一ノ五九
德力本店
出張所

奉悼
昭和二年一月
平壤
大橋恒藏

奉悼
昭和二年一月
釜山日報社

奉悼
昭和二年一月
京城仁寺洞一三六
朝鮮教育新聞社

# 悼奉

櫻井秀專

京城明治町二ノ六二

梅澤吳服店

電話本局二一二一五三三四三番

# 奉　悼

青柳綱太郎

朝鮮商工株式會社
笠原種次

牧山耕藏

齊藤久太郎

森六治

菊池謙讓

鈴木兵作

東京
茂木和三郎

大連
松原純一

金谷要作

奉悼

伊藤憲郎

奉悼

今村鞆

奉悼

井上收

奉悼

中島司

奉悼

廣江澤次郎

奉悼

工藤重雄

## 雜筆と寄稿

一、原稿は毎月十日締切ます。

一、しかし成るべく五日頃までに頂いた方が好都合です。

一、出來るなら一頁以内にお書き下さい。

一、御名前を出すことの出來ぬ原稿は、お載せいたし兼ねます。

一、お願ひした時は、どうか努めて御執筆下さい。お願せずとも、お心つきのことはどうかお書き下さい。

一、雜筆は事實上寄稿家及び讀者の共有物であります。

## 京取市場所屬仲買人組合員

（登錄番號順）

奉悼

有田長
大林浅市
白井友之助
洪殷柱
正崎長之助
金應龍
古川陸治
田中友吉
京城證券株式會社
成清竹松
松山主計
新田耕市
定岡富二
田中道太郎
金潤秀
白樂三
市川幸次郎


細工の御用は本町
德力へ
電本三九三九

金銀白金

地金ノ御用ハ
京城明治町
德力本店出張所
電本一〇八八
一五七二

京城
德



昭和元年十二月廿八日印刷
昭和二年一月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一七〇
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 石川利夫
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一七〇
發行所 京城雜筆社
電話光門三〇六番

# 頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋裝に必要な附屬雜貨部を開設致しました、實用向から高級品迄ズット取揃へ、確かな品を極めて薄利で御便利に御提供申します、何卒『丁子屋の洋服』同樣御評判の程御願申上げます。

## ▲雜貨部品目

帽子、ワイシャツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首卷、ズボン
ツリ、ハンカチーフ、小供セータ、下着類

**毛布新着**

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寢具用として必需品

京城南大門通り

# 丁子屋洋服店

電話本局 長二四六三 二二二七 三〇九二 番

休日無し毎日夜九時迄營業
御用の節は店内雜貨部御呼出被下度
市内は御一報次第現品持參貴覽に供し申候

冬知らぬ
溫泉の旅

年末年始の御保養は
溫泉に、溫泉は設備完整
料金低廉且閑靜な左記に

東萊溫泉　釜山、釜山鎭より電車自動車
儒城溫泉　大田より自動車四十分
溫陽溫泉　天安より私鐵四十分
信川溫泉　沙里院より私鐵二時間
龍岡溫泉　鎭南浦驛より自動車二時間
朱乙溫泉　朱乙驛より自動車二十分

朝鮮總督府鐵道局


京城雜筆（第九十五號）　大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可　昭和二年一月一日發行（毎月一回一日發行）